

日本語の移動表現における二格名詞句の場所性に関する研究

著者	申 貞恩
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2017
報告番号	12102甲第8443号
URL	http://doi.org/10.15068/00152175

筑波大学博士（学術）学位請求論文

日本語の移動表現における
二格名詞句の場所性に関する研究

申 貞恩

2017 年度

目次

第 1 章	序論	1
1.1	研究の背景と目的	3
1.2	本論文の研究範囲	11
1.2.1	移動表現	11
1.2.2	人の物理的移動表現	13
1.3	本研究の課題および構成	14
1.3.1	本研究の課題	14
1.3.2	本論文の構成	15
第 2 章	先行研究	18
2.1	名詞の場所性に関する研究	18
2.2	名詞の空間化「トコロ」に関する研究	32
2.2.1	二重場所化	33
2.2.2	空間化の省略	35
2.3	移動動詞の分類	39
2.4	本研究の課題と意義	43
2.4.1	本研究の課題	43
2.4.2	本研究の意義	44
第 3 章	調査概要および分析方法	46
3.1	言語データの収集法	46
3.2	調査構成	48
3.2.1	移動構文	49
3.2.2	名詞	50

3.2.3	移動動詞	55
3.2.4	調査項目の設定	58
3.2.5	調査用紙作成上の注意点および限界点	60
3.2.6	調査実施の期間および調査協力者	63
3.3	分析方法	63
3.3.1	データの処理	63
3.3.2	データの解釈	64
3.3.3	共通項目および二格とへ格の分析結果	65
3.3.4	容認度の値と変化幅の求め方	66
3.4	まとめ	68

第 4 章 容認度評定調査による検証および分析結果 70

4.1	二格名詞句の場所性	70
4.1.1	研究背景および研究課題	70
4.1.2	分析方法	70
4.1.3	結果	72
4.2	二格名詞句の場所性と移動動詞との関係	75
4.2.1	研究背景および研究課題	75
4.2.2	分析方法	76
4.2.3	結果	78
4.2.3.1	結び付く動詞による場所性の変化	78
4.2.3.2	名詞の場所性と移動動詞との関係	80
4.3	名詞の場所性と「トコロ」	88
4.3.1	研究背景および研究課題	88
4.3.2	分析方法	90
4.3.3	結果	91
4.3.3.1	直接移動構文と間接移動構文の関係	91
4.3.3.2	二重場所化と空間化の省略	94
4.4	まとめ	98

第5章 名詞の場所性と移動動詞との関係性に関する考察... 101

5.1 名詞の場所性に影響する要因	101
5.1.1 名詞の場所性と経路.....	103
5.1.2 名詞の場所性と具体性	106
5.1.3 名詞の場所性と大きさとアフォーダンス	109
5.1.4 まとめ	117
5.2 名詞の場所性と移動動詞との関係	117
5.2.1 「行く」「来る」	118
5.2.2 「着く」	121
5.2.3 「戻る」「帰る」	123
5.2.4 「入る」「出る」	127
5.2.5 「寄る」	130
5.2.6 「向かう」	133
5.2.7 「進む」	136
5.2.8 「至る」	139
5.2.9 「上がる」	141
5.2.10 「近づく」	145
5.2.11 まとめ	147
5.3 名詞の場所性と「トコロ」	150
5.3.1 「トコロ」と動詞の関係.....	150
5.3.2 二重場所化と空間化の省略	154
5.3.3 まとめ	158

第6章 本論文のまとめと今後の課題

6.1 本論文のまとめ.....	160
6.2 今後の課題.....	164

付記

参考・引用文献	167
資料 1	174
資料 2	190
謝辞	200

図一覧

図 1.1	本論文の構成	17
図 2.1	移動動詞の分類（宮島 1972 : 204）	39
図 3.1	移動体と物体の位置	53
図 3.2	移動動詞選定の流れ	56
図 3.3	尺度と情報量（竹内・水本 2014 : 34）	64
図 3.4	容認度値の計算式	66
図 3.5	移動表現文の容認度の例	67
図 4.1	各名詞の予想容認度値	71
図 4.2	各名詞の容認度値	72
図 4.3	「N = V」の移動構文における各名詞の容認度値	74
図 4.4	名詞の分類例	77
図 4.5	折れ線グラフのサンプル	77
図 4.6	各名詞における容認度の変化幅	78
図 4.7	来る（SD 1.7）	81
図 4.8	行く（SD 1.6）	81
図 4.9	着く（SD 1.6）	82
図 4.10	戻る（SD 1.5）	82
図 4.11	入る（SD 1.4）	82
図 4.12	帰る（SD 1.3）	83
図 4.13	出る（SD 1.1）	83
図 4.14	寄る（SD 1.0）	83
図 4.15	向かう（SD 0.9）	84
図 4.16	進む（SD 0.8）	84
図 4.17	至る（SD 0.6）	84
図 4.18	上がる（SD 0.5）	85
図 4.19	近づく（SD 0.2）	85
図 4.20	各階層における動詞別の容認度値	87

図 4.21	各名詞に対する両構文の容認度値（名詞の場所性順）	92
図 4.22	各名詞に対する両構文の容認度の変化幅	93
図 4.23	各名詞に対する両構文の容認度値（容認度値の差順）	95
図 5.1	名詞の場所性の連続性	101
図 5.2	直接移動構文における各名詞の容認度値と属性	102
図 5.3	機関カテゴリーに属する名詞の容認度値	103
図 5.4	「名詞＋助詞（ニ・ヲ）＋行く（いく）」の出現頻度の割合（％）	104
図 5.5	名詞の具体性	107
図 5.6	相対名詞	108
図 5.7	イラスト付きの容認度評価調査	110
図 5.8	移動体と行き先となる対象の相対的なサイズ関係による容認度の値	112
図 5.9	各階層に対する「行く」「来る」の容認度値	119
図 5.10	各階層に対する「着く」の容認度値	121
図 5.11	各階層に対する「戻る」「帰る」の容認度値	123
図 5.12	名詞の場所性が重要な変数となる度合いの関係 1	126
図 5.13	各階層に対する「入る」「出る」の容認度値	127
図 5.14	各階層に対する「寄る」の容認度値	131
図 5.15	各階層に対する「向かう」の容認度値	133
図 5.16	名詞の場所性が重要な変数となる度合いの関係 2	134
図 5.17	各階層に対する「進む」の容認度値	136
図 5.18	「進む」の意味関係	138
図 5.19	各階層に対する「至る」の容認度値	139
図 5.20	各階層に対する「上がる」の容認度値	142
図 5.21	各階層に対する「近づく」の容認度値	145
図 5.22	ニ格名詞句における移動動詞の特性と名詞の場所性との関係...	149
図 5.23	直接移動構文と間接移動構文の特性	151
図 5.24	各構文における動詞別の SD	152
図 5.25	容認度の高い動詞と低い動詞の割合	153

図 5.26	「トコロ」と結び付きにくい場合と結び付きやすい場合	155
図 5.27	第 3 階層に対する各動詞の容認度値	157

表一覧

表 3.1	5 段階評定の例	48
表 3.2	調査対象の名詞 1	54
表 3.3	調査対象の名詞 2	54
表 3.4	調査構成の詳細	59
表 3.5	調査用紙の一部	61
表 3.6	各 Part の回答者数	63
表 3.7	分析対象となる各 Part の回答者数	64
表 4.1	サンプルデータ 1	71
表 4.2	サンプルデータ 2	76
表 4.3	各名詞の容認度の変化幅と標準偏差値	79
表 4.4	二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞	96
表 4.5	二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい N+V	97
表 5.1	調査概要	111
表 5.2	「行く」「来る」の行き先となる各名詞の容認度値	119
表 5.3	「着く」の行き先となる各名詞の容認度値	122
表 5.4	「戻る」「帰る」の行き先となる各名詞の容認度値	124
表 5.5	「入る」「出る」の行き先となる各名詞の容認度値	127
表 5.6	「寄る」の行き先となる各名詞の容認度値	131
表 5.7	「向かう」の行き先となる各名詞の容認度値	134
表 5.8	「進む」の行き先となる各名詞の容認度値	136
表 5.9	「至る」の行き先となる各名詞の容認度値	139
表 5.10	「上がる」の行き先となる各名詞の容認度値	142
表 5.11	「近づく」の行き先となる各名詞の容認度値	146
表 5.12	名詞の場所性と移動動詞の特性	148
表 5.13	二重場所化	156
表 5.14	空間化の省略	157
表 6.1	研究課題とその解答	161

凡例

- (1) 例文の文頭、または分析対象語句の前に付された「*」は非文法的であること、また「??」は、不自然であることを示す。そして、「?」はやや不自然であることを示す。
- (2) 例文が先行研究またはウェブページからの引用である場合は、()内に明記する。ただし、ウェブサイト名が長い場合は、<https://goo.gl> から簡略化する。また、コーパスからの引用である場合は、()内にコーパスの略称を示す。出典を付していない例文は筆者による作例である。なお、筆者は日本語母語話者ではないため、各例文は、日本語母語話者のチェックを受けた上で論文に掲載した。
- (3) 図表など、章ごとに通し番号を付してあるが、既に表示したものを再び示す場合は、既出の番号を本文中に記す。
- (4) 同一文中で、複数の語句 (A と B) が置き換え可能である場合、{A、B} のように示す。
- (5) 引用文中、引用者によって省略した箇所は、〔中略〕または〔以下省略〕として示す。
- (6) 注は、各ページ末に挙げる。

＜略記表＞

AD	adessive	所格
LOC	locative	位格
PROG	progressive	進行形

第1章 序論

本研究は、日本語の移動表現における二格名詞句の場所性について考察するものである。

移動表現は空間関係を表すものの一つで、文化の違いを問わずにどの言語にも備わっている極めて基本的な言語表現であろう。したがって、移動表現を探ることによって、最終的には人間の空間認知の仕方の解明にも繋がると言える。しかし、移動表現は各言語固有の体系の中で表現されるため、言語が異なればその表現形式なども違ってくる。

日本語の移動表現における特性として、多くの研究は行き先となる名詞の場所性を指摘している（寺村（1993 [1968]）、田窪（1984）、奥田（1983 [1962]）、鈴木（1972）、森山（1988）、荒川（1992）、王（2009）、本多（2013）など）。(1a) は「学校」、(1b) は「机」を行き先として捉えている移動表現文である。

(1) a. 斎藤さんは学校へ行った。

b. *机へ行きなさい。 （荒川 1992 : 71 より一部引用）

(1a) は言えるが (1b) は言えない理由について、従来の先行研究では (1a) の「学校」は場所性のある名詞であるが、(1b) の「机」は場所性のない名詞であるためであると指摘している。つまり、日本語の場合、移動の行き先となる名詞の場所性によって、移動表現文の自然さが異なるのである。そして、場所性が欠けている名詞を行き先として捉える際は、(2) のように「ところ」などの形式名詞を付け加えて、空間化する必要があると指摘している。ここでいう空間化とは、その周辺を拡大することによって、そこに位置することができる所を与えることである。

(2) 机のところへ行きなさい。

このような移動表現における特性を日本語教育の観点から考えると、外国語と

して日本語を学習する外国人日本語学習者は、日本語における名詞の場所性を正確に理解・判断し、表現形式にしたがって日本語を産出しないといけないという負担がかかる。

そこで、本研究は日本語の移動表現における二格名詞句の場所性を明らかにするため、日本人母語話者を対象に容認度評定調査法を用いて調査を行った。その分析の結果、まず名詞の場所性は、場所性の強い名詞（例：家）から場所性の弱い名詞（例：消しゴム）まで連続的であることを明らかにした。そして、名詞に内在する場所性は、結び付く動詞との関係によって、場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞へ、あるいは場所性の弱い名詞から場所性の強い名詞へと名詞の場所性の度合いが変わることを明らかにした。たとえば、同じ名詞にもかかわらず、「*彼はエアコンに行った」は言えないが、「彼はエアコンに近づいた」は言えることは、結び付く動詞によって二格名詞句の場所性が変化しうることを意味する。

また、行き先となる名詞の場所性と関係する空間化の機能を持つ「ところ」に注目して、名詞の場所性と「ところ」の関係を探った。その結果、たとえば「学校」の場合、「彼は学校に行った」は言えるが、「*彼は学校のところに行った」は言えない。しかし、「池」の場合、「彼は池に行った」と「彼は池のところに行った」は両方とも言えるなど、名詞によって「ところ」との関係が異なることを明らかにした。言い換えれば、名詞と動詞がそのまま結び付く移動構文（N＝Vで、以下、直接移動構文と呼ぶ）と、「ところ」を伴う移動構文（N／ところ＝Vで、以下、間接移動構文と呼ぶ）の関係は名詞によって異なると言える。なお、すべての移動表現において、「ところ」と結び付く間接移動構文は、二格の前項名詞が変わるたびに結び付く動詞との関係も変わる直接移動構文に比べて、結び付く動詞によって二格名詞句の場所性が強くなったり弱くなったりするなどの名詞の場所性の度合いの変化が小さく、それに関わる動詞の数も限られていることを明らかにした。

さらに、「池に行った」「池のところに行った」のようにどちらの移動構文に対しても言える名詞と動詞の特性を探った。その結果、すでに場所性を持つ名詞にさらに「ところ」などを付け加えて空間化する二重場所化、あるいは場所性の欠けている名詞であるにもかかわらず、空間化せずにそのまま動詞と結び付く空間化の省略は、一部の名詞と動詞に対して生じやすい事象であることを明らかにした。これはつまり、「ところ」は名詞の場所性だけではなく、結び付く動詞とも関係し

ていることを意味する。

1.1 研究の背景と目的

日本語の移動表現における特徴として、寺村（1993 [1968]）、田窪（1984）、奥田（1983 [1962]）、鈴木（1972）、森山（1988）、荒川（1992）、王（2009）、本多（2013）などは、名詞の場所性を指摘している。次の（3a）は「駅」「教室」「東京」、（3b）は「机」「私」「箱」を行き先とする移動表現で、（3a）と（3b）両方とも主体の移動を表す移動表現¹である。

- (3) a. {駅、教室、東京} へ行きます。
 b. * {机、私、箱} へ来てください。（寺村 1993 [1968] : 8 より一部修正）

寺村（1993 [1968]）は、（3a）「駅」「教室」「東京」は、「— へ行く」「— へ来る」「— へ帰る」にそのまま挿入することができるが、（3b）「机」「私」「箱」は、「トコロ」というような語句を補わなければ非文法的な文ができてしまうことから、「モノ」と区別された「トコロ」の概念を名詞に含ませることができることが、日本語の特異な点の一つであると指摘している。つまり、（3a）は言えるが（3b）は言えない理由は、行き先となる名詞の場所性が関わっているためで、（3a）「駅」「教室」「東京」は場所性のある名詞で、（3b）「机」「私」「箱」は場所性のない名詞であると言える。上に記したように日本語は、「机」「私」「箱」のような場所性のない名詞を行き先として捉える場合、そのまま移動動詞と結び付くことができないため、「トコロ」などの形式名詞を付け加えて、空間化の手続きをする必要が

¹ 松本（2017）によると、移動の事象表現タイプとして移動体が自ら移動する主体移動表現（太郎は学校に行った）、外部からの力によって移動する客体移動表現（＝使役移動表現とも呼ぶ）（花子は息子を学校に行かせた）、そして視線で追うことによって、実際現実には起こっていない移動であるのに、移動しているように表す抽象的放射表現（海が近づいて来た）という3つの移動表現のタイプがある。本論文では、移動体が自ら移動する主体移動表現のみを扱う。研究範囲に関する詳細は、1.2 節を参照。

ある。王（2009）、風間（2013）などは、空間化の手続きによって場所化できると述べているが、厳密にいうと空間は場所と異なる概念である。空間化によって付与されるものは場所ではなく空間であるため、空間化によって場所化できるという解釈は正しくない。空間と場所はある所を指すという点では共通している。しかし、場所はある特定の行為や目的と結び付いている所である。したがって、「撮影する」「避難する」「集合する」など、ある行為を表わす所を指す場合、「??撮影空間」「??避難空間」「??集合空間」ではなく、「撮影場所」「避難場所」「集合場所」という理由も空間と場所が異なる概念を持つためである。そこで本研究では、場所はある特定の行為や目的と結び付いている所で、空間化の手続きによって付与される空間は、特定の行為や目的に結ばれていないニュートラルな所であることを指摘する。

続いて（4）は、行き先となる名詞に「トコロ」を付け加えている移動表現で、（3）に対応する。

- （4） a. * {駅、教室、東京} のところへ行きます。
 b. {机、私、箱} のところへ来てください。

行き先となる名詞と動詞がそのまま結び付く（3）の場合、（3a）は言えるが（3b）は言えない。しかし、「トコロ」を付け加えている（4）の場合、（4a）は言えないが（4b）は言える。その理由は、「トコロ」を付ける空間化は場所性のない名詞に対する手続きで、すでに場所性を持つ名詞に対して空間化を行うことは不適切であるからである（田窪（1984））。したがって、場所性のある名詞を行き先とする（4a）は言えないが、場所性のない名詞を行き先とする（4b）は言えるのである。

このように、行き先となる名詞の場所性の有無によって移動表現の容認度が異なる現象、すなわち名詞の場所性が重要な問題となる現象は、言語によってその度合いが異なる。（5）は、日本語の「*私はドアに行った」に対応する（5a）英語と（5b）中国語、そして（5c）韓国語の移動表現である。ちなみに、日本語の場合「ドア」は場所性のない名詞として捉えられるため、そのまま移動動詞と結び付くことができない。

(5) a. I went to the door.

b. *我 到 門 去
wo dao men qu
私 AD ドア 行く
(=私はドアに行った。)

c. *나는 문에 갔다.
na-nun mwun-ey kass-ta.

私は ドアに 行った。 (田窪 1984 : 9 より一部修正)

田窪 (1984) は、(5a) 英語の「ドア」はそのまま行き先として捉えることができるが、(5b) 中国語と (5c) 韓国語は日本語と同じく「ドア」を行き先として捉えることが困難であることから、日中韓の各言語では場所と非場所は明確に区別されている。これらに対して、英語（及び他の印欧語）では、この区別はそれほど明確ではない。つまり、日中韓語と英語では「場所性」に対する sensitivity が多少異なると指摘している。

また、荒川 (1992)、山梨 (1995) は、日本語と英語の場所表現は (6) のように直接的なパラフレーズの関係にあるものもあれば、(7) のように文字通りには直訳できず、場所・空間領域としての「トコロ」を補完する必要があるものもあるなど、場所ないしは空間領域の表現の仕方が、常に一致するとは限らないと指摘している。

(6) a. Satoo went to school.

b. 佐藤さんは学校へ行った。

(7) a. Go to the desk.

b. *机へ行きなさい。 (荒川 1992 : 71 より一部引用)

また田窪 (1984) は、場所を重要視する言語の間でも場所の扱いに微妙な差異があり、たとえば韓国語は (8) のように有情（主に「人」）は場所と非場所の区別が中和され、英語と同じように「行く」と直接接続できると指摘している。

(8) a. *私に 来なさい。

b. 나에게 오세요.

na-eykey o-sey-yo.

(田窪 1984 : 93 より一部修正)

申 (2016c) は、韓国語は名詞が持つ場所性の有無より有情であるかどうかをより重要視するため、日本語より韓国語の方が相対的に非場所名詞に対して許容的であると指摘している。ここでいう有情とは、人や動物など、自ら動作を行うことができるものを指す。

そして、田窪 (1984) は、(9)と (10) のように日本語では「座る」「入れる」は必ず場所を補語として取る動詞ではないが、中国語では「上」「里」という接辞に示されるように「坐在」「装在」は「上」「里」を付けなければならないなど、表現方法において差異があると述べている。

(9) a. 私は椅子 (?の上) に座っている。

b. 我 在 椅子* (上) 坐 着

wo zai yi zi* (shang) zuo zhe

私 LOC 椅子 (上) 座る PROG

(=私は椅子* (の上) に座っている。)

(10)a. ふくろ (の中) に入れる。

b. 装 在 口袋* (里)

zhuang zai koudai* (li)

入れる LOC ふくろ (中)

(=ふくろ* (の中) に入れる。)

(田窪 1984 : 95 より一部修正)

荒川 (1992) は、日本語では「ところ」が無標 (unmarked) である名詞が、中国語では有標 (marked) である名詞が多いと指摘している。

上述したように、名詞の場所性に対する言語間の違いを日本語教育の観点からみると、外国人日本語学習者においては、まず日本語における場所の概念を理解

した上で、名詞の場所性を区別する能力が必要とされる。そして、学習者自身の母語と日本語の言語間の微妙なずれや表現方法の違いを把握しなければならない。すなわち、外国人日本語学習者が母語の干渉によるエラーを避けて正しい日本語の移動表現を産出するためには、日本語における名詞の場所性の特性を明確に理解する必要がある。

そこで本研究では、移動表現における二格名詞句の場所性を探るため、まず名詞の場所性は、先行研究が示すように場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りであるかどうかを検証する。本章で言及したように、日本語の移動表現において名詞の場所性は文成立に関わる重要な問題であり、名詞の場所性によって移動表現の表現形式は異なる。寺村(1993[1968])、田窪(1984)、奥田(1983[1962])、鈴木(1972)など多くの研究は、名詞を場所性のある名詞と場所性のない名詞に分けている。名詞それ自身に場所性が潜んでいることは、特に言語学的な知識を備えていない人であっても「学校」「公園」「本」「バナナ」「ベンチ」「ベッド」のうち「学校」と「公園」は場所性のある名詞で、「本」と「バナナ」は場所性のない名詞であると概ね判断できることから裏付けられる。つまり、名詞それ自身に場所性が存在しているのである。しかし、「ベンチ」や「ベッド」のように名詞によって場所性判断が困難である名詞もある。また、プロトタイプ (prototype) 理論 (カテゴリーの境界は必ずしも明瞭ではない) から考えても、名詞の場所性を二分法的な見方で場所性のある名詞と場所性のない名詞に分類することには疑問が生じる。以上のことから、本研究では名詞の場所性は、場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りにのみ分類できるかどうかを検証する。

続いて、移動表現において名詞の場所性だけではなく、結び付く動詞も移動表現の容認度に影響するかどうかを検証する。(11)のように、移動表現のほか、存在表現においても名詞の場所性は文成立に関わる重要な問題となり、存在する所に場所性があるかどうかによって、言える場合と言えない場合がある。

- (11)a. 彼は家にいる。
b. *彼はドアにいる。

しかし、存在を表わす存在動詞は主に「いる」と「ある」²である一方、移動を表わす移動動詞は(12)のように「行く」「来る」「帰る」「戻る」など多数の動詞がある。

(12)a. 彼は家に {行く、来る、帰る、戻る}

b. 彼はドアに* {行く、来る、帰る、戻る}

これらの移動動詞は、ある方向に向かって移るという基本概念を共通に持ちながら、それぞれ固有の意味特性を持つ。したがって、結び付く動詞が異なっても名詞の場所性は同じであるかどうかという点も検証しなければならない。そこで、名詞に内在している名詞の場所性は、結び付く動詞に左右されず一定の場所性を保つものであるかどうか、そして名詞の場所性が結び付く動詞に影響されるのであれば、どのような意味的特性を持つ動詞が名詞の場所性の度合いに影響するか、またすべての名詞が結びつく動詞に影響されるかどうかを検証する。

次に、行き先となる名詞の場所性と緊密な関係を持つ空間化の「ところ」に注目して、どのような特性を持つ名詞が「ところ」と結び付きやすいかを検証する。先行研究は、(13a)と(13b)のように、名詞の後ろに「ところ」などの形式名詞を付け加える空間化は、場所性のない名詞を行き先として捉える際に行う手続きで、すでに場所性のある名詞には付かないと指摘している(寺村(1993 [1968])、奥田(1983 [1962])、鈴木(1972)など)。その理由は、すでに場所性のある名詞に「ところ」を付けても、広く取り上げるという「ところ」の意味が機能しないからであるという(森山 1988)。(13)は(4)の再掲載である。

(13)a. * {駅、教室、東京} のところへ行きます。

b. {机、私、箱} のところへ来てください。

² 石綿(1972)は、存在の動詞として「いる」と「ある」の他に、「存する」「ございます」「おる」「いらっしゃる」などを挙げている。そして、奥田(1983 [1962])は、存在動詞は「ある」「いる」「おる」「ございます」に限られると述べている。

しかし、(14b)のように、場所性のある名詞をさらに空間化する二重場所化が可能である場合がある。

(14)a. 池に着いた。

b. 池のところに着いた。 (森山 1988 : 178)

二重場所化について森山(1988)は、ある場所を既知のものとして特定のさしている場合、「トコロ」が付くことになると指摘している。しかし、田窪(1984)は、(15)のように部分を強調すれば場所性のある名詞であっても、「トコロ」を付けられるかもしれないと述べている。

(15)a. (運動場の) 砂場のところで遊んでいなさい。

b. 砂場で遊んでいなさい。 (田窪 1984 : 114)

このように、場所性のある名詞をさらに空間化する二重場所化については、研究者の間で意見が分かれている。そして、(16)のように空間化せずにそのまま動詞と結び付く空間化の省略ができる場合もある。

(16)a. ベッドのところに行った。

b. ベッドに行った。 (荒川 1992 : 82)

空間化の省略について、荒川(1992)、奥田(1983 [1962])は空間化の省略は転義(言葉のもとの意味から転じた意味)が生じやすいと指摘している。つまり、(16b)は物理的移動そのものを表す意味ではなく、「寝に行く」という意味に転じることである。しかし、空間化の省略について和氣(2000)、王(2009)は(17)のように番号や指示詞、そして修飾語を付けることによって特定性が高まると、空間化されなくてもモノから場所への転化が起こると指摘している。

(17)a. 太郎が 3 番テーブル に行った。

b. あのテーブル に行ってください。

c. わたしは 彼が言ったテーブル に行った。 (王 2009 : 89~90)

また、山梨 (1995) は (18) のように、述部やその他の文脈情報によって慣用的に補完していく表現であると指摘しているなど、空間化の省略についても研究者によって意見が分かれている。

(18)a. 机に座って手紙を書く。

b. 机 (の前) に座って手紙を書く。 (山梨 1995 : 34)

名詞の場所性が文の成立において重要な問題であることを勘案すると、名詞の場所性と緊密な関係を持つ名詞の空間化も文の成立において欠かせない重要な要素である。しかし、これまで名詞の空間化の重要性は指摘されながらも、その機能については十分検討されてこなかった。また、二重場所化や空間化の省略がすべての名詞に対して生じることであるかどうか、一部の移動表現における事象であればどのような特性を持つ移動表現に限って生じる事象であるかなど、二重場所化や空間化の省略に対する名詞と動詞の関係についても明らかにされていない。

そこで、空間化の「トコロ」の特性を探るため、まずどのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付きやすいかを検証した上で、「トコロ」の特性を解明する一環として、二重場所化や空間化の省略が可能である移動表現の特性を探る。

以上、本研究では上に記した 3 つの研究課題から、移動表現における名詞の場所性について考察する。

日本語の移動表現における名詞の場所性を解明することによって、本研究は次の 2 つの領域の研究分野に貢献できる。1 つ目は日本語学の分野である。これまでの日本語の場所性に関する議論は、主に存在表現や移動表現など、名詞の場所性が文の成立に関わる空間表現全体を念頭に置きながら名詞の場所性を探っている。存在表現は「私には (場所) 本が (存在物) ある (述語)」という 3 つの基本要素

からなり、移動表現は「私は（移動体）学校に（場所）行った（述語）」という3つの要素からなっている点では共通している。しかし、すでに確認したように、存在表現と移動表現は結びつく述語の性質が異なっており、存在を表す動詞は主に「いる」と「ある」である一方で、移動を表す動詞は「行く」「来る」「帰る」「戻る」「入る」「着く」など複数の動詞を持つ。つまり、各移動表現はそれぞれ異なる意味特性を持つ移動表現文であるため、移動表現の特性を考慮しながら移動表現における名詞の場所性を探る必要がある。しかし、管見の限り移動表現の特性を十分考慮して名詞の場所性を検討している研究はない。そこで、本研究は移動表現における名詞の場所性を結びつく動詞との関係性から探ることによって、名詞の場所性に関する日本語学の発展に貢献することができると考える。

2つ目は日本語教育学の分野である。上に記したように、田窪（1984）によると場所性に対する sensitivity は言語によって多少異なる。したがって、外国人日本語学習者が自然な日本語を産出するためには、日本語における名詞の場所性について理解する必要がある。今回の調査の結果から明らかになった日本語の移動表現における名詞の場所性についての知見を教育現場で示すことができれば、それは外国人日本語学習者にとって日本語学習の一助になるであろう。また、日本語教師にとっては、指導する際に活用できる参考資料となるだろう。

1.2 本論文の研究範囲

1.2.1 移動表現

本研究の分析対象外であるが、名詞の場所性は、移動表現の他に存在表現においても重要な問題である。(19)は人名詞「妻」を存在物としている存在表現で、(19a)は「私」を存在する場所として捉え、(19b)は「妻の母のところ」を存在する場所として捉えている。

(19)a. *妻が私にいる。

b. 妻が妻の母のところにいる。 (田窪 1984 : 94)

(19a) は言えないが、(19b) は言える理由は、存在表現も移動表現と同じく場所性のない人名詞を存在場所として捉える場合、名詞の後ろに「ところ」などの形式名詞を付け加えなければ非文になるからである。しかしながら、本研究が移動表現に限定して名詞の場所性を論じる理由は、存在表現と移動表現に関わる要素が異なるためである。(20) は存在物(「彼」と「蚤」)のみ異なる存在表現で、(21) は移動体(「手紙」と「彼」)のみ異なる移動表現である。

(20)a. *彼がこの座布団に居た。

b. 蚤がこの座布団に居た。

(21)a. きとう私に手紙が来た。

b. *きとう私に彼が来た。 (森山 1988 : 176)

存在表現である(20)をみると、(20a)は言えないが(20b)は言える一方で、移動表現である(21)をみると、(21a)は言えるが(21b)は言えない。つまり、存在表現の場合は存在物によって、移動表現の場合は移動体によって名詞の場所性が異なるのである。このように、存在表現と移動表現両方とも何を基準として取るかによって名詞の場所性が異なる点では一致する³。しかし、1.1 節で言及したように、存在表現に比べて、移動表現には多様な移動表現がある。(22)は、(21b)と同じく移動体と行き先が人名詞である。

(22)先日、彼に近づいたとき(お付き合いして3年目です)「ミドリガメの臭いがする」と言われました。 (goo.gl/MPAJH2)

(21b)と(22)両方とも移動体と行き先が人名詞であるにもかかわらず、(21b)は言えないが、(22)は言える。存在表現は、存在物が有情であるかどうかによっ

³森山(1988)は、何を基準として取るかによって名詞の場所性が異なると指摘している。

て「いる」あるいは「ある」を取るため、森山（1988）が指摘しているように、存在表現における名詞の場所性は、存在物との関係が関わるのである⁴。しかし、移動表現は、存在表現と違って同じ移動体と行き先であっても複数の移動表現が可能であり、(22)のように名詞の場所性に関わる要因は移動体だけではないことが推測できる。そして、何を基準とするかによって名詞の場所性が決まることについては、森山（1988）によってすでに指摘されている。

そこで、本研究では移動構文の特性を考慮して、行き先となる名詞と移動動詞の意味特性の関係による名詞の場所性を探る。

1.2.2 人の物理的移動表現

本研究が扱う移動表現は、移動体が人名詞であり物理的空間移動を表す移動表現に限定する。上に記したように、森山（1988）によると名詞の場所性は移動体にとって場所であるかどうか文の成立において問題となる。言い換えれば、移動体が変わると名詞の場所性も変わるということである。そのため、移動表現における名詞の場所性と移動動詞の意味特性との関係を探るためには、移動体を統制する必要がある。そこで、場所であるかどうかの問題提起には、人間中心主義的な考え方が暗黙的に前提とされていることから（和氣 2000：74）、本研究では移動体を人名詞に固定する。また、物理的移動表現であるかどうかによっても、名詞の場所性は異なる。たとえば、(23a)は実際にゴミをいれるゴミ箱への移動を表す物理的移動表現で、(23b)はパソコンの中にある不要なデータや画像などを削除する際に使用するゴミ箱への移動を表す非物理的移動表現である。

(23)a. ハリーはひょいと間仕切りカウンターをあげて ゴミ箱のところにいき、
不快な手紙を拾いあげた。 (『病院が嫌いな猫』)

b. 「ゴミ箱に捨てられたものはゴミではない。何か新しい問題が発生したら、まず ゴミ箱に行って、過去に出たアイデアを探ってみる」と、開発

⁴森山（1988）の詳しい内容は第2章で説明する。

作業の裏側を明かしてくれた。 (goo.gl/Q4oNJv)

(23a) は「ゴミ箱」に「トコロ」を補っているが、(23b) はそのまま「ゴミ箱」に移動動詞が結びついている。これは、物理的移動表現であるかどうかによって、行き先となる名詞が同じであっても、場所性を求める場合と求めない場合があることを意味する。したがって、名詞の場所性を論じる際は、物理的移動表現と非物理的移動表現を区別して考える必要がある。

そこで、本研究では名詞の場所性と移動動詞の関係を明確に導き出すため、移動体が人名詞で、なおかつ物理的移動表現であるものを考察対象とする。

1.3 本研究の課題および構成

1.3.1 本研究の課題

本研究は、1. 日本語の移動表現における名詞の場所性、2. 名詞の場所性と移動動詞との関係、3. 名詞の場所性と空間化「トコロ」の関係について解明するため、次の課題を設定する。

[研究課題 1] 名詞の場所性は、場所性のありなしの二通りであるか。

[研究課題 2] 移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか。

[研究課題 3] どのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付きやすいか。

各課題の詳細は、本論文の第4章に示す。

1.3.2 本論文の構成

本論文は6章からなる。以下、各章について簡単に述べる。

第1章「序論」では、名詞の場所性に対する sensitivity は言語間で多少異なるが、日本語において名詞の場所性は文の成立における重要な問題となることを示した。しかしながら、従来の研究結果から移動表現における名詞の場所性を説明することには限界があることから、本論文は、移動表現における名詞の場所性に対する基礎研究として、名詞の場所性、名詞の場所性と結び付く動詞、そして空間化という3つの観点から研究課題を設定していることを示した。また、本論文の構成を記す。

第2章「先行研究」では、名詞の場所性に関する先行研究と名詞の空間化「トコロ」に関する先行研究について概観する。そして、先行研究の成果と問題点を述べた上で、本研究の立場と本論文の研究課題、そして本研究の意義を示す。

第3章「調査概要および分析方法」では、言語データの収集法を網羅的に紹介した上で、本研究の研究課題を検証するために実施した調査法とその妥当性について論じる。また、調査対象語の選定基準など本研究の調査概要とデータの分析方法について述べる。

第4章「容認度評定調査による検証および分析結果」では、研究課題ごとに検証・分析した結果を報告する。具体的には、研究課題1では、検証の結果から従来の先行研究の考え方を再検討する。研究課題2では、行き先となる名詞と結び付く動詞の関係を示す。研究課題3では、「トコロ」の特性を再検証してから、二重場所化と空間化の省略に関わる名詞と動詞を示す。

第5章「名詞の場所性と移動動詞との関係性に関する考察」では、第4章の結果から、各研究課題を考察する。具体的には、まず研究課題1の検証結果から、名詞の場所性の度合いに関わる要因を考察する。次に研究課題2の検証結果から、名詞の場所性の度合いと関係する度合いが異なる動詞の特性を探る。続いて研究

課題3の検証結果から、「トコロ」の特性、そして二重場所化と空間化の省略における名詞と動詞の関係性を示す。

最終章である第6章「本論文のまとめと今後の課題」では、本研究の全体をまとめる。第4章の分析結果を総括し、かつ第5章での考察内容を踏まえ、移動表現における名詞の場所性についてまとめる。そして、本研究の成果と、今後の課題として本研究を発展させる方向性についても述べる。

次ページの図1.1に、本論文の構成を図示する。

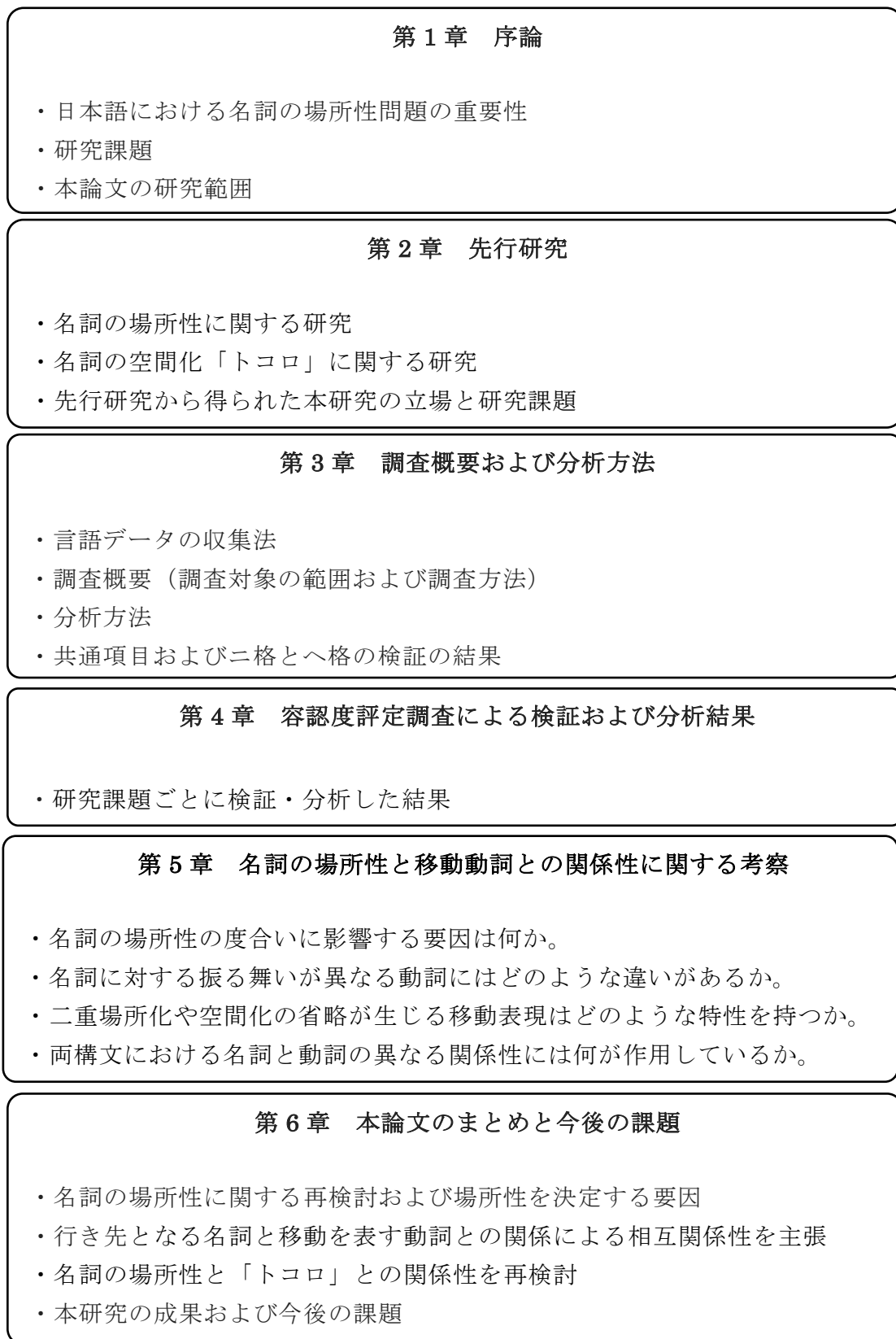


図 1.1 本論文の構成

第2章 先行研究

本論文は、日本語の移動表現における名詞の場所性に関する研究である。そこで、本章の2.1節では名詞の場所性に関する研究、2.2節では名詞の空間化「トコロ」に関する研究について、先行研究の成果および問題点を述べる。そして、2.3節では本研究の重要な考察対象の1つである移動動詞に関する先行研究を簡略的に述べた上で、2.4節では、先行研究から導き出された問題点から本論文の課題と本研究の位置づけを明らかにする。

2.1 名詞の場所性に関する研究

寺村 (1993 [1968])

寺村 (1993 [1968]) は、日本語の文法を記述するのに、名詞をどのような基準によって特徴づけるのがよいかという考え方から、名詞の下位分類を試みている。そして、名詞の下位分類に関連して、「実質性」「モノ性」「トコロ性」「有情」「非情」「コト性」「相対性」「形容詞性」について考察している。これらの特性は、いくつかの文型の枠を設定して判断したもので、名詞の場所性と関係する「モノ性」と「トコロ性」⁵の文型の枠いわば場所性判断のテストフレームは以下のである。

(1) a. ココハ — デス

b. — へ行ク (来ル、帰ル)

c. — デ〜シタ

(寺村 1993 [1968] : 9)

⁵ ここでいう「モノ性」は、「トコロ性」についてはマイナスであるということである。そして、「トコロ性」を持っていることは場所性のある名詞を意味する。

たとえば、「駅」の場合 (1a)「ここは駅です」、(1b)「駅へ行く」、(1c)「駅で寝た」はすべて自然な文として成立する。一方、「本」の場合 (1a)「*ここは本です」、(1b)「*本へ行く」、(1c)「*本で寝た」はすべて不自然な文である。したがって、「駅」は「トコロ性」のある名詞、つまり場所性のある名詞で、「本」は「トコロ性」についてはマイナスである「モノ性」のある名詞、つまり場所性のない名詞である。このように、寺村 (1993 [1968]) は場所性判断のテストフレームにはまる名詞とはまらない名詞に分けて、名詞の場所性を二分法的に捉えており、その根拠を (1) の文型の枠から裏付けている。

しかしながら、名詞によっては、場所性判断のテストフレームから判断ができない場合がある。たとえば「洗面台」の場合、(1a)「*ここは洗面台です」は言えないが、(1b)「洗面台に行った」は言える。寺村 (1993 [1968]) は、(1a) にはまるものはそのまま (1b) にもはまるが、(1a) にはまらないものは、(1b) の枠に入れるとき「— のところ」というような語句を補わなければ非文法的な文ができてしまうと指摘している。したがって、(1b) の場合、「— のところ」のような語句を補って「洗面台のところに行った」と言わなければならないが、そのまま「洗面台に行った」とも言える。また、「車」の場合も、(1a)「*ここは車です」と (1b)「*車に行った」は言えないが、(1c)「車で寝た」は言える。

寺村 (1993 [1968]) の場所性判断のテストフレームを用いることによって、場所性のある名詞と場所性のない名詞を容易に分けることができる。そして、場所性判断のテストフレームから、日本語において場所性のある名詞が何を指して、どのような文法的な特徴があるかを理解するのに役立つ。しかし、「駅」や「本」のようにテストフレームから名詞の場所性が判断できる名詞もあれば、「洗面台」や「車」のようにテストフレームから一部ずれる名詞もあることから、名詞の場所性を二分法的に捉えて場所性のある名詞と場所性のない名詞に分けて考えることには疑問が生じる。

田窪 (1984)

田窪 (1984) は、場所というものを各言語が、特に日本語がどのように捉えて言語的に表現しているかを探っている。田窪 (1984) は、日本語において名詞の場所性が関与する環境を 5 つ挙げている。言い換えると、場所性のある名詞であ

るかどうかによって文の自然さが変わる5つの表現文を提示している。

- (2) a. 「のところ」が付くか付かないか。
- b. 疑問詞「どこ」で聞ける。(=答となり得る)
- c. 移動を表す動詞の Goal、Source に現れる。
- d. 場所の状況語句を作る「NP で」の NP の位置に現れる。
- e. 存在を表す文において「位置」を示す「NP に」の NP の位置に現れる。

(田窪 1984 : 96)

まず、(2a) は場所性のある名詞は「— のところ」が付かないが、場所性のない名詞は「— のところ」が付くことを意味する。このことから、たとえば「駅」と「本」の場合、「*駅のところ」は言えないが、「本のところ」は言える。

次に、(2b) は「どこですか」「どこへ行きますか」など疑問詞「どこ」を用いて聞いた場合、場所性のある名詞は「— です」「— へ行きます」のように答えとなり得るが、場所性のない名詞は答えとなり得ないということである。したがって、「駅」は「A: どこですか。B: 駅です。」「A: どこへ行きますか。B: 駅へ行きます。」は答えとなり得るが、「本」は「A: どこですか。B: *ここは本です。」「A: どこへ行きますか。B: *本へ行きます。」は答えとなり得ない。

次に、(2c) は場所性のある名詞は移動の着点 (=Goal) と起点 (=Source) に現れるが、場所性のない名詞は移動の着点と起点に現れない。したがって、「駅」は「駅に着いた」「駅から出た」と言えるが、「本」は「*本に着いた」「*本から出た」と言えない。

次に、(2d) は場所性のある名詞は場所の状況語句を作ることができるが、場所性のない名詞は場所の状況語句を作ることができないことを意味する。したがって、「駅」は「駅で財布を落とした」「駅で友達に会った」のように場所の状況語句を作ることができるが、「本」は「*本で財布を落とした」「*本で友達に会った」のように場所の状況語句を作ることができない。

最後に、(2e) は場所性のある名詞は位置を示す存在文において、「NP に」の位置に現れるが、場所性のない名詞は、「NP に」の位置に現れないことを意味する。したがって、「駅」は「駅に人々がたくさんいる」のように位置を示す「NP に」

の位置に現れるが、「本」は「*本に人々がたくさんいる」のように位置を示す「NPに」の位置に現れない。

以上、(2a) から (2e) の結果から、田窪 (1984) から「駅」は場所性のある名詞で、「本」は場所性のない名詞であると結論づけられる。しかしながら、田窪 (1984) は、1 つの名詞がこれらのすべてを満足させるものではないとも断っている。すなわち、田窪 (1984) が挙げている 5 つの環境は、名詞の場所性がかかわる 5 つの表現文を取り上げているもので、5 つ全部の環境を満たす必要はないのである。

さらに田窪 (1984) は、(2a) から (2e) によって同定される場所性のある名詞を (3) のようにカテゴリー別に分類・提示している。(3) は、田窪 (1984) で挙げられている場所性のある名詞である。

(3) ①「人」が関与している場所名詞⁶

- a. 地名：東京、大阪、玉野市、……
- b. 機関：(固有名) 玉野高校、京都大学、巨人軍、高島屋、……
(普通名) 大学、役所、学校、デパート、警察、……

②「人」が関与していない場所名詞

- a. 地名：若草山、大井川、野尻湖、……
- b. 自然物：山、川、湖、……
- c. 建造物（及びその一部⁷）：家、部屋、階段、二階、庭、……

③身体名称など⁸

⁶ ①「人」が関与している場所名詞と②「人」が関与していない場所名詞の違いは、動作主の位置に現れることができるかどうかである。たとえば、①「人」が関与している場所名詞に属する「高島屋」の場合、「高島屋では皆様のために××を催しております」のように、動作主の用法として表すことができる。

⁷ ここでいう建造物（及びその一部）とは、たとえば「教室」のように、「学校」という建物の一部となる空間を指す。したがって、「壁」や「窓」などは、建築上では建造物の一部となるが、そこに位置できる空間は持たないため、場所性のある名詞のカテゴリーには属しない。

⁸ 田窪 (1984) は、次のような用法から身体名称である名詞も、場所名詞として扱うことができると述べている。

胃、腸、肝臓、口、のど、……

④ 相対名詞

後、前、左、右、上、下、東、西、南、北、……

田窪（1984）は、文法的な観点から場所性を名詞に内在している特性として捉えて抽出・検証している点では、寺村（1993 [1968]）と共通している。しかし、寺村（1993 [1968]）は名詞の場所性が判断できる3つのテストフレームを全部クリアできる名詞のみを場所性のある名詞として捉えている一方で、田窪（1984）は名詞の場所性がかかわる環境から、より広い範囲の名詞を場所性のある名詞として提示している。

鈴木（1972）

鈴木（1972）は、場所を表す状況語⁹として、5つの種類を挙げている。

- (4) a. ありか
- b. 行き先
- c. 出発点
- d. 動きや状態がなりたつ場所
- e. 人やものが移り動く場所

これらの状況語は、主に述語の特性によって左右されるもので、(4a) ありかを表す状況語は、二格名詞句に存在を表わす動詞（「ある」「いる」）や形容詞（「な

-
- (1) a. 口から入った食物は食道を通って胃に行き、そこで消化されて、腸に送られる。
 - b. ?彼は胃のところが悪い。
 - c. 彼は胃が悪い。 （田窪 1984 : 99）

（1a）は移動の起点と着点に現れることを示して、（1b）と（1c）は「のところ」が付かないことを示している。

⁹ ここでいう状況語とは、主語と述語の表す出来事、事柄が成り立つ場所、時、原因、目的を表す文の部分である。

い)」が述語になる。(4b) 行き先を表す状況語は、二格とへ格の名詞句の場合は、「行く」や「帰る」など、移動する動作を表す動詞に限られる。マデ格の名詞句には、上に書いた移動動詞の他に、「歩く」や「走る」など移動の仕方を表す動詞も述語になる。(4c) 出発点を表す状況語は、カラ格名詞句の場合は、移動の動作を表す動詞が述語となって、ヲ格名詞句は「出発する」「離れる」のように、空間的に離れる移動動作を表す自動詞に限られる。(4d) 動きや状態がなりたつ場所を表す状況語は、デ格名詞句に述語になる語には制限がない。(4e) 人やものが移り動く場所を表す状況語は、ヲ格名詞句に述語になる語は、主として移動を表す自動詞、移動の仕方を表す自動詞である。

鈴木（1972）は、場所を表すすべての状況語において、モノや人を表す名詞が場所を表す状況語になるためには、「トコロ」のように空間的な関係を示す形式名詞を添えて、空間化する必要があると述べている。つまり、鈴木（1972）は、寺村（1993 [1968]）、田窪（1984）と同じく名詞の場所性を名詞に内在しているものとして捉えており、存在表現であれ移動表現であれ、状況語には名詞の場所性が関わっているという立場である。しかしながら、鈴木（1972）は、名詞の場所性については具体的に言及せずに、空間化の手続きを受ける名詞としてモノや人名詞を挙げているに留まっている。

奥田（1983 [1962]）

奥田（1983 [1962]）は、二格名詞句と動詞の組み合わせが表す結び付きのうち、ありかの結び付きと行き先の結び付きは、二格の前項名詞に空間的なニュアンスがあるかどうかによって、空間的なニュアンスのある具体名詞はそのまま動詞と組み合わせることができるが、空間的なニュアンスのない具体名詞あるいは抽象名詞は、空間化の手続きを受ける必要があると指摘している¹⁰。ここでいう具体名詞とは実体性のある名詞を指す。しかし、奥田（1983 [1962]）もここでいう空間的なニュアンスのある名詞と空間的なニュアンスのない名詞の違いについては具

¹⁰ 「夢に向かった」や「死に至った」のように実体性のない抽象名詞も空間化せずに移動動詞と組み合わせることができる。しかし、物理的空間移動の意味にはならない。

体的に言及していない。

鈴木（1972）と奥田（1983 [1962]）は、名詞と動詞の関係で名詞の場所性に言及している。しかし、結果的に、場所性を名詞の内的な属性として捉えて、場所性のある名詞と場所性のない名詞という二分法的な考え方に基づく点では寺村（1993 [1968]）、田窪（1984）と共通している。寺村（1993 [1968]）、奥田（1983 [1962]）は、名詞の場所性が問題となるあらゆる表現から名詞の内的な属性に焦点を当て議論している。そのため、名詞の場所性における普遍的な特性を理解することに役立つ。また、文法的な観点から名詞の場所性を説明しているため、場所性の判断における揺れを抑えることができる。しかしながら、ある対象がどのカテゴリーに属するかは、定義的特徴によって決まるという古典的カテゴリー観に基づいて名詞の場所性を捉えているため、上に書いた「洗面台」や「車」のように二分法的なカテゴリーからずれる名詞については説明ができないという限界がある。さらに、人間はある成員をカテゴリー化する際、そのカテゴリーの成員はすべてが共通した属性を持っているわけではないことを考慮すると、名詞の場所性を場所性のある名詞と場所性のない名詞という二分法的に捉えることについては再検証が必要である。

森山（1988）

2つの名詞（ N_1 が N_2 に V の N_1 と N_2 ）の関係に注目して名詞の場所性を論じている森山（1988）は、名詞の場所性を名詞それ自身が持つ内在的素性として捉えている寺村（1993 [1968]）や奥田（1983 [1962]）などの研究と違って、名詞の場所性を文の内部構造の要素間の関係の中で決まるものとしてと捉えている。

（5）は森山（1988 : 175）で挙げられている移動表現で、移動する移動体のみ異なる。（5a）の移動体は「絵」、（5b）の移動体は「メモ」である。

（5） a. 絵を南側の壁から新しい額へ移した。

b. ??メモを南側の壁から新しい額へ移した。 （森山 1988 : 175）

森山（1988）は、（5a）は自然であるが（5b）は不自然である理由について、「メ

モ」を「額」に入れることは現実にはありうることであるが、「絵」が「壁」「額」に典型的にあるものなのに対して、「メモ」が「壁」「額」に典型的にあるものではないことによると述べている。つまり、名詞の場所性は、基準の取り方によって決まる相対的なもので¹¹、「現実にはありうることであるか」、あるいは「典型的にあるものであるか」が文の容認に関わる要因であるという意味である。ここで言う基準の取り方による場所性の相対性は、環境と動物¹²の相互関係を重要視するアフォーダンス (affordance) の概念観に繋がる。アフォーダンスは、アメリカの知覚心理学者である J.J.Gibson (1979) による造語で¹³、アフォーダンスそのものは、不変的なもので、知覚者の要求や知覚するという行為によって、それがなるところのものを提供するということである (Gibson1979 : 139)。すなわち、同じものを見ても、動物によって異なるアフォーダンスが知覚されるという環境と動物の関係がつくる情報として提案された概念である。たとえば、ゾウとアリが一本の木に知覚するアフォーダンスはかなり異なるはずである (佐々木 1994 : 62)。森山 (1988) が挙げている (5) のアフォーダンスは、モノと知覚者の関係で成り立つ情報構造ではなく、モノとモノ同士の関係で成り立つ情報構造を話者が知覚するものである。森山 (1988) はすべてが相対的ということになるのではなく、3つのレベルが考えられると述べている。

- (6) a. 絶対的場所名詞となるもの
- b. 相対的に場所性が決定されるもの
- c. 絶対的に場所名詞となれないもの

(6a) 絶対的場所名詞となるものとは、「トコロ」と共起することができなく、どんな場合でも場所名詞としてしか使えない典型的な場所名詞である。たとえば、地名、集団、組織などの名詞がこれに該当する。(6b) 相対的に場所性が決定され

¹¹ 森山 (1988) は名詞の場所性は存在表現なら存在物、移動表現なら移動体が場所性の基準となると主張している。

¹² ここでいう動物とは、知覚者であり行為者である (Gibson1979 : 8)。

¹³ 心理学の枠組みを超えて、認知言語学やデザイン、工学など様々な分野にわたって用いられる概念で、多くの研究者に様々に解釈・定義されている。

るものとは、実際に存在して一定の空間を有する実体名詞で、基準の取り方によって場所性が違って来る、つまり「トコロ」の付加を必要としたりしなかったりする名詞がこれに該当する。(6c) 絶対的に場所名詞となれないものとは、「青さ」「正義」のような実際存在しない非実体的な名詞で、絶対的に場所名詞として使えない名詞がこれに該当する。要するに、森山(1988)が挙げている3レベルのうち、基準の取り方によって名詞の場所性が変わる名詞は、一定の空間を有する実体名詞のみである。

森山(1988)は名詞の場所性を名詞が持つ素性の問題として固定的に捉える従来の研究と違って、文の内部構造の要素間の関係の中で名詞の場所性を相対的に捉えることによって、より説明可能な範囲を広げたと言える。しかし、なぜ一定の空間を有する実体名詞においてのみ相対的に決まるか、その理由については説明が欠けている。また、「現実によりうることであるか」、あるいは「典型的にあるものであるか」という主観的な判断基準を提示しているため、人によって名詞の場所性判断に揺れが生じる問題点がある。(7)は森山(1988: 175)で挙げられている例で、(5)と同じく基準の取り方、つまり「デスク」に存在するモノが「ペン」であるか「皿」であるかによって、「デスク」の場所性が異なる場合である。

(7) a. ペンはデスクにある。

b. ??皿はデスクにある。 (森山 1988 : 175 より一部引用)

(7a)は自然であるが(7b)は不自然である理由は、(8)のように「ペン」は「デスク」に置くもので、「皿」は「テーブル」に置くものであるというモノとモノの関係の相応しさ、つまり「現実によりうることであるか」、あるいは「典型的にあるものであるか」で(7a)と(7b)の違いが判断・説明できる。(7a)は典型的にあるものであるが、(7b)は現実によりうることである。

(8) a. デスクにペンが置いてある。

b. テーブルに皿が置いてある。

しかし、(9a)は言えないが(9b)は言える理由を(8)のように「デスク」と

「ペン」、「テーブル」と「皿」のようにモノとモノの関係の相応しきで判断することはできない。

(9) a. *車は正門にある。

b. 彼は正門にいる。 (森山 1988 : 177 筆者による修正)

なぜならば、「正門」に対して「車」と「人」の間で関係の相応しきに差があるのであれば、(10)においても、(10a)は言えないが(10b)は言えると解釈されるべきであるが、(10a)と(10b)は両方が言えるためである。

(10)a. 正門に車が止まっている。

b. 正門に人が立っている。

ちなみに、森山(1988)は(9a)は言えるが(9b)は言えない理由、つまり、「正門」に対する「車」と「人」の原理的な違いについては特に言及せずに、「基準の取り方によって、「ところ」の付加を必要としたり、しなかったりする(森山 1988 : 177)」という指摘のみに留まっている。また、基準の取り方によって名詞の場所性が異なるのであれば、たとえば、「彼」と「カップ」は「*彼はカップにいる」のように、相応しい関係ではないため、移動体と行き先が「彼」と「カップ」で同じである(11a)と(11b)は両方言えないはずである。

(11)a. *彼はカップに行った。

b. 彼はカップに近づいた。

しかしながら、(11a)は言えないが(11b)は言えることから、森山(1988)が述べる基準の取り方による名詞の場所性の説明には、限界があると言える。

名詞の場所性によって文の成立が異なる空間表現のうち、存在表現は、存在そのものを表わす空間表現である。つまり、名詞の場所性が基準の取り方によって決まる相対性を持つという立場から考えると、名詞の場所性に関わる主要素は存在物である。しかしながら、移動表現は主に「いる」と「ある」で限定される存在

表現と違って、「行く」「来る」「帰る」「戻る」「着く」「入る」などを含めて多くの動詞がある。これらの動詞は、主体の位置変化を表す共通の意味特性を持ちながら、それぞれ固有の特性を持つ。したがって、(11)のように移動体と行き先が同じであるにもかかわらず(11a)は言えないが(11b)は言えることは、存在表現と違って移動表現における名詞の場所性は、結びつく動詞の特性も視野にいれて探る必要があることを示唆する。

荒川 (1992)

荒川 (1992) は、名詞の場所性は動詞の意味にも大きく制約され、動詞との関係で決まると指摘している。文の内部構造の要素間の関係の中で名詞の場所性を捉えている面では、森山 (1988) と一致する。そして(12)と(13)のように、荒川 (1992) もアフォーダンスを言語表現との関連で説明することを試みている。

(12)a. 椅子に座っている。

b. *椅子の上に座っている。

(13)a. *椅子に立っている。

b. 椅子の上に立っている。 (荒川 1992 : 82-85)

まず、「椅子」と「座る」がそのまま結び付く(12a)は言えるが、「椅子」と「座る」の空間的な位置関係を示す「—の上」を付け加えている(12b)は言えない。一方で、「椅子」と「立つ」がそのまま結び付く(13a)は言えないが、「椅子」と「立つ」の空間的な位置関係を示す「—の上」を付け加えている(13b)は言える。これについて荒川 (1992) は、「椅子」は「座る」の直接の対象となっている、つまりそのモノに対する相応しい行為であるため、あえて「—の上」を入れると不自然な文になってしまう。しかし、「立つ」は「椅子」と空間的な結び付き、つまりそのモノに対する相応しい行為ではないため、その空間上の関係を示す「—の上」を入れる必要がでてくると結論付けている。すなわち、「椅子」というものは、「座る」という行為をアフォードするので、(12a)のように無標の格標識で標示されるが、「立つ」という行為はアフォードしないので、(12b)のように無標の

格標識では標示できず、「— の上」のようにより有標の形式が必要とされるのである。

したがって、「ベッド」の場合も(13a)は自然であるが(13b)は不自然である理由は、「ベッド」は「寝る」の直接の対象、つまり「ベッド」は「寝る」という行為をアフォードするためである。

(14)a. ベッドに寝ている。

b. ?ベッドの上に寝ている。 (荒川 1992 : 82)

荒川(1992)が言及している直接の対象となっているかどうかを本多(2013)は「そのモノに相応しい行為」と「単に可能なだけの行為」の区別から説明している¹⁴。単に可能なだけの行為というのは、そのモノに対して相応しい行為ではないが、可能な行為ではある場合である。たとえば、椅子は座るものである。しかし、その上に立ったりすることも可能ではある。また、ベッドも横になるところである。しかし、その上にモノを置いたりすることも可能ではある。すなわち、そのモノが持つ本来の機能に則する行為である場合は、(12a)や(14a)のようにそのまま動詞と結び付くことができる。しかし、そのモノに相応しくない行為ではあるが可能な行為である場合は、(13b)のように「— の上」を入れる必要がある。

荒川(1992)は、アフォードانسの概念観から名詞の場所性を捉えている点では、森山(1988)と一致する。しかし、森山(1988)は存在物あるいは移動体というある基準となる対象との関係で名詞の場所性を捉えているため、(11)のように結び付く動詞による場所性の変化については説明ができない。また、(9)のように「正門」は「車」に場所性をアフォードしないが、「人間」には場所性をアフォードするという関係性も判断が曖昧である。一方、荒川(1992)はそのモノに対する動作との関係、つまり「相応しい行為であるか」あるいは「単に可能なだけの行為であるか」という対象に対する行為に注目して判断しているため、「椅子は座

¹⁴対象に対する行為に注目している本多(2013)の「そのモノに相応しい行為」と「単に可能なだけの行為」の区別は、主体と対象の関係に注目している森山(1988)の「典型的にあるものであるか」と「現実によりあることであるか」にそれぞれ対応すると言える。

るところ」「ベッドは寝るところ」「本棚は本を置くところ」のように、少なくともそのものが持つ本来の機能を認識していれば、アフォーダンスの関係性判断が曖昧になることは避けられる。

また、(15)のように移動体は同じであるが、(15a)は言えて(15b)は言えない理由について森山(1988)からは説明できないが、「そのモノに相応しい行為」と「単に可能なだけの行為」の原理を用いることによって説明することができる。

(15)a. 彼は椅子に座った。

b. *彼は椅子に立った。

このように、荒川(1992)、本多(2013)の「そのモノに相応しい行為」と「単に可能なだけの行為」という観点から移動表現における名詞の場所性を考えてみると、移動表現は移動の行為を表わす表現であるため、行き先となる名詞に対する単に可能なだけの行為である。したがって、(16a)と(16b)両方とも言えない理由について、「行く」という移動動作は、単に可能なだけの行為であるため、「机」や「椅子」は「行く」とそのまま結び付くことができないと言える。

(16)a. *彼は机に行った。

b. *彼は椅子に行った。

そして、(17)のように、空間上の関係を示す「—の前」を入れることによって、(17a)と(17b)両方が言えることについても説明ができる。

(17)a. 彼は机の前に行った。

b. 彼は椅子の前に行った。

しかし、そのモノに対する相応しい行為であるかどうかという二分法的な考え方で判断・説明しているため、(18)の「椅子」や「ソファ」のように相応しい行為が同じ「座る」であるにもかかわらず、結び付く動詞に対する名詞間の許容のずれが生じる理由については説明ができない。

(18)a. *彼は椅子に行った。

b. 彼はソファールに行った。

また(19)のように、同じ名詞内でも結び付く移動動詞によって容認の度合いが異なることについても説明ができない。

(19)a. 彼は机に {*行った、近づいた、向かった}

b. 彼は椅子に {*行った、近づいた、向かった}

移動表現はそのモノの機能とは別に移動そのものを表しているため、各移動表現は「単に可能なだけの行為」として同一視される。したがって、「机」あるいは「椅子」を行き先としている移動表現はすべて言えないはずである。しかし、(19a)「机」と(19b)「椅子」両方とも「行く」に対しては言えないが、「近づく」と「向かう」に対しては言えるなどのずれが生じる。

また、各動詞に対する振る舞いは、(20)のように名詞によっても異なる。(20)の「ベッド」と「テーブル」は(19)と違って「行く」に対しても両方が言える。

(20)a. 彼はベッドに {行った、近づいた、向かった}

b. 彼はテーブルに {行った、近づいた、向かった}

このように、荒川(1992)は名詞の場所性を動詞との関係性から探っているが、そのモノに対する行為の相応しさから名詞の場所性を判断しているため、(18)(19)(20)のように、「単に可能なだけの行為」であるにもかかわらず、結び付く動詞によって容認度に差が生じる移動表現については説明ができない。

森山(1988)、荒川(1992)などは、名詞の場所性を相対的に捉えることによって、より説明可能な範囲を広げたとと言える。たとえば、(21a)は言えないが(21b)は言える理由について、名詞の場所性だけに注目している従来の研究からは説明

がつかない。しかし、移動体や動詞など文の内部構造の要素間の関係の中で名詞の場所性を捉えているため、(21a)は言えないが、(21b)は言える理由について、異なる移動体による結果であると説明ができる。

(21)a. *きのう私に彼が来た。

b. きんのう私に手紙が来た。 (森山 1988 : 176 より一部引用)

また、(22)のように主体と対象が同じであるにも関わらず(22a)は言えて、(22b)は言えない理由についても、行為の相応しさから説明ができる。

(22)a. 彼は椅子に座った。

b. *彼は椅子に行った。

しかしながら、上に記したように移動表現における名詞の場所性については(18)(19)、そして(20)のようにアフォーダンスの概念観から説明できない限界がある。つまり、なぜ移動表現によって名詞の場所性の揺れが生じるのかといった問題についての考察は、結び付く移動動詞の意味特性を視野に入れて、名詞の場所性を探る必要があるのである。

2.2 名詞の空間化「トコロ」に関する研究

名詞の空間化は、名詞の場所性が問題となる存在表現や移動表現において欠かせない重要な手続きである。そのため、名詞の場所性を扱う研究において常に取り上げられる。しかし、現在までのところ、場所性の重要性と共に空間化の必要性については指摘されているものの、空間化の特性については十分検討されていない状況である。そこで、本節では、空間化の「トコロ」に焦点を当てその特性を探るため、場所性のある名詞に「トコロ」を加える二重場所化と場所性のない名詞にもかかわらずそのまま動詞と結び付く空間化の省略に関する先行研究を概観する。

2.2.1 二重場所化

これまで多くの研究は、(23)のように空間化は場所性のない名詞に対する手続きで、すでに場所性のある名詞には生じないと指摘している(寺村(1993[1968])、田窪(1984)、森山(1988)など)。

(23)a. 私は{東京、*東京のところ}に行った。

b. 私は{*彼、彼のところ}に行った。

場所性のある名詞に対して空間化できない理由は、場所的に広く取り上げるという「ところ」の意味が機能しないためである(森山 1988 : 179)。池上(1981)によると「ところ」は前項名詞を基準としてその周辺を拡大する性質を持つ。このように、同じ名詞に対して名詞と動詞がそのまま結び付く直接移動構文(N = V)と名詞と動詞の間に「ところ」を付け加えて空間化する間接移動構文(N ところ = V)は、両立できないことが特徴である。したがって、寺村(1993 [1968])の場所性判断テストフレームや田窪(1984)の名詞の場所性がかかわる5つの環境のうち、「ところ」と結び付くことができるかどうかが挙げられていることもその理由である。しかし、(24)のように同じ名詞に対して両構文が成り立つ場合がある。

(24)a. (運動場の) 砂場のところで遊んでいなさい。

b. 砂場で遊んでいなさい。 (田窪 1984 : 114)

このように、すでに場所性のある名詞にさらに「ところ」を付け加える二重場所化について言及している研究は、管見の限り、田窪(1984)と森山(1988)のみである。

田窪(1984)

田窪(1984)は(24a)と(24b)の指しているところは同じであるが、(24a)の「砂場のところ」は、運動場という全体のうち、砂場という部分を強調している

という説明をしている。つまり、部分を強調すれば場所性のある名詞に「トコロ」をつけることができる。このように、「トコロ」の機能が全体の中の一部にスポットライトを当て、強調の意味を生み出すことであれば、(25a)は「家」という全体の一部となる「部屋」を強調するという意味で成り立つはずである。しかし、(25a)は言えず、(25b)と言わないといけない。

(25)a. *部屋のところで遊んでいなさい。

b. 部屋で遊んでいなさい。

(24a)は強調の意味を持つが、(25a)は非文になることは、「トコロ」による部分の強調は、名詞の特性と関わっていることを示唆する。

また、(26)の場合、(24)と同じく(26a)と(26b)両方成り立つが、(26b)において強調の意味は感じ取れない。

(26)a. 階段に行った。

b. 階段のところにいった。

これはつまり、田窪(1984)が主張している部分の強調は、すべての空間表現において通用することではなく、制限的であることを意味する。しかし、田窪(1984)はこのような制約については具体的に述べていない。

森山(1988)

森山(1988)は、ある場所を既知のものとして特定の指す場合「トコロ」がつくことを指摘している。

(27)a. 池についた。

b. 池のところにいった。(森山 1988 : 178)

つまり、(27b)の「池」は既知の池として特定化している場合で、(28)のように未知の池である場合、特定の指すことができないため(28b)は言えないと述

べている。

(28)a. 我々探検隊が進んでいくと、池についた。

b. *我々探検隊が進んでいくと、池のところにいった。(池を知らない場合)

(森山 1988 : 178)

このように、既知のものとして特定の指す場合、「トコロ」がつくことは「トコロ」は文脈の情報に支えられていることを意味する。したがって、(29)の「砂場」は昨日行った既知の所であるため、(29a)と(29b)両方が言えるべきであるが、(28)と違って(29a)は言えるが(29b)は言えない。

(29)a. 昨日行った砂場についた。

b. *昨日行った砂場のところにいった。

このように、森山(1988)の既知のものとしての特定化も「トコロ」に対して説明に限界がある。

以上、二重場所化に対して、「部分の強調」「既知のものとしての特定化」という異なる見解が述べられており、それぞれ二重場所化の事象に対する説明には限界がある。また、移動表現における二重場所化の事象を名詞と動詞の関係で探っていないことから、「トコロ」の特性を理解するためには二重場所化に対するさらなる検討が必要である。続いて、2.2.2節では「トコロ」の省略、つまり空間化の省略に関する研究を概観する。

2.2.2 空間化の省略

場所性のない名詞は、(30)のように「トコロ」などの形式名詞を付け加えて空間化する必要がある(寺村(1993 [1968])、奥田(1983 [1962])、鈴木(1972)、田窪(1984)など)。

(30)私は{*彼、彼のところ}に行った。

しかし、(31)のように場所性のない名詞であるにもかかわらず、空間化を省略して動詞とそのまま結び付くことができる場合がある。

(31)a. ベッドのところへ行く。

b. ベッドへ行く。

(荒川 1992 : 87)

このような空間化の省略について言及している研究は、荒川(1992)、奥田(1983 [1962])、和氣(2000)、王(2009)、山梨(1995)などがある。

荒川(1992)・奥田(1983 [1962])

荒川(1992)は、(31a)のように空間化した名詞に対し、(31b)のように場所性のない名詞と動詞がそのまま結び付く場合、転義が生じやすいと言及している。つまり、(31a)は実際ベッドのところへ行くという物理的移動の意味になるが、(31b)は寝に行くという意味になるとしている。

奥田(1983 [1962])も「頭に来る」「手に入る」「耳に入る」「目に入る」「頭にのぼる」「口にのぼる」のような組み合わせを例で挙げながら、場所性のない名詞と動詞がそのまま結び付く組み合わせは、フレジオロジカルないまわしになっていると述べている。しかし、(32)をみると、(32a)のように「トコロ」を付け加えている移動表現は物理的移動の意味で、(32b)のようにそのまま動詞と結び付く移動表現は(31b)のように転義であるとは考えられない。

(32)a. 私は冷蔵庫のところに行った。

b. 私は冷蔵庫に行った。

場所性のない名詞のうち、(30)「彼」のようにそのまま動詞と結び付くことができない名詞もあれば、(31)「ベッド」や(32)「冷蔵庫」のように動詞とそのまま結び付くことができる名詞もある。さらに、空間化の省略ができる名詞のうち、(31b)「ベッド」のように転義が生じる名詞もあれば、(32b)「冷蔵庫」のように

転義が生じない名詞もあるなど、空間化の省略とそれに伴う意味が名詞によって異なるが、これまでの研究からは説明ができない。

和氣（2000）・王（2009）

和氣（2000）、王（2009）は、特定性が高まるとそのモノが存在する場所を指すことになるため、空間化されなくてもモノから場所への転化が起こると指摘している。（33）は和氣（2000）で挙げられているものである。

（33）a. *太郎がテーブルに行った。

b. 太郎が 3 番テーブルに行った。

c. 太郎が右側のテーブルに行った。 （和氣 2000：76）

和氣（2000）は（33a）は非文であるが、（33b）と（33c）の許容度が上がる理由は、番号や修飾語を付けることによって特定性が高まると、それ以外のモノから相対化されて空間内の位置が区切られ、モノとしてのテーブルではなく、そのテーブルが空間内に占める場所を指すことになるためであると説明している。したがって、たとえば「本棚」を行き先とする場合、「*本棚に行った／本棚のところに行った」のように動詞とそのまま結び付かず、「トコロ」を付け加えて空間化しなければならないが、（34）のように「先生専用」や「観光」などを付けて「本棚」を特定すれば、動詞と直接結び付くことができるのである。

（34）a. 先生専用の本だなに行って、魔道書を取り出してみる。

南房秀久（著）2004『トリシア、ただいま修業中！魔法世界ファンタジー』

b. あきらめず、「観光」の書棚に行くと、『ル・カルティエ・ラタン』なるズバリのタイトルの本がある。

横山研二（著）1996『わがままフランス、やっぱりフランス』

しかし、番号や修飾語を付けて特定化していない（32b）の「冷蔵庫」がモノから場所への転化が起こる理由については説明ができない。

山梨 (1995)

山梨 (1995) は、空間化の省略について慣用化されたメトニミーの問題であると指摘している。ここでいう慣用化されたメトニミーの問題とは、伝達の対象が目立った部分、顕著な部分を言語化し、その背景の意味領域は、述部その他の文脈情報によって慣用的に補完していく表現が日常言語には広範にみられるということである。したがって特殊な文脈を考えないかぎり、(35a) に示されることは、慣用的には「机の前に」を意味する。よって、(32b) の「冷蔵庫」も、慣用的には「冷蔵庫のところに」を意味すると言える。

(35)a. 机に座って手紙を書く。

b. 机 (の前) に座って手紙を書く。 (山梨 1995 : 34)

しかし、慣用化されたメトニミー的な表現は山梨 (1995) が述べているように、述部やその他の文脈情報によって慣用的に補完していく表現である。そのため、移動表現においてどこまでカバーできるかが疑問である。(36) をみると、(36a) と (36b) は両方が言える。しかし、(36c) は言えないが、(36d) は言える。このような違いについて、慣用化されたメトニミー的な表現の観点から説明することは恣意的であるとも言える。

(36)a. 冷蔵庫に行った。

b. 冷蔵庫に近づいた。

c. *ドアに行った。

d. ドアに近づいた。

このように空間化の省略についても、研究者の間で「転義」「特定化によるモノから場所への転化」「慣用化されたメトニミー的表現」という異なる意見が述べられており、それぞれの説明には限界がある。したがって、移動表現における空間化の省略についてこれまでとは異なる観点からさらなる検討が必要である。

2.3 移動動詞の分類

2.1 名詞の場所性に関する研究と 2.2 名詞の空間化「トコロ」に関する研究から推論できるように、移動表現における名詞の場所性を明らかにするためには、移動動詞の特性を理解する必要がある。そこで、本節では移動動詞の下位分類を試みた先行研究を概観する。

宮島（1972）

宮島（1972）は、ある動詞が移動の開始（すなわち出発）から終了（すなわち到着）にいたるまでの、どの段階に重点をおいて表現しているか（宮島 1972:203）によって、移動動詞を4種類に分けている。

- (37)a. 出発の段階に重点があるもの。でかける、出発する、など
- b. 経過の段階に重点があるもの。むかう、とおる、など
- c. 到着の段階に重点があるもの。つく、とどく、など
- d. 全部の段階をふくむもの。いく、はいる、など

これらの分類において宮島（1972）は、「～ている」の形が、動作の進行を表すかあるいは結果を表すか、「～ていく（くる）」の形があるかどうか、経過点を表す目的語「～を」をとるかどうかで区別している。これらの形式上の特徴が各類の動詞にどのように現れているかをまとめると、以下ようになる。

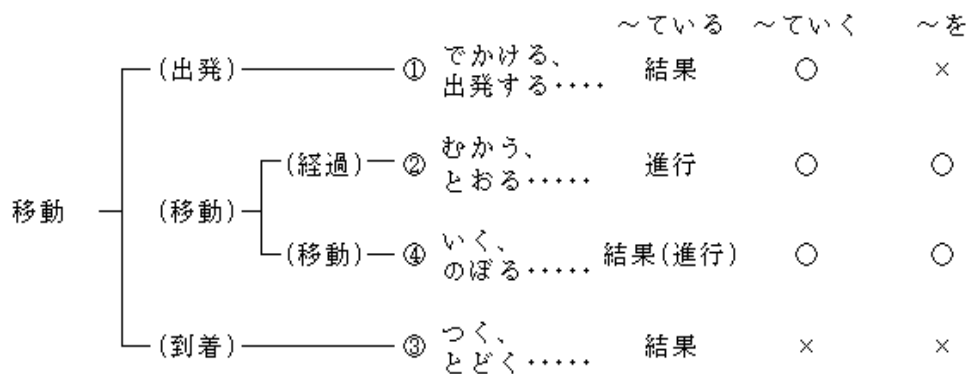


図 2.1 移動動詞の分類（宮島 1972 : 204）

寺村（1982）

寺村（1982）は、「起点」「通過点」「着点」¹⁵という特定化された場所のいずれに特に関係が深いかによって、移動動詞を3つのグループにわけている。その判断基準となるのは、主として助詞の使い方である。以下は筆者による加筆修正が施されている。

(38)a. 起点（～を、～から）

出る、降りる、離れる、（飛び）出す、など

b. 経路（～を）

通る、飛ぶ、走る、経るなど

c. 着点（～へ、～に）

入る、乗る、着く、（飛び）込む、など

寺村（1982）は、「行く」「来る」「帰る」「戻る」の4つの動詞は話し手自身の視点による使い分けに依存していることから、上記の3グループとは別にまとめている。

景山・由本（1997）

景山・由本（1997）は、アスペクト的な面から移動動詞を2つに分けている。

(39)a. 起点／着点指向の移動動詞

入る、着く、到着する、離れる、出発する、など

b. 経路指向の移動動詞

歩く、走る、泳ぐ、飛ぶ、転がる、滑る、うろつく、など

（39a）起点／着点指向の移動動詞とは、アスペクト的に完了相（telic）である

¹⁵寺村（1982）は「出発点」「通過点」「到達点」と述べているが、本研究では「起点」「経路」「着点」と用語を統一する。

動詞で「30 分間」というような時間幅を表す表現とは相容れない特徴がある（*飛行機は 30 分間到着した／離陸した）。（39b）経路指向の移動動詞とは、アスペクト的に未完了相（*atelic*）である動詞で、時間幅を表す表現と相容れる特徴がある（1 時間泳ぐ／散歩する／うろつく）。景山・由本（1997）は、この区別は、アスペクトだけでなく、たとえば「起点／着点指向の移動動詞」は起点「カラ」と着点「ニ」は文中でペアになって用いられることが多く、「経路指向の移動動詞」は通常経路の「ヲ」と共起するなど、統語的な使われ方にも反映されると指摘している。そこで、景山・由本（1997）は、この 2 種をさらに下位分類し、具体例を挙げている。

(40)a. 起点／着点指向の移動動詞

起点重視：出発する、(町を) 出る、離れる、脱出する、発車する、離陸する、去る、立つ、逃げる

着点重視：入る、着く、到着する、(表通りに) 出る、至る、乗る、入学する、入社する、届く、上陸する、上京する

b. 経路指向の移動動詞

移動の方向に関する動詞：さまよう、うろつく、放浪する、越える、くだる、回る、貫く、漂う、伝う、通過する、徘徊する

移動の様態に関する動詞：歩く、走る、泳ぐ、流れる、這う、飛ぶ、闊歩する、転がる、滑る

(景山・由本 1997 : 134)

そして、日本語の多くの動詞は、起点、経路、着点のうち、いずれか 1 つに重点を置いて表現するが、(41) のように起点、経路、着点のすべてを同時にカバーできる動詞もあると指摘している。

(41) 移動する、行く、渡る、上る、往復する、退く、進む、移る

田中・松本（1997）

田中・松本（1997）は移動動詞を次のように4つのタイプに分けて考察している。

(42)a. 方向性を包入した動詞

行く、来る、登る、下る、上がる、下がる、降りる、落ちる、沈む、戻る、
帰る、進む

b. 経路位置関係を包入した動詞

越える、渡る、通る、過ぎる、抜ける、横切る、曲がる、くぐる、回る、
巡る、寄る、通過する、入る、出る、達する、着く、到着する、去る、離
れる、出発する

c. 様態を包入した動詞

歩く、走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ、
潜る、流れる、急ぐ

d. 付帯変化を包入した動詞

分離：取れる、ちぎれる、はがれる、抜ける、脱げる、散る、もげる、分
かれる、分離する

付着：付く、くっつく、つながる、刺さる、はまる、付着する

以上、移動動詞の下位分類を試みた先行研究をみると、大きくは2つから小さくは4つまで移動動詞を分類している。そして、方向性のある動詞であるかどうか、そして方向性のある動詞であれば、それは起点、経路、着点という移動段階のうち、どの段階に焦点を置く動詞であるかが移動動詞の分類に深く関係している。これはつまり、2.1節で言及したように、移動動詞はある方向に向かって移るという基本概念を共通に持ちながら、それぞれ固有の意味特性を持つことを意味する。また、移動表現における名詞の場所性を探る際、結びつく動詞の特性のうち、移動のどの段階に重点を置く動詞であるかが重要な要因の1つになることを示唆する。

2.4 本研究の課題と意義

先行研究から導き出された問題点をまとめながら、本論文で設けられた課題と本研究の意義について述べる。

2.4.1 本研究の課題

1.3 節で記したように、本研究は3つの研究課題を設定する。

〔研究課題 1〕 名詞の場所性は、場所性のありなしの二通りであるか。

〔研究課題 2〕 移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか。

〔研究課題 3〕 どのような特性を持つ名詞が「ところ」と結び付きやすいか。

まず研究課題 1 では、名詞の場所性は場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りであるかどうかを検証する。2.1 節で言及したように、寺村（1993 [1968]）や田窪（1984）などは、空間表現全体の中で名詞の場所性を捉えているため、場所性のある名詞と場所性のない名詞の普遍的な特性を把握することができる。また、文法的な観点から名詞の場所性を判断・説明しているため、場所性の判断における揺れを抑えることができるメリットがある。しかし、認知言語学的な観点、つまりプロトタイプ理論からみると、ある成員をカテゴリー化する際、そのカテゴリーの成員すべてが共通した属性を持っているわけではないことから、名詞の場所性を場所性のありなしという古典的カテゴリー観に基づいて、明確に区切ることについて疑問が生じる。また、「洗面台」や「車」のように名詞の場所性判断のテストフレームからずれる名詞もあることから、研究課題 1 では名詞の場所性に関する再検討として、移動表現における名詞の場所性は、場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りであるかどうかを検証する。

次に、研究課題2では、移動表現における名詞の場所性は名詞の場所性だけではなく、結び付く動詞も影響するかどうかを検証する。森山(1988)や荒川(1992)などは、名詞の場所性を移動体や動詞など文の構成要素との関係の中で捉えている。そのうち、名詞の場所性と動詞の関係に注目している荒川(1992)などは、名詞の場所性は動詞の意味にも大きく制約されて、動詞との関係で決まると指摘している。しかし、荒川(1992)が指摘している動詞の意味とは、その対象に対する相応しい行為であるかどうかを指す。本論文の研究対象である移動表現は、移動そのものを表す空間表現である。そのため、その対象に対する相応しい行為であるかどうかという観点からみると、単に可能なだけの行為である。なお、移動動詞が移動を表わすという共通の意味特定を持ちながらそれぞれ固有の特性を持つことを勘案すると、移動表現における名詞の場所性は、移動動詞の意味特性を考慮して探る必要がある。そこで、移動表現における名詞の場所性は、結び付く移動動詞とも関係しているかどうかを検証する。

最後に、研究課題3では、名詞の空間化である「トコロ」に注目して、どのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付くかを検証する。空間化である「トコロ」は名詞の場所性と密接な関係を持ち、原則的に場所性のある名詞には付かないと言われている。しかし、二重場所化や空間化の省略が生じる場合があり、その理由について研究者の間で意見が分かれている。また、二重場所化や空間化の省略の事象における名詞と動詞の特性についても解明されていない。

そこで、「トコロ」の特性を明らかにすることを目的として、「トコロ」が付く名詞と「トコロ」が付かない名詞の特性を明らかにした上で、二重場所化や空間化の省略が生じる名詞と動詞の特性を探る。

2.4.2 本研究の意義

移動表現はどの言語にも備わる極めて基本的な言語表現であろう。日本語の移動表現において移動の行き先となる名詞の場所性は重要な問題であるが、1.1節で述べたように、言語間で場所性に対する *sensitivity* は多少異なる。そこで、名詞の場所性によって表現形式が異なる日本語において、外国人日本語学習者が母語

の干渉によるエラーを避けて正しい日本語を産出するためには、まず日本語における名詞の場所性と表現形式のルールを理解することが必要である。しかし、2.1節で述べたように行き先と移動体が同じであるにもかかわらず、結びつく動詞によって許容できる度合いが異なる場合がある。そして、このような事象は、これまでの研究からは移動表現における名詞の場所性が説明できない。

そこで、名詞の場所性が重要な問題となる二格名詞句を伴う移動表現を分析し、名詞の場所性と移動構文の特性を明らかにする本研究は、外国人日本語学習者と日本語教師にとっての一助となり、また、日本語文法の精緻化においても貴重な資料になると言えよう。

第3章 調査概要および分析方法

本章では、3つの研究課題を検証するために行った調査方法および分析方法について述べる。まず、3.1節では、言語データ収集法を概観した上で、本調査で用いる調査法の妥当性について論じる。3.2節では実施した調査内容について述べる。具体的には、調査構成および調査用紙作成上の注意点と本調査の限界点、そして調査実施期間と調査協力者について説明する。3.3節では、分析方法および容認度値の求め方について説明する。そして、3.4節では3.1節から3.3節までの内容をまとめる。

3.1 言語データの収集法

本節では、言語データの収集法を網羅的に紹介した上で、本研究で用いる調査法の妥当性について述べる。Greenbaum (1988) は言語データの収集法として以下の3つを挙げている。

- (1) a. コーパス (corpus)
- b. 内省 (introspection)
- c. 実験・調査 (elicitation tests)

まず、(1a) コーパス (corpus) は、我々が実際に書いたり話したりした言葉を大規模に集めてデータベース化した言語データである。コーパスには、使用頻度分析、語と語の結び付きを表すコロケーション分析、そして特定のパターンを含んだ用例が分析できるという強みがある。しかしながら、低頻度の言語事象については、その全体像がコーパスでどれだけとらえられるかという問題点がある。また、容認不可能な表現に関する情報や容認度の程度に関しては把握することができないという限界点がある。

次に、(1b) 内省 (introspection) は、言語研究のために作成したデータがどの

程度容認 (accept) 可能であるかを母語話者が意識的に自分の言語知識に照らして深く見つめたり、論理的操作を挟まず無意識的に即時的な直観により判断したりする作業である。作例に基づく研究は、やり方が適切であれば、言語表現の持つ様々なパラメータを詳細に変化させ、緻密な検討が可能になるといった利点がある (中本・李 (編) 2011 : 7)。しかし、判断すべきデータを研究者自身が判定する場合、余計な推論が入り込み、自然な容認度判断ができにくいため、データの信頼性と説得力の乏しさがあるという問題点は避けられない。

最後に、(1c) 実験・調査 (elicitation tests) は、(1b) の1人の母語話者における内省による判断とは異なり、複数話者の内省を使うことによって、(1b) の弱点であるデータの信頼性と説得力を高めることができる調査法である。ただし、実験・調査には、調査協力者の募集から提示文の適切な要因操作や統制など手間がかかることも多く、過剰な計画で統計解析が複雑になったり、調査協力者に負担がかかると良い結果を得られない可能性が高まるため、十分注意する必要がある。

以上を踏まえて本研究は、3つの言語データの収集法のうち (1c) 実験・調査 (elicitation tests) を用いて、定量的なアプローチから移動表現における名詞の場所性と移動動詞の関係を解明する。定量的なアプローチを用いる理由は、本研究が問題提起している研究課題を明確に解明するためには、容認不可能な表現や容認度の程度を数値で示して対照・比較する必要があるからである。定量的なアプローチにより分析する際、大量の量的データを手に入れることができる (1a) コーパス (corpus) を用いることも考えられる。しかし、コーパスは、上述したように我々が実際に書いたり話したりした言葉を集めた言語データである。つまり、容認可能な表現のみで、容認不可能な表現に関する情報や容認度の程度に関しては把握することができない。また、要因を統制し、条件を変えることができないため、因果関係を明確に把握することが困難である。

そこで、本研究は提示文の条件がコントロールできる作例を提示し、その文に対してどの程度容認可能であるかを評定してもらう容認度評定調査法を用いて研究課題を解明する。容認度評定調査法は、提示された文が評定者にとってどの程度容認できるかを調べる調査方法で、言語学の研究活動において欠かせない研究方法の1つである。しかし、容認度評定調査法においても、他の研究方法と同じく

メリットとデメリットがある。まず、メリットは上に記したように、コーパスと異なり、容認可能な表現だけではなく容認不可能な表現についても観察することができることである。また、提示文の条件を入れ替えることによって、容認度に関わる要因を明確に探ることができ、容認の度合いも測ることができる。一方、デメリットは、内省は主観的であるため、内省の判断者が1人である場合、信頼性の問題に関わることから、常に複数の人に内省判断をしてもらった上でデータとして用いる必要があることである。また、解明しようとする点を明確に認知した上で、意図していない他の要因によって容認度が変わらないようにする工夫が必要である。そこで本研究では、容認度評定調査法のメリットとデメリットを考慮して、メリットとなる部分は活かしつつ、デメリットとなる問題点を克服するため、調べたい点以外の要因によって容認度が左右されないように、提示文が不必要な情報を含むことを避けて、複数の日本語母語話者を対象に、容認度を判定してもらうこととする。

3.2 調査構成

本調査は、容認度の程度を測るため、提示された文がどの程度で容認できるかを回答するリッカート・スケール (likert scale) 方式を採用、「5: とても自然、4: やや自然、3: どちらでもない、2: やや不自然、1: とても不自然」という5水準のいずれかで答えさせる。以下、表3.1に5段階評定の例を示す。自然であるほど選択肢の値を高く設定している。なお、5段階評定の詳細は3.2.4節の表3.5に示す。

表 3.1 5段階評定の例

a. 彼は横浜に行った。	5-4-3-2-1
b. 彼は横浜のところに行った。	5-4-3-2-1
c. 彼は横浜へ行った。	5-4-3-2-1

3.2.1 移動構文

本研究で用いる移動構文は、文脈の情報をコントロールした3つの構文である。
Nは名詞（Noun）、Vは動詞（Verb）の略語である。

- (2) a. NニV
- b. NへV
- c. NノトコロニV

まず、(2a) は行き先となる名詞と動詞がそのまま結び付く直接移動構文で、移動表現における名詞の場所性、そして名詞の場所性と移動動詞との関係性を探るために設けた移動構文である。

次に、(2b) は格助詞に対する地域差によって容認度の判断に揺れがあるかどうかを確認するために設けた移動構文である。場所名詞につくニ格の基本的な意味は用言の表わす動作・作用の到着し帰着する所を示すことである（橋本 1969: 119）。それで、ニ格は主に存在を表わす「ある」「いる」などのような存在動詞の場合はその存在場所を表し、移動を表わす「行く」「着く」などのような移動動詞の場合はその着点¹⁶を表す。ところで、時代が下るにつれて、移動動詞の場合は、着点だけでなく、移動の方向を表わすことになってきた（朴 1997）。これに対して、へ格は元々現在いるところから、はるか遠くの方へ遠ざかっていくことを示す（大野 1978: 22）。すなわち、主として移動動詞について移動作用の向けられる方向だけを表す。しかし、それが院政鎌倉時代からニと同様に着点を表わす用法が出来るようになり（橋本 1969: 146）、行き先を表すとき、現代日本語ではニ格とへ格は置き換え可能になったのである（益岡・田窪（1987）、岩淵（2004）、野田（1991）など）。ところで、ニ格とへ格の使用には地域差があると指摘されており、蘆岡（1979）は明治以降の作家の作品を分析し、江戸、東京の出身者はへ格を用い、

¹⁶研究者によって、帰着点、あるいは到達点などと呼ばれているが、本研究では着点と用語を統一する。

九州出身者は二格を用いる傾向があると指摘している。そこで、本調査は容認度の判断において調査協力者の出身地による影響がなかったことを証明するため、(2b) を設けて分析する。分析結果については、3.3.3 節で示す。

次に、(2c) は (2a) の移動構文に「トコロ」を付け加えている移動構文で、「トコロ」の役割および機能を再検討するために設けた構文である。

今回の調査では、より厳密な名詞と動詞の関係の検証を行うため、調査に用いる移動構文の移動体はすべて人名詞「彼」に統制する。森山（1988）によると移動表現における名詞の場所性は、移動体による相対的なものである。つまり、移動体を制限しないと調査協力者がそれぞれ異なる移動体を基準として回答し、その結果、容認度の判断が揺れてしまう可能性が高い。そこで、本研究では移動体を人名詞である「彼」に統制する。人名詞のうち「彼」という3人称に統制する理由は、1人称「私」である場合、回答者の個人的な経験が投影されて個人差が表れやすいためである。そこで、個人的な経験による判断の揺れを避けるため、移動体の人名詞は3人称「彼」に統一する。

3.2.2 名詞

名詞は、助詞や助動詞のような機能語と違ってその数が多い。すべての名詞を調査対象とすることは不可能であるため、調査対象の名詞を制限する必要がある。そこで、本調査は田窪（1984）が挙げている場所名詞のカテゴリーを参考にして名詞を選定する。田窪（1984）のカテゴリーを参考にする理由は、名詞の特性だけに焦点を当て名詞の場所性を探る代表的研究であり、もっとも包括的に場所性のある名詞を扱っているためである。場所性のない名詞の選定においては、田窪（1984）が挙げているカテゴリーに属さない名詞で、移動体がそこに位置することができるかどうか、移動体より大きいかどうかを考慮して名詞を選定する。このように場所性のある名詞と場所性のない名詞というカテゴリーから調査対象の名詞を選定する理由は、本研究は、場所性は名詞に内在しているものであるという立場から、名詞に本来内在している場所性が、個々の移動表現文においてどのような振る舞いをするかを検証することを目的としているためである。したがっ

て、古典的カテゴリー論による名詞の分類を参考にして、名詞を選定する。

具体的に、場所性のある名詞は田窪（1984）が場所性のある名詞として挙げている6つのカテゴリー（「地名」「機関」「自然物」「建造物（およびその一部）」「身体名称など」「相対名詞」）のうち「身体名称など」を除いて、物理的移動が可能である「地名」「機関」「自然物」「建造物（およびその一部）」「相対名詞¹⁷」のカテゴリーを参考にして名詞を選定する。田窪（1984）は、「?彼は胃のところが悪い」ではなく「彼は胃が痛い」と言うことから、「胃」「腸」「肝臓」「口」「のど」などの「身体名称など」も場所性のある名詞として挙げているが、本研究の調査範囲は主語が人名詞である物理的移動表現であることから、今回は調査対象のカテゴリーから除外する。各カテゴリーに属する名詞を具体的にみると、田窪（1984）は「地名」に属する名詞として「東京」「大阪」「玉野市」などを挙げているが、本調査では「横浜」を選定する。次に、自然物の名詞は田窪（1984）が挙げている「山」「川」「湖」に加えて「海」「池」を調査対象とする。「海」「池」を調査対象に加える理由は、まず「海」は広々とした所という点では「山」と共通しているが、陸地と海洋という対となる物理的な違いを持つためである。次に「池」は、水が満ちている所という点では「海」や「湖」と同じであるが、「海」や「湖」などと違って、移動体である人がその中ではなく周辺に位置する点が異なる。また、「池」は境界となる範囲を一目で把握できるという相違点を持つ。次に、機関名詞として田窪（1984）は「玉野高校」「京都大学」「巨人軍」「大学」「役所」「学校」「高島屋」「デパート」「警察」などを挙げているが、本調査では田窪（1984）が挙げている名詞のうち、特定化されている固有名詞を除いて、「学校」と「デパート」を調査対象とし、それに加えて「放送局」「赤十字」「Unicef」を調査対象とする。「学校」と「デパート」は「学ぶため」「モノを買うため」という移動の目的が明確である一方で、「放送局」はアナウンサーや記者など一部の人のために働く所でありながら、一般の人にとっては比較的移動の目的が簡単に連想できないという相違点を持つ。そして、田窪（1984）は機関に属する名詞として「巨人軍」を挙げているが、たとえば「彼は巨人軍に行った」の場合、実質的な移動の意味より、「巨人軍

¹⁷ 「相対名詞」は研究者によって、「場所名詞」「形式名詞」「空間名詞」「位置名詞」などと呼ばれているが、本研究では「相対名詞」と用語を統一する。

のメンバーになった」という意味で解釈されやすい。そこで、「— のメンバーになる」という意味が「巨人軍」より解釈されにくい「赤十字」と「Unicef」を選定する。次に、「建造物（およびその一部）」の名詞は田窪（1984）が挙げている「家」「部屋」「階段」「2 階」「庭」を調査対象とし、それに加えて「台所」「公園」「厨房」「ステージ」「廊下」「教室」「道」を調査対象とする。「台所」は家の内側の一部分で、全体と部分という空間的関係を持つという特性がある。「公園」は安らぎや憩いの場として利用されるという意味では「庭」と共通しているが、「庭」は上に記したように、施設の敷地内に設けられたものであるのに対して、「公園」は1つの区域である違いがある。「厨房」は「調理する所」という意味として「台所」と同じ所を指すが、レストラン、喫茶店などの事業所の一部分で、料理する人の仕事の間である点で特性が異なる。また「ステージ」はコンサート会場や劇場の一部分で、建物の中に位置する場合もあれば、野外に位置してそれ自体が全体となるなど、全体と部分の関係が非固定的であるという特性がある。そして「廊下」と「教室」は建物内部の一部である点では共通しているが、「廊下」は起点と着点を繋ぐという特性がある。「道」も、「廊下」と同じく起点と着点を繋ぐ点では共通しているが、「廊下」や「通路」などを含む上位語で、より抽象的な概念の語である。最後に、相対名詞としては、田窪（1984）が挙げている名詞のうち「前」「後ろ」「左」「右」「上」「下」「東」「西」「横」を調査対象とする。相対名詞は、方位を示す名詞で、「学校」や「家」などの名詞と違って、具体的な対象となるものを持たない名詞である。

続いて、田窪（1984）が挙げているカテゴリーに属さない名詞としては、「位置」と「大きさ」の2つの属性を考慮して名詞を選定する。まず、「位置」の属性を考慮した理由は、名詞の場所性は移動の結果そこに位置することができるかどうか重要な問題となるからである。場所性のない名詞に対して、「ところ」を加えるのもその理由からである。次に、「大きさ」の属性を考慮する理由は、久島（2002）が指摘している場所とモノの違いによる。久島（2002）は、モノは普通、人間よりも小さく、たとえば、ハンカチならば、直接手に取って自由にいろいろな角度から眺めて大きさを測ることができるという。しかし、場所は人間のほうが小さいので、その中に入って、あるいは脇に立って、大きさを測ることになると述べている。そこで、「位置」と「大きさ」は移動の行き先として捉える際、重要な要因に

なると判断し、これらの2つの属性を考慮して名詞を選定する。なお、ある特定の属性に偏った名詞のみを対象にする場合、そこから導かれた結果を用いて名詞全般の結論を導く際、誤謬に陥り易い。結果の信頼性をより高めるためには、異なる条件の名詞に対する結果も一緒に提示し検討する必要がある。本調査ではこれらの点に留意して、各属性に属する名詞と属さない名詞をそれぞれ選定する。具体的には図3.1のように「位置」は移動体である人と物体の位置関係で、そこに位置することができるかどうかで判断する。

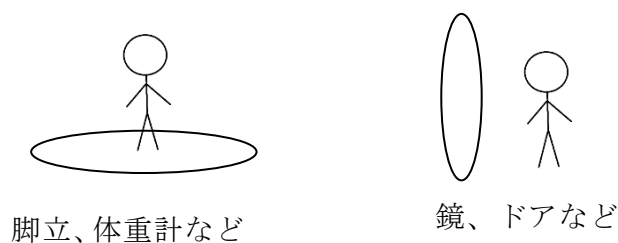


図 3.1 移動体と物体の位置

たとえば、「脚立」や「体重計」などは「脚立に上がる」「体重計に上がる」のように人がその上に立つことができる。しかし、「鏡」や「ドア」などは壁から取り外して、わざわざ床に置いて立ったりしないかぎり、「??鏡に上がる」「??ドアに上がる」は不自然でありモノの外側にしか位置することができない。そこで、対象の上に立ったりすることができる名詞であるかどうかによって2つに分類して、両方の名詞を調査対象とする。なお、その上あるいは中に位置することができる名詞は「内」、できない名詞は「外」と呼ぶ。そして「冷蔵庫に入る」や「銅像にのぼる」のように、そこに位置することが相応しい行為ではないが、不可能な行為ではない場合は「内可」と呼ぶ。ここでいう相応しいかどうかの判断は、アフォーダンス (affordance) という概念観から行う。したがって、「冷蔵庫に入る」や「銅像にのぼる」はアフォーダンスの概念観から判断すると相応しい行為ではないが、できるかどうかの観点からみると物理的には可能である行為であることから、「内可」と呼ぶ。

次に「大きさ」は、相対的なもので何を基準として測るかによってその判断が揺れる。たとえば、リンゴの場合、人間にとってリンゴは小さい物体であるが、蟻に

としてリンゴは大きい物体である。つまり、基準のとりかたによってリンゴの大きさは異なるのである。場所であるかどうかの問題提起は、人間中心主義的な考え方が暗黙的に前提とされている（和氣 2000：74）こと、そして何かが大きいというとき、暗黙のうちに人間の身体の大きさを基準に判断しているという人形の基準（anthropomorphic norm）（Suzuki1970）を参考にして、ここでは人間より大きいものから小さいものまでを調査対象とする。

以上、調査対象となる名詞を表 3.2 と表 3.3 に示す。まず、表 3.2 は田窪（1984）が挙げているカテゴリーを参考にして選定した名詞 32 個の一覧表である。

表 3.2 調査対象の名詞 1

カテゴリー名	名詞
地名	横浜
自然物	山、海、湖、池、川
機関	学校、デパート、放送局、赤十字、Unicef
建造物 （およびその一部）	家、部屋、台所、厨房、ステージ、公園、庭、教室、2 階、階段、廊下、道
相対名詞	前、後ろ、左、右、上、下、東、西、横

続いて、表 3.3 は、表 3.2 のカテゴリーに属さない名詞 22 個の一覧表である。なお、「位置」について「内」は「○」、「内可」は「△」、「外」は「×」で示す。また「大きさ」について「大」は「○」、「小」は「×」で示す。ただし、たとえば「脚立」のように、人より大きいものも小さいものも両方ありえる場合は、「△」で示す。

表 3.3 調査対象の名詞 2

名詞	位置	大きさ
カーペット	○	○
物干し台	○	○
脚立	○	△

金庫	○	△
椅子	○	×
体重計	○	×
岩	△	○
木	△	○
電柱	△	○
銅像	△	○
洗濯機	△	△
跳び箱	△	△
冷蔵庫	△	△
テーブル	△	△
ドア	×	○
壁	×	○
鏡	×	△
エアコン	×	△
窓	×	△
花瓶	×	×
消しゴム	×	×
扇風機	×	×

3.2.3 移動動詞

2.3 節で言及したように、移動動詞はいくつかに分類することができる。しかし、寺村（1982）も指摘しているように、動詞によってどのグループに属するか問題になる動詞がある。(3) をみると、同じ動詞が3つのグループに属している。

- (3) a. 家を出る（起点）
 b. 門を出る（経路）
 c. 表通りに出る（着点）

また、寺村（1982）は、1つのグループの中でも、助詞の使い方が一様ではないと指摘している。要するに、動詞によって複数の分類に跨る動詞もあることから、ある特定の基準から分類された動詞のみを調査対象の動詞として選定することは望ましくないとと言える。そこで、二格名詞句を伴う移動表現における名詞の場所性という本研究の趣旨を考慮して、先行研究の分類に縛られず、移動動詞全体の中で二格との共起出現頻度数が 9,000 以上である「寄る」「帰る」「近づく」「向かう」「行く」「至る」「出る」「上がる」「進む」「着く」「入る」「戻る」「来る」計 13 個の動詞を調査対象の動詞として選定した。共起出現頻度数が 9,000 以上である動詞を中心に選定した理由は、共起出現頻度数 9,000 以下からは「飛ぶ」「泳ぐ」「滑る」など移動の様態を表す動詞（様態動詞）が多く出現し、共起出現頻度数も大きく下がるからである。以下、動詞選定の流れを図 3.2 に示す。

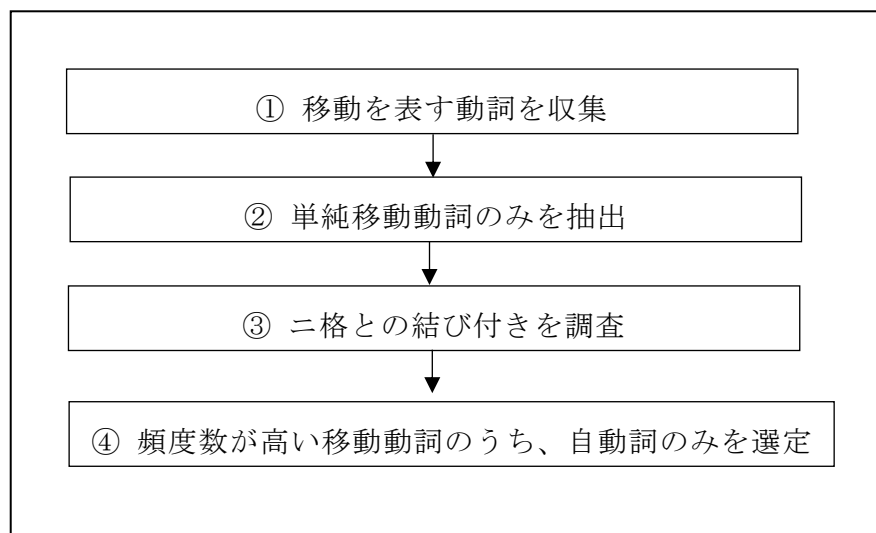


図 3.2 移動動詞選定の流れ

①移動動詞の収集においては、移動動詞に関する先行研究と辞書を参考にした。

具体的には、宮島（1972）から 376 個¹⁸、薛（1997）から 84 個、影山・由本（1997）から 40 個、田中・松本（1997）から 248 個¹⁹、李（2009）から 43 個の動詞を抜き出した。そして、漏れる動詞がないように、「分類語彙表増補改訂版データベース²⁰」（2004）と『角川類語国語辞典』（1981）から移動動詞を収集した。これらは意味的な項目を立て分類しているもので、「分類語彙表増補改訂版データベース」（2004）からは、「2.152 進行・過程・経由」「2.1521 移動・発着」「2.1522 走り・飛び・流れなど」「2.1523 巡回など」「2.1524 通過・普及など」「2.1525 連れ・導き・追い・逃げなど」「2.1526 進退」「2.1527 往復」「2.153 出入り」「2.1531 出・出し」「2.1532 入り・入れ」「2.154 上がり・下がり」「2.1541 乗り降り・浮き沈み」「2.156 接近・接触・隔離」の項目から 2,459 個の動詞を抽出した。そして、『角川類語国語辞典』（1981）からは「21 移動」「22 離合」「23 出沒」「30 動作」「31 往来」の項目から 2,498 個の動詞を抽出した。

②収集した移動動詞のうち、複合動詞、たとえば和語複合移動動詞（たとえば、駆け上がる、滑り降りる、飛び出るなど）や漢語複合移動動詞（たとえば、飛行する、直行する、突入する、到着するなど）、そして複合移動述語（たとえば、走って行く、運んで行く、通って行くなど）などを除いて、単純移動動詞（有方向移動動詞＋様態動詞＋自動詞＋他動詞）を抽出した。

③しかし、単純移動動詞においても、その性質が多様で結び付きやすい格が異なる。影山・由本（1997）、小原（2007）によると、たとえば「歩く」「走る」「泳ぐ」「滑る」など移動のあり方を表す様態動詞は終結的（telic）な性質を持ち得ないため、通常は着点を表す格を取りにくい。また、「行く」「来る」「進む」「着く」など内在的に方向付けを示す有方向移動動詞のうち「通る」「抜ける」「過ぎる」などの動詞も経路の特性を表す動詞であるため着点を表す格を取りにくいと指摘されている。このように、単純移動動詞の中でも様々な性質を持っており、それによって

¹⁸ 宮島（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』は現代語の動詞の意味・用法を分析・記述しているため、移動動詞のみならず多様な動詞が収録されている。そこで、カテゴリー化されている目次を参考に移動動詞を抽出した（「3.5 方向」「3.6 距離」「3.7 回数」「3.8 手法・方法」の一部、「3.9 態度」「3.10 ようす」）。

¹⁹ 1.3 日本語の移動動詞に収録されている動詞すべてである。

²⁰ 書籍版の『分類語彙表 増補改訂版』の元となったデータを加工したものである。

結び付く格が異なることから、単純移動動詞を『筑波ウェブコーパス』の検索ツールである NLT (NINJAL-LWP for TWC)²¹を用いて、二格との結び付きを頻度数で調べた。

④二格と結び付く割合と出現頻度数が高い自動詞 (365,000 件から 9,000 件の間) のうち、「届く」や「伝わる」のように人間の物理的な移動表現には使わない動詞は除外した。そして、「入れる」「出す」「戻す」のような他動詞は、客体移動表現文に用いられる動詞であるため、分析対象外とした。客体移動表現文とは、たとえば「太郎は人形を箱に入れた」のように、目的語である「人形」の移動を表すもので、使役移動表現とも呼ばれる。移動体の自らの移動を表す主体移動表現と違って、客体移動表現は外部からの力によって移動が行われる強制性が含意されている移動表現である。すなわち、主体移動表現における名詞の場所性とは範囲や性質が異なるため、他動詞は分析対象から除外する。

以上、調査対象語の動詞は、「行く」「来る」「帰る」「戻る」「寄る」「近づく」「進む」「入る」「向かう」「上がる」「着く」「至る」「出る」である。「至る」は、「現在に至った」や「結論に至った」など、ある段階・状態になるという非物理的移動の意味だけではなく、「山頂に至った」「大阪に至った」のように、人間の物理的空間移動の移動表現においても用いられる動詞である。出現頻度数からみると、物理的空間移動表現より非物理的移動の意味としてよく用いられる動詞であるが、その場所に行き着く、到達するという物理的空間移動を基本義としている動詞であり、限られた物理的空間移動表現に用いられる動詞の特性を探ることは、行き先となる名詞と動詞の関係解明において一助となるため分析対象とする。

3.2.4 調査項目の設定

本調査で用いる提示文は、移動構文 3×名詞 54×動詞 13 の組み合わせで計 2,016 項目になる。すべての提示文について同一の調査協力者に回答させることが

²¹オンライン検索ツール『NINJAL-LWP for TWC』(略称 NLT) ver.1.30 を利用している。検索ツール NLT は、筑波ウェブコーパス略称 (略称 TWC) を検索するために、開発したコーパス検索システムである。

望ましいが、調査協力者一人に全ての調査項目を実施するには相当の時間と労力、そして集中力を要する。また、設問数が多いほど途中離脱と誤回答の率が高くなり、容認度評定という内省判断調査であることを勘案すると、調査協力者に負担がかかり、正しく内省ができなくなる恐れもある。以上の対策として、長期間に渡って評定する方法も考えられるが、時間の経過と共に判断の基準が変わったり、学習したりする可能性もある。そこで、名詞をランダムに並べ、それを 13Part (A から M) に分けて、それぞれ異なる調査協力者に回答してもらった。各 Part の調査協力者が異なる場合、判断の厳しさにずれが生じる恐れがあるため、共通項目を設けて各 Part 間で判断の厳しさにずれがあるかどうかを検証する。ここでいう共有項目とは、調査協力者が共通に答える項目で、行き先となる名詞は場所性のある名詞と言われている「横浜」と場所性のない名詞と言われている「消しゴム」である。場所性の度合いがそれぞれ異なる名詞を用いることによって、名詞の場所性によって容認度の度合いに差があるかどうかを検証できる。表 3.4 は調査構成の詳細である。

表 3.4 調査構成の詳細

Part	(共通) 非共通名詞 (属性)
A	(横浜 (地名)、消しゴム (×、×))、湖 (自然物)、厨房 (建造物)、左 (相対名詞)、物干し台 (△、○)
B	(横浜 (地名)、消しゴム (×、×))、家 (建造物)、前 (相対名詞)、カーペット (○、○)、冷蔵庫 (△、△)
C	(横浜 (地名)、消しゴム (×、×))、山 (自然物)、上 (相対名詞)、階段 (建造物)、エアコン (×、△)
D	(横浜 (地名)、消しゴム (×、×))、放送局 (機関)、教室 (建造物)、壁 (×、○)、鏡 (×、△)
E	(横浜 (地名)、消しゴム (×、×))、デパート (機関)、横 (相対名詞)、金庫 (○、△)、テーブル (△、△)
F	(横浜 (地名)、消しゴム (×、×))、2 階 (建造物)、庭 (建造物)、右 (相対名詞)、岩 (△、○)

G	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、公園(建造物)、東(相対名詞)、電柱(△、○)、花瓶(×、×)
H	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、道(建造物)、西(相対名詞)、銅像(△、○)、体重計(○、×)
I	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、海(自然物)、ステージ(建造物)、跳び箱(△、△)、椅子(○、×)
J	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、川(自然物)、Unicef(機関)、脚立(○、△)、ドア(×、○)
K	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、池(自然物)、下(相対名詞)、扇風機(×、×)、木(△、○)
L	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、学校(機関)、部屋(建造物)、後(相対名詞)、窓(×、△)
M	(横浜(地名)、消しゴム(×、×))、赤十字(機関)、台所(建造物)、廊下(建造物)、洗濯機(△、△)

また、同じカテゴリーに属する名詞のみが入った場合、重複していると見なされる恐れがあるため、異なるカテゴリーに属する名詞が調査項目に入るように調整している。

以上、一人当たりの項目は、計 234 問で(移動構文 3×名詞 6(共通の名詞 2つを含む)×動詞 13)で、所要時間は 20 分程度である。調査協力者は計 494 名で、その詳細は、3.2.5 節で述べる。

3.2.5 調査用紙作成上の注意点および限界点

調査用紙を作成するにあたって、留意した点に関して例を挙げながら説明する。

表 3.5 調査用紙の一部

5: とても自然 4: やや自然 3: どちらでもない 2: やや不自然 1: とても不自然

a.彼は横浜に行った。	5-4-3-2-1	a.彼は物干し台に上がった。	5-4-3-2-1
b.彼は横浜のところに行った。	5-4-3-2-1	b.彼は物干し台のところに上がった。	5-4-3-2-1
c.彼は横浜へ行った。	5-4-3-2-1	c.彼は物干し台へ上がった。	5-4-3-2-1
a.彼は湖に来た。	5-4-3-2-1	a.彼は消しゴムに戻った。	5-4-3-2-1
b.彼は湖のところに来た。	5-4-3-2-1	b.彼は消しゴムのところに戻った。	5-4-3-2-1
c.彼は湖へ来た。	5-4-3-2-1	c.彼は消しゴムへ戻った。	5-4-3-2-1
a.彼は左に進んだ。	5-4-3-2-1	a.彼は横浜に寄った。	5-4-3-2-1
b.彼は左のところに進んだ。	5-4-3-2-1	b.彼は横浜のところに寄った。	5-4-3-2-1
c.彼は左へ進んだ。	5-4-3-2-1	c.彼は横浜へ寄った。	5-4-3-2-1
a.彼は厨房に着いた。	5-4-3-2-1	a.彼は湖に行った。	5-4-3-2-1
b.彼は厨房のところに着いた。	5-4-3-2-1	b.彼は湖のところに行った。	5-4-3-2-1
c.彼は厨房へ着いた。	5-4-3-2-1	c.彼は湖へ行った。	5-4-3-2-1

調査用紙作成上の注意点として1つ目は、できる限り調査協力者の負担を減らすことである。表3.5のように、自由記入ではなく、あらかじめ用意された評定値から選ぶことができるように、各項目に5段階の評定値を入れた。

2つ目は、評定が曖昧になることを避けることである。5水準のいずれかを答えさせるやり方を取るため、比較対象となる文がない場合、評定が曖昧になる可能性がある。したがって、判定の厳密性を確保するため、3つの移動構文「N = V」「N > V」「N < V」を1Setで提示している。

3つ目は、提示順による順序効果を避けることである。アンケートの時間が長くなればなるほど、精度と回答率が低くなる。そこで、提示順序による回答の影響を除くため、1Partにつき提示文の順番が異なる4つの形式を用意して調査を実施した（資料1参照）。

4つ目は、漢字の読み方による影響を避けることである。たとえば、「家」の場合「いえ」とも読めるし、「うち」とも読める。複数の読み方がある場合、どちらで読むかによって容認度判断は揺れる。したがって、複数の読みが可能である漢字は、ひらがな表記を入れた。

5つ目は、調査協力者を日本語母語話者に統一することである。社会のグローバル化が進むなか、日本人だけではなく、交換留学生や短期留学生など多様な背景を持つ学生が大学に在籍している。また、国際結婚や移民などで日本語が母語ではなく母国語である場合もある。これらのデータは、母語話者の日本語と異なる質のデータで新たな変数として作用するため除外することが望ましい。したがって、出身地を含めて、海外滞在経験および期間、両親の国籍、家庭内の言語使用状況をフェイスシートに入れて、調査協力者の背景が把握できるように工夫した。

6つ目は、各評定値が一定の間隔で増加あるいは減少することを調査協力者に暗示することである。5段階評定のリッカート・スケールは、順序尺度である。しかし、本論文では、間隔尺度として捉えてどの程度容認できるかを平均値から判定することを規定しているため、連続しているアラビア数字を用い、また評定値と評定値の間に同じ長さの棒線を入れた。その他に、各評定値が指す意味が常に確認できるように、各ページのヘッダーに「5：とても自然、4：やや自然、3：どちらでもない、2：やや不自然、1：とても不自然」を明記した。

本調査は、移動体を統制したり、行き先となる名詞と移動を表わす動詞以外の情報は排除するなど、意図していない要因による影響を徹底的に排除している。このようにコントロールした作例を用いることによって、名詞と動詞の関係を明確に把握することが期待できる。しかし、調査に用いる作例は、我々が実際書いたり話したりする自然な言語と離れた表現を扱っていることも事実である。このような自然言語との乖離は、容認度評定調査のジレンマであり限界点であると言える。また、設定している条件以外のことについては発見・解明できないことも本調査の限界である。しかし、「N = V」「N ノトコロニ V」という極めてシンプルな移

動構文から名詞の場所性を探ることによって、名詞の場所性を明確に解明する基礎的な研究として位置付けることができる。また、今後本研究の調査結果を基盤として、名詞の場所性に関わる多様な条件について探ることもできるであろう。

3.2.6 調査実施の期間および調査協力者

2015年7月から2017年1月まで10校（大学9校、高校1校²²⁾）の協力を得て容認度評定調査を実施した。調査協力者は、日本の大学に在籍する学部生379名および高校3年生115名、計494名である。本調査は、個人差の影響を抑えるため、各Partで30名以上を目標に回答者のデータを収集した。表3.6に各Partの回答者数を示す。

表 3.6 各 Part の回答者数

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	計
35	47	38	41	39	36	38	36	37	39	36	33	39	494

3.3 分析方法

3.3.1 データの処理

本調査は日本語母語話者を対象にしている。そのため、フェイスシートに書かれている情報を基に留学生や日本語を母語としない者、そして家庭内で2つ以上の言語を使用する調査協力者のデータは分析対象から除外した。また、同じ回答が続く場合や一定のパターンでの回答が全体項目数のうち半分以上続く不良回答も分析対象から除外した。その結果、76名（データ不良36名、外国人留学生および家庭内で2ヶ国語以上を駆使する40名）を除いて、418名分のデータを本研究の

²²⁾高校3年生と大学生の間で、調査結果がくつがえるほど母語能力に関する大きな差はないと仮定する。

分析対象のデータとして用いる。表 3.7 に各 Part の分析対象の回答者数を示す。

表 3.7 分析対象となる各 Part の回答者数

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	計
30	37	35	38	31	30	31	31	32	32	30	31	30	418

3.3.2 データの解釈

本調査は、回答の度合いを明確にすることができると言われている 5 段階評定のリッカート・スケールを採択する。Stevens (1946) は、尺度が含む情報量によって、比例尺度 (ratio scale)、間隔尺度 (interval scale)、順序尺度 (ordinal scale)、名義尺度 (nominal scale) に分類している。図 3.3 は各尺度が含む情報量である。

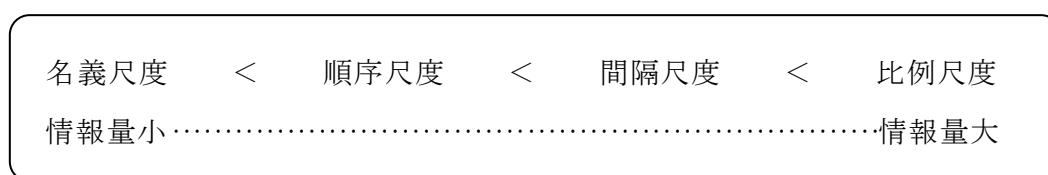


図 3.3 尺度と情報量 (竹内・水本 2014 : 34)

竹内・水本 (2014) は、もっとも情報量が多いのは比例尺度であり、名義尺度に向かうにつれて、その量が減って行くと述べている。したがって、たとえば、間隔尺度のデータを順序尺度に変換することは、情報量をそぎ落とすことで可能となるが、逆方向に変換することは不可能となる。しかしながら、ほとんどの統計的検定が、データ収集において間隔尺度以上を要求するため、リッカート・スケールは、厳密には順序尺度ではあるが、間隔尺度と「みなす」のが、心理学においては常識的な所作である (たとえば、鎌原・大野木・宮下・中沢 1998) と述べている。また、このような「みなす」行為の是非については、1970 年代頃から多数の研究者が議論しており、その結果として、尺度を等間隔にする努力を怠らない限り問題はないという結論に達している (小塩・西口 2007)。本調査では 3.2.5 節で述べ

たように、各評定値が一定の間隔であることを調査協力者に暗示するため、ことばではなく連続しているアラビア数字を用いることと、評定値と評定値の間に同じ長さの棒線を入れる工夫をした。なお、Carifio&Perla (2008) は、リッカート・スケールの分析方法について、順序尺度派の意見も確かであるが、理論的な議論に気をとられて経験的なデータを無視する傾向があり、間隔尺度としてみなして分析しても、ほとんどの結果が歪まないことが経験的・実証的に明らかになっていると指摘している。そして、内田 (1997) は一般的に順序尺度のデータを等間隔である間隔尺度のデータとして統計的に解析する際、中間回答が存在しない4段階や6段階のような場合には、等間隔性の問題があるので間隔尺度とみなして解釈すべきでないが、中間回答が存在する5段階以上であれば、等間隔とみなして解析しても不具合はないと述べている。

本調査の5段階評定は、順序尺度に当たるものであるため、順序尺度として扱って解釈すべきであり、原則に従えば平均値を求めたりするなど四則の演算はすべて不可能になる。しかし、本研究が検証しようとする研究課題からみると、データ全体の変化や比較に適する平均値を求めて比較する必要がある。そこで、本調査は、各評定値が一定の間隔であることを調査協力者に暗示するため、評定値を数値化して示すことや中間回答が存在する5段階に設定するなどの工夫を行い、また経験上リッカート・スケールを間隔尺度として捉えて解釈しても不具合がないという先行研究の指摘を受け入れて、等間隔尺度であるとみなした解析を行う。

3.3.3 共通項目および二格とへ格の分析結果

共通項目は、Games Howell 法を用いて検証する。多重比較法はその種類がいろいろあるが、まだ確立した手法とは言い難いため最適な手法を選択する基準はないと言われている。本調査のデータは、項目によって左、または右に歪んだ分布をしており、サンプル・サイズも若干異なる。そこで、グループの分散とサンプル・サイズが等しくなくても検証できる Games Howell 法を用いて検証を行った。なお、統計処理は統計解析ソフト IBM SPSS Ver.21.0 を使用した。検証の結果、共通項目 78 項目のうち、1 項目(彼は横浜に入った)において有意な差がみられた。

1 項目について有意な差が見られたことは確かであるが、検定する数が増えると、帰無仮説が実際には真であるのに棄却してしまう過誤の確率が増えることも確かである。そこで、本研究では、この 2 つのことを考慮して、判断の厳しさにずれがあるかどうかの判断は保留する。

二格とへ格について鶴岡（1979）は、江戸、東京の出身者はへ格を用いるのに対して、九州出身者は二格を用いる傾向があると指摘している。これはつまり、調査協力者の出身地によって、名詞の場所性、あるいは名詞と動詞の関係の問題ではなく、二格であるかへ格であるかによって容認度の判断にずれが生じる恐れがある。そこで、容認度の判断において調査協力者の出身地による影響はなかったことを検証するため、調査協力者のうち、東京出身者 52 名と九州出身者 35 名のデータを抽出した。共通項目を用いて二格とへ格の容認度の平均値を求めて比較した結果（計算式は図 3.4 を参照）、東京出身者と九州出身者両方とも二格 2.7、へ格 2.6 で、地域による二格とへ格の差は見られなかった。以上により、容認度の判断において調査協力者の出身地による影響はなかったと言える。

3.3.4 容認度の値と変化幅の求め方

まず、提示された各移動表現文に対してどの程度容認できるかは、容認度の平均値（容認度値）から求める。図 3.4 は容認度値の計算式である。

$$\frac{(5 \times \text{数}) + (4 \times \text{数}) + (3 \times \text{数}) + (2 \times \text{数}) + (1 \times \text{数})}{\text{回答者数}}$$

図 3.4 容認度値の計算式

そして、各名詞や動詞に対する容認度値は、該当する名詞あるいは動詞が含まれている各移動表現文の容認度値から求める。

名詞の容認度値を求める場合 ↓	移動表現	容認度 値	移動表現	容認度 値	移動表現	容認度 値
	N ₁ にV ₁	5	N ₂ にV ₁	3	N ₃ にV ₁	1
	N ₁ にV ₂	5	N ₂ にV ₂	5	N ₃ にV ₂	2
	N ₁ にV ₃	2	N ₂ にV ₃	3	N ₃ にV ₃	5
	N ₁ にV ₄	1	N ₂ にV ₄	3	N ₃ にV ₄	5
	N ₁ にV ₅	4	N ₂ にV ₅	5	N ₃ にV ₅	5
	N ₁ にV ₆	5	N ₂ にV ₆	5	N ₃ にV ₆	5
	→ 動詞の容認度値を求める場合					

図 3.5 移動表現文の容認度の例

たとえば、図 3.5 の結果から名詞 N₁ の容認度値を求める場合、

$$N_1 = 5 + 5 + 2 + 1 + 4 + 5 \text{ (容認度値)} \div 6 \text{ (数)}$$

動詞 V₁ の容認度値を求める場合は、

$$V_1 = 5 + 3 + 1 \text{ (容認度値)} \div 3 \text{ (数)}$$

である。続いて、容認度の変化幅、すなわち結び付く動詞あるいは名詞によって容認度の値が変わる幅は、容認度の最大値から最小値を引いて求める。たとえば、名詞 N₂ の容認度の変化幅を求める場合は、

$$N_2 = 5 \text{ (最大値の容認度)} - 3 \text{ (最小値の容認度)}$$

である。続いて、V₁ の容認度の変化幅を求める場合は、

$$V_1 = 5 \text{ (最大値の容認度)} - 1 \text{ (最小値の容認度)}$$

である。ちなみに、本調査は 5 段階評定調査であるため容認度の最大値は 5 で、最小値は 1 である。したがって、変化幅の最大値は 4 で、最小値は 0 である。なお、データの散らばりの度合いは標準偏差値で示す。

$$s = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}$$

n : データの総数

x_i : 各データの容認度値

\bar{x} : データの平均容認度値

3.4 まとめ

本研究で設けられた 3 つの研究課題を検証するため、日本語母語話者 494 名を対象に容認度評定調査を実施した²³。提示文は、3 つの移動構文（「N = V」「N へ V」「N ノトコロニ V」）を基にしている移動表現文である。本研究の研究課題 1 である移動表現文における名詞の場所性を検証するため、調査対象語の名詞は、いわば場所性のある名詞 32 個と場所性のない名詞 22 個である。場所性のある名詞 32 個は、田窪（1984）の場所性のある名詞のカテゴリーを参考にして選定した。そして、場所性のない名詞は田窪（1984）が挙げているカテゴリーに属さない名詞のうち位置（対象の上あるいは中に位置することができる名詞からできない名詞まで）と大きさ（移動体である人より大きいものから小さいものまで）の属性を考慮して 22 個の名詞を選定した。

本研究は、場所性は名詞に内在していることを認めつつ、認知言語学的立場か

²³分析対象の回答者数は 418 名である（3.3.1 節参照）。

ら、場所性のある名詞と場所性のない名詞という二分法的な捉え方に疑問を持ち、名詞に内在している場所性を再検討することを出発点として、調査対象の名詞は名詞の素性だけに注目して選定を行った。続いて、調査対象の動詞は、3.2.3 節で述べたように動詞によって助詞の使い方が一様ではないことから、動詞の下位分類に縛られず、移動動詞全体のうち二格と結び付きやすい単純移動動詞 13 個を選定した。

本調査で用いる提示文の項目数が計 2,016（移動構文 3×名詞 54×動詞 13）であることから、提示文の項目数を 13Part に分けて調査を実施した。調査対象の項目数を分けることによって、評定者間の判断の厳しさを判定するため設けた共通項目については、共通項目 78 項目のうち 1 項目について有意な差が見られた。検定する数が増えると、Part 間に判断の厳しさにずれはないという帰無仮説が実際には真であるのに棄却してしまう過誤の確率が増えることから、判断の厳しさにずれがあるかどうかの判断は保留とした。そして、本調査は容認度の判断において調査協力者の出身地による影響がなかったことを証明するため「N = V」と「N へ V」を設けて容認度を検証した。その結果、調査協力者の出身地による影響はなかったことを明らかにした。

以上により、本研究では容認度評定調査法から得られたデータを用いて、3 つの研究課題を検証する。各研究課題の検証の結果は、次の第 4 章に示す。

第4章 容認度評定調査による検証および分析結果

本章では、本研究で設けられた 3 つの研究課題の検証の結果を示す。4.1 節では研究課題 1 の検証の結果、4.2 節では研究課題 2 の検証の結果、4.3 節では研究課題 3 の検証の結果を示す。そして、4.4 節では、各研究課題の検証の結果をまとめる。

4.1 二格名詞句の場所性

4.1.1 研究背景および研究課題

[研究課題 1] 移動表現における名詞の場所性は、場所性のありなしの二通りであるか。

2.1.1 節で述べたように、寺村(1993[1968])、奥田(1983[1962])、鈴木(1972)、田窪(1984)などは、名詞の場所性は名詞それ自身に内在しているものとして捉えて、場所性のある名詞と場所性のない名詞に分けている。ところで、我々人間はある複数の対象や出来事から、類似点を見出してカテゴリー化するが、そのカテゴリーの成員はすべてが共通した属性を持っているわけではない。そしてカテゴリーの境界は必ずしも明瞭ではない。そこで本研究は、場所性は名詞に内在しているものであることを認めつつ、研究課題 1 では場所性のある名詞と場所性のない名詞という二分法的な捉え方について再検証を行う。

4.1.2 分析方法

名詞の場所性の度合いは、どの程度で容認できるかを示す容認度値で判断する。2.1.1 節で述べたように、名詞の場所性を二分法的に捉えている寺村(1993[1968])

や田窪（1984）などは、名詞の場所性が問題となる存在表現や移動表現などの空間表現において、場所性のある名詞はそのまま動詞と結び付くことができるが、場所性のない名詞はそのまま動詞と結び付くことができず非文になると指摘している。そして、二格名詞句と動詞の関係から名詞の場所性について言及している鈴木（1972）と奥田（1983 [1962]）も、場所性のある名詞はそのまま行き先として捉えられるが、場所性のない名詞は「トコロ」などの形式名詞を付け加えて空間化する必要があると指摘している。

以上の内容から、場所性のある名詞は動詞とそのまま結び付くことができるが、場所性のない名詞は動詞と直接結び付くことができないため、「N = V」という直接移動構文に対する各名詞の容認度値は、図 4.1 のように両極化して分布するはずである。図 4.1 は、容認度軸上に分布している各名詞の容認度値で、「●」は 1 個の名詞を指す。

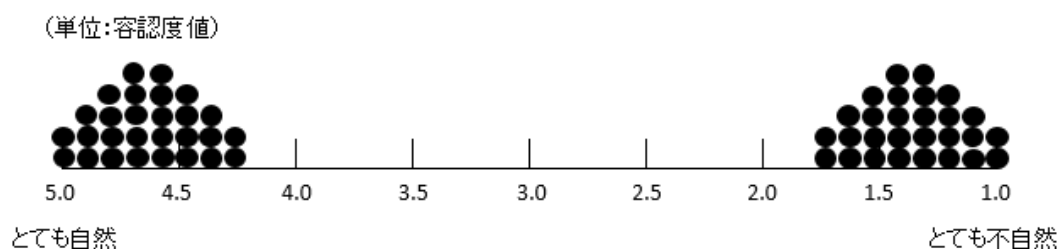


図 4.1 各名詞の予想容認度値

各名詞の場所性を検証するための具体的な分析方法は以下の通りである。

表 4.1 サンプルデータ 1

移動表現文	容認度値	移動表現文	容認度値
彼は公園に行った。	5	彼は鞆に行った。	3
彼は公園に来た。	4	彼は鞆に来た。	1
彼は公園に着いた。	5	彼は鞆に着いた。	1
彼は公園に戻った。	4	彼は鞆に戻った。	2

- ① 「N = V」の移動構文における各名詞の容認度値（平均値）を算出する。たとえば、表 4.1 のデータから「公園」と「鞆」の容認度値を算出する場合、「公園」の容認度値は $4.5 ((5+4+5+4) / 4)$ で、「鞆」の容認度値は、 $1.8 ((3+1+1+2) / 4)$ である。
- ② ①の計算法から各名詞の容認度値を算出して、その結果を容認度軸上に示す。
- ③ ②の結果から、各名詞の容認度値が図 4.1 のように両極化しているかどうかを確認する。

研究課題 1 は、二格名詞句を伴う移動表現における名詞の場所性に対する検証で、名詞と動詞の関係は、研究課題 2 で検討する。

4.1.3 結果

名詞の場所性は場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りであるかどうかを検証するため、「N = V」という直接移動構文における各名詞の容認度値を求めた。図 4.2 は各名詞の容認度値を容認度軸上に示した結果である。「●」は名詞 1 個を指す

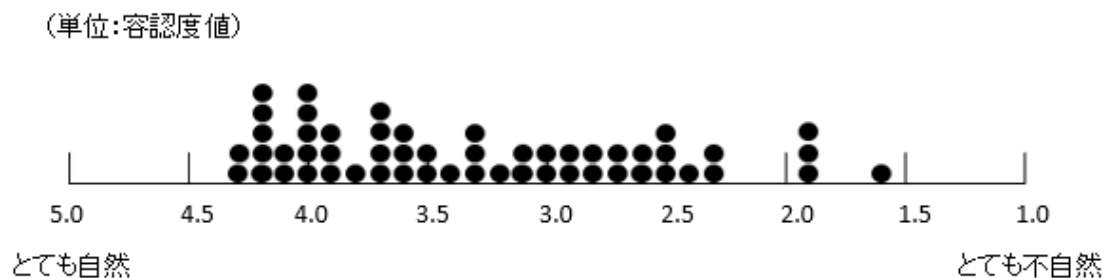


図 4.2 各名詞の容認度値

図 4.2 の結果をみると、名詞の容認度値は両極化しておらず、容認度 4.3 から 1.6 まで連続的であった。名詞の場所性が場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りであれば、各名詞の容認度は図 4.1 のようにある特定の容認度値に密集して、さらに両極化するはずである。しかし、図 4.2 の結果をみると、名詞の容認度

はある特定の値に密集して両極化しているわけではなく、連続的に分布している。つまり、容認度が連続的に分布していることは、名詞の場所性も連続的であると解釈されるものであることを意味する。

以上により、名詞の場所性を場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りに分けることは不適切であると言える。なお、容認度の値が連続的であることから本研究では名詞の場所性は場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで場所性の度合いを持つものであると主張する。場所性のある名詞はそのまま動詞と結び付くことができる一方で、場所性のない名詞は非文になることから（寺村（1993 [1968]）、鈴木（1972）など）、容認度の値が高い名詞は場所性の強い名詞で、容認度の値が低い名詞は場所性の弱い名詞であると言える。

続いて、場所性の強い名詞（＝容認度値の高い名詞）と場所性の弱い名詞（＝容認度値の低い名詞）、そしてその間に分布している名詞の特徴を探るため、図 4.2 の詳細を以下の図 4.3 に示す。左側の数字は容認度値を表す。

4.3	厨房、家
4.2	山、海、部屋、湖、放送局
4.1	教室、2 階
4.0	学校、ステージ、池、川、横浜
3.9	庭、公園、デパート
3.8	台所
3.7	上、左、西、金庫
3.6	前、物干し台、廊下
3.5	赤十字、右
3.4	下
3.3	階段、東、テーブル
3.2	Unicef
3.1	道、横
3.0	岩、後ろ
2.9	木、ドア

2.8	壁、カーペット
2.7	椅子、電柱
2.6	銅像、脚立
2.5	窓、冷蔵庫、跳び箱
2.4	鏡
2.3	体重計、洗濯機
1.9	花瓶、扇風機、エアコン
1.6	消しゴム

図 4.3 「N = V」の移動構文における各名詞の容認度値

図 4.3 をみると、場所性の強い名詞は「厨房」「家」「山」「海」など、田窪（1984）のカテゴリーに属する名詞が多く、場所性の弱い名詞は「消しゴム」「花瓶」「扇風機」「エアコン」など、田窪（1984）のカテゴリーに属さない名詞が多い。そしてその間には、田窪（1984）のカテゴリーに属する名詞と属さない名詞が混ざっている。その中でも、相対名詞に属する名詞が多く、自然物に該当する名詞は含まれていない。この結果から、田窪（1984）が提示している場所性のあるカテゴリーの間でも場所性の度合いに差があって、自然物はもっとも場所性の強いカテゴリーであり、相対名詞はもっとも場所性の弱いカテゴリーであると言える。また、同じカテゴリーに属する名詞の間でも、名詞によって容認度の値が異なることから、名詞を一貫して単純にカテゴリー化して分類することは望ましくないと言える。

5.1 節では場所性の強い名詞と場所性の弱い名詞の間に位置している名詞を中心に、名詞の場所性に関わる要因について考察する。

以上、名詞の場所性は場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りであるかどうかを再検討した結果、名詞の場所性は場所性の強い名詞から弱い名詞まで連続的であることが明らかになった。したがって、名詞の場所性を場所性のありなしの二通りに分けることは不適切であると言える。

4.2 二格名詞句の場所性と移動動詞との関係

4.2.1 研究背景および研究課題

[研究課題 2] 移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか。

2.1.2 節で見たように、動詞に注目して名詞の場所性の解明を試みている荒川 (1992)、本多 (2013) は、相応しい行為であるか、単に可能な行為であるかによって名詞の場所性を説明している。したがって、(1) のように「座る」行為が相応しい椅子を行き先とする移動表現はすべて椅子に対する単に可能な行為として一貫した扱いを受けるべきであるが、「行く」「来る」「帰る」は言えないが、「向かう」「近づく」は言えるという問題がある。

(1) 彼は椅子に {*行った/*来た/*帰った/向かった/近づいた/など}

このように、行き先が同じであるにもかかわらず、結び付く移動動詞によって名詞の場所性が異なることについて、従来の研究結果からは説明ができない。

(2) 彼は大阪に {行った/来た/帰った/向かった/近づいた/など}

また、(2) を (1) と比較してみると「行く」「来る」「帰る」の場合、(1) 「椅子」は言えないが (2) 「大阪」は言える。しかし、「向かう」「近づく」は (1) 「椅子」と (2) 「大阪」の両方が言える。このように、行き先となる名詞の場所性の度合いによって言える場合と言えない場合の動詞があれば、名詞の場所性の度合いと関係なく両方が言える動詞があるなど、動詞の間で名詞の場所性の度合いに対する振る舞いが異なる。

そこで、研究課題 2 では、名詞と動詞の相互作用により名詞の場所性が決まる

のではないかという考え方から、結び付く動詞によって名詞の場所性が異なるかどうかを検証した上で、名詞の場所性の度合いと動詞との関係性を探る。

4.2.2 分析方法

結び付く動詞によって名詞の場所性が異なるかどうかは、各名詞における容認度の変化幅（最大値の容認度－最小値の容認度）および標準偏差値（以下、SD）から判断する。結び付く動詞が名詞の場所性に関わるのであれば、同じ名詞であっても結び付く動詞によって容認度の値に揺れが生じるはずである。具体的な分析方法は以下の通りである。

表 4.2 サンプルデータ 2

移動表現文	容認度値	移動表現文	容認度値
彼は公園に行った。	5	彼は鞆に行った。	3
彼は公園に来た。	4	彼は鞆に来た。	1
彼は公園に着いた。	5	彼は鞆に着いた。	1
彼は公園に戻った。	4	彼は鞆に戻った。	2

- ① 各名詞の変化幅と SD を求める。たとえば、表 4.2（表 4.1 の再掲載）のデータから「公園」と「鞆」の容認度幅と SD を算出すると、「公園」の変化幅は 1 で、SD は 0.6 である。「鞆」の変化幅は 2 で、SD は 1.0 である。
- ② ①から算出した各名詞における容認度の変化幅と SD を確認する。結び付く動詞が名詞の場所性に関わらないのであれば、容認度の変化幅と SD は 0 に近いはずである。

続いて、名詞の場所性の度合いと動詞との関係は、名詞の場所性の度合い（研究課題 1 の結果を参照）別に各動詞の容認度値を求める。そして、各動詞の容認度の変化推移を動詞間で対照・比較する。具体的には以下の通りである。

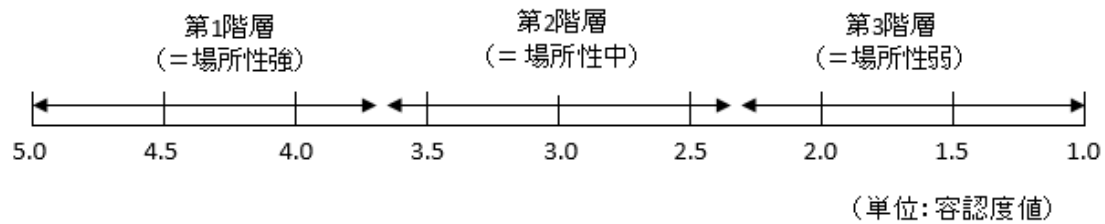


図 4.4 名詞の分類例

- ① 名詞の場所性の度合いは研究課題 1 の結果を参考にして、図 4.4 のように 3 つの階層に 3 等分する。名詞の場所性を 3 等分する理由は、名詞の場所性の度合いによる各動詞の容認度の変化を簡略化して、動詞間の対照・比較を容易にするためである。図 4.4 の第 1 階層は場所性の強い名詞 (=容認度値が高い)、第 3 階層は場所性の弱い名詞 (=容認度値が低い)、第 2 階層は第 1 階層と第 3 階層の間に位置する場所性の強くも弱くもない名詞である。
- ② 動詞別に各階層に対する容認度値を求める。
- ③ ②の結果を図 4.5 のように、動詞別に分けて折れ線グラフで示す。以下、架空の動詞 V_1 と V_2 を仮定し、具体的な分析方法について説明する。

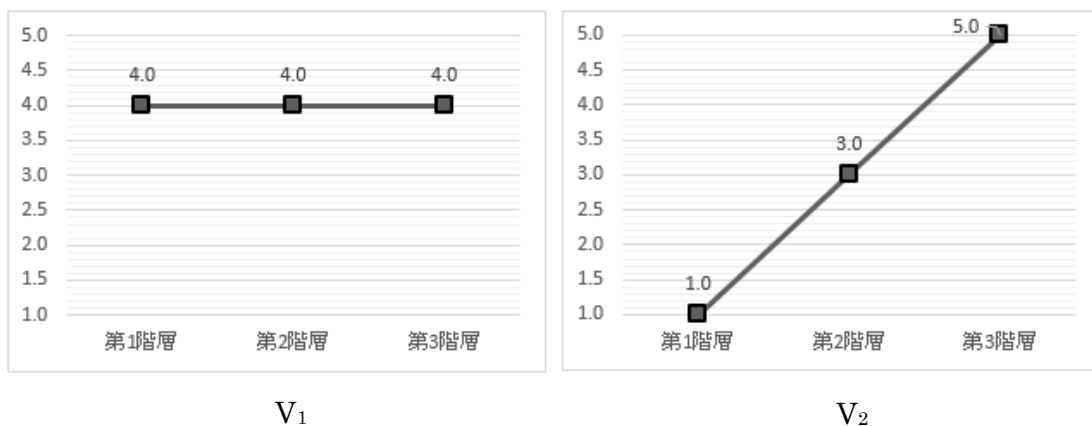


図 4.5 折れ線グラフのサンプル

図 4.5 をみると、 V_1 は第 1 階層から第 3 階層まですべての階層において容認度値が 4.0 である。すなわち、行き先となる名詞の場所性の度合いに関係なく動詞の容認度値が一定している。このことから、 V_1 は名詞の場所性の度合いと関係のな

い動詞であると言える。一方、 V_2 は第1階層の容認度値は1.0、第2階層の容認度値は3.0、第3階層の容認度値は5.0である。行き先となる名詞の場所性の度合いによって容認度の値も変化することから、 V_2 は名詞の場所性の度合いと関係のある動詞であると言える。さらに、行き先となる名詞の場所性の度合いが弱くなるにつれて容認度値が高くなって行くことから、場所性の弱い名詞に対して結び付きやすい動詞であると言える。

続いて、結び付く動詞による容認度値を階層別に確認すると、第1階層は4.0 (V_1) から1.0 (V_2) へ、第2階層は4.0 (V_1) から3.0 (V_2) へ、第3階層は4.0 (V_1) から5.0 (V_2) に変わる。第1階層は、第2階層と第3階層に比べて結び付く動詞による容認度の変化幅 ($4.0 (V_1) - 1.0 (V_2)$) が大きいことから、場所性の強い第1階層は、第2階層と第3階層に比べて結び付く動詞による容認度の変化が大きい階層であると言える。

以上の分析方法を用いて、研究課題2を検証する。

4.2.3 結果

4.2.3.1 結び付く動詞による場所性の変化

結び付く動詞によって名詞の場所性が変わるかどうかを確認するため、名詞ごとに結び付く動詞による容認度の変化幅およびSDを算出した。まず、図4.6は全体の分布を把握するため、各名詞の容認度の変化幅を、容認度の変化幅軸に示したものである。単位の最大値は4.0で最小値0.0である。「●」は名詞1個を指す。

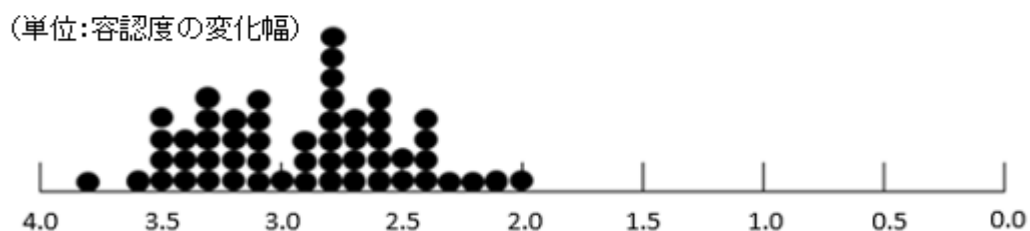


図 4.6 各名詞における容認度の変化幅

図 4.6 をみると、名詞の容認度の変化幅はすべて 2.0 以上で容認度の変化幅軸の左側に分布している。移動表現の容認度において名詞の場所性だけに関わるのであれば、結び付く動詞により容認度は変わらないはずである。つまり、各名詞の容認度の変化幅は容認度の変化幅軸の右側に分布して 0.0 に近いはずである。しかし、すべての名詞において容認度の変化幅が 2.0 以上であることから、移動表現における容認度においては、名詞の場所性だけではなく、結び付く動詞も関係していると言える。要するに、結び付く動詞は名詞の場所性に影響するのである。各名詞の容認度の変化幅と SD の詳細は表 4.3 の通りである。

表 4.3 各名詞の容認度の変化幅と標準偏差値²⁴

No	名詞	容認度の 変化幅 (SD)	No	名詞	容認度の 変化幅 (SD)
1	椅子	3.8 (1.3)	19	部屋、庭	2.7 (1.0)
2	エアコン	3.6 (1.1)	20	前、冷蔵庫、跳び箱	2.8 (0.9)
3	鏡、ドア、壁、扇風機	3.5 (1.1)	21	池	2.6 (1.0)
4	家	3.3 (1.2)	22	西	2.8 (0.8)
5	デパート	3.2 (1.2)	23	赤十字	2.7 (0.9)
6	横浜	3.3 (1.1)	24	川、湖、物干し台	2.6 (0.9)
7	窓、洗濯機、花瓶	3.4 (1.0)	25	横	2.7 (0.8)
8	金庫、テーブル	3.2 (1.1)	26	台所	2.4 (1.0)
9	公園、海、木	3.3 (1.0)	27	放送局	2.5 (0.9)
10	教室	3.1 (1.1)	28	2 階	2.6 (0.8)
11	電柱	3.2 (1.0)	29	ステージ	2.5 (0.8)
12	階段、銅像、Unicef	3.1 (1.0)	30	東、後ろ	2.4 (0.8)
13	下	3.1 (0.9)	31	道	2.3 (0.8)

²⁴容認度の変化幅と SD の合計順

14	体重計	3.0 (1.0)	32	消しゴム	2.4 (0.6)
15	右	2.9 (1.0)	33	上	2.2 (0.8)
16	学校、左	2.8 (1.1)	34	厨房	2.1 (0.7)
17	廊下、脚立	2.8 (1.0)	35	山	2.0 (0.7)
18	カーペット、岩	2.9 (0.9)	平均		2.9 (1.0)

表 4.3 をみると、各名詞の容認度の変化幅は平均 2.9 で、SD は平均 1.0 である。本調査が 5 段階評定であり、変化幅の最大値が 4.0 であることを勘案すると、平均 2.9 の容認度の変化幅は、小さくない値である。また、容認度の変化幅が 3.8 (1.3) から 2.0 (0.7) にかけて分布していることから、調査対象であるすべての名詞は結び付く動詞に影響される関係性を持つが、その度合いは名詞によって若干異なると言える。

以上、研究課題 1 と研究課題 2 の検証結果から、次のことが主張できる。

移動表現における名詞の場所性は、場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで連続的なものであり、なおかつ結び付く動詞に制約される可変性を持つものである。

続いて、4.2.3.2 節では結び付く動詞によって各名詞の容認度の変化幅が異なる結果から、名詞の場所性の度合いと動詞の関係を探るため、行き先となる名詞の場所性の度合いによって結び付く動詞による容認度の変化が動詞間で異なるかどうかを検証する。

4.2.3.2 名詞の場所性と移動動詞との関係

4.2.3.1 節では、移動表現における名詞の場所性は名詞それ自身だけではなく、結び付く移動動詞も関わっていることを明らかにした。そこで、本節では結び付く動詞による容認度の変化は、行き先となる名詞の場所性の度合いによって異なるかどうか、また、それは動詞の間で同じであるかどうかを検証する。

以下、図 4.7 から図 4.19 は名詞の場所性の度合いを 3 つの階層（第 1 階層（＝場所性強）、第 2 階層（＝場所性中）、第 3 階層（＝場所性弱））に分けて動詞別に容認度の値を求めた結果である。結果の並びは SD（各図のタイトルに記されている（ ）内の値）を参考にして、SD が高い順に並べている。SD は、データの散らばりの度合いを表す。SD が高いことは、行き先となる名詞の場所性の度合いが変わるにつれて容認度の値も変わりやすいことを意味することから、行き先となる名詞の場所性と動詞の関係性が緊密であることを表す。

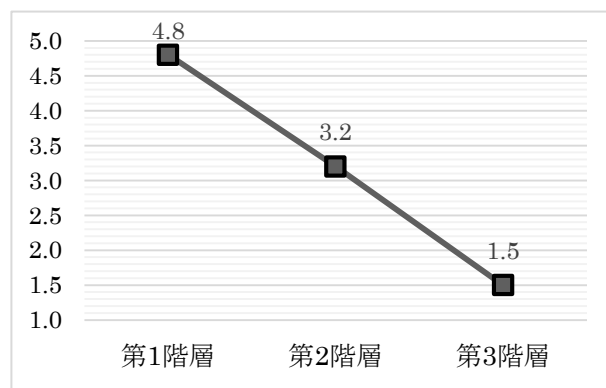


図 4.7 来る (SD 1.7)

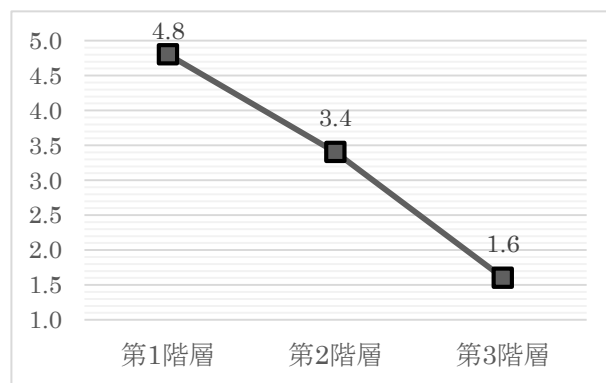


図 4.8 行く (SD 1.6)

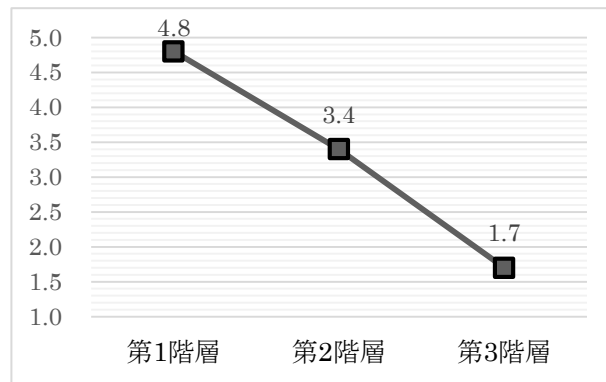


図 4.9 着く (SD 1.6)

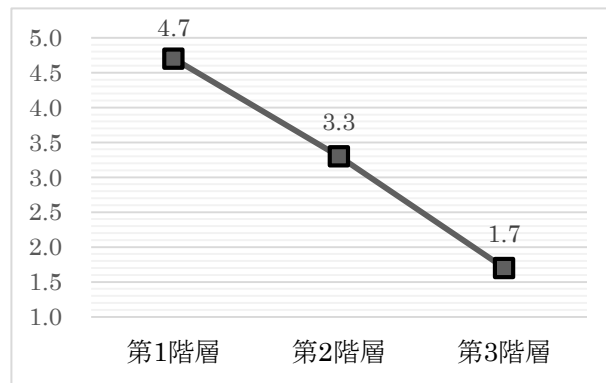


図 4.10 戻る (SD 1.5)

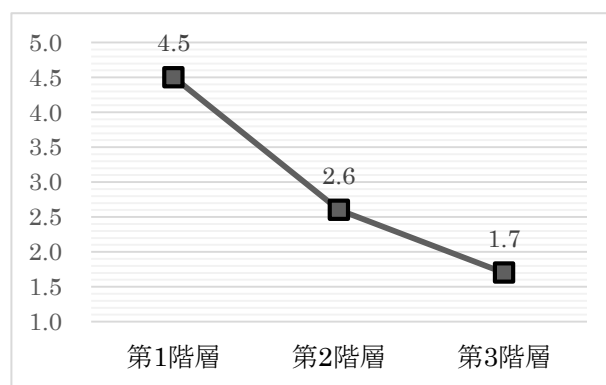


図 4.11 入る (SD 1.4)

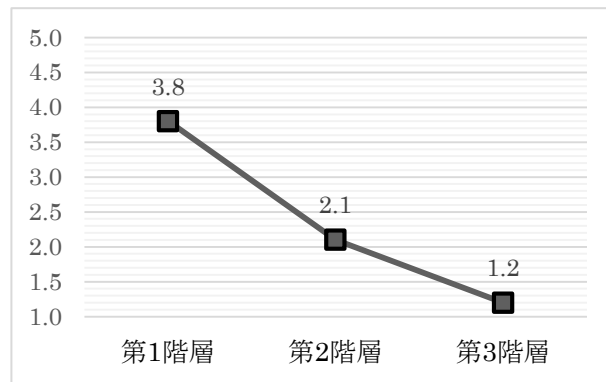


図 4.12 帰る (SD 1.3)

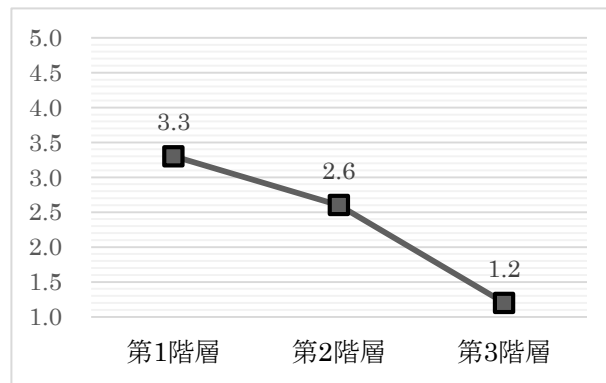


図 4.13 出る (SD 1.1)

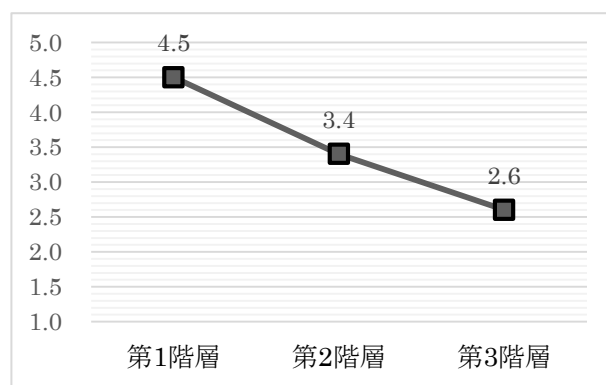


図 4.14 寄る (SD 1.0)

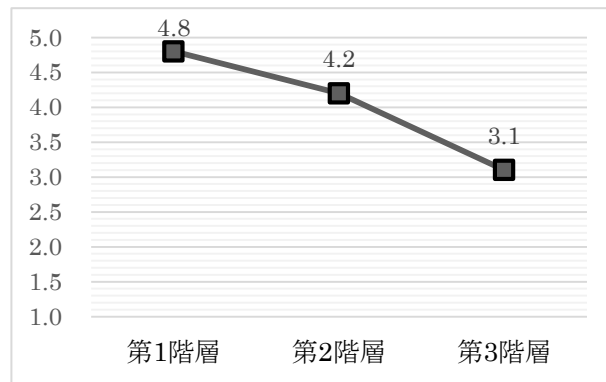


図 4.15 向かう (SD 0.9)

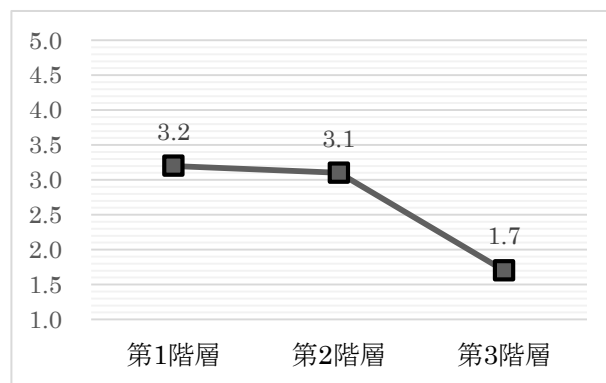


図 4.16 進む (SD 0.8)

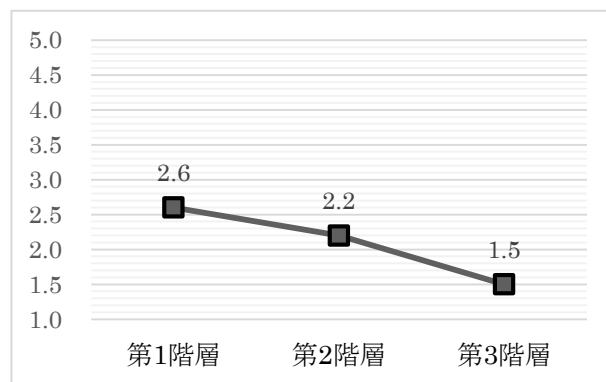


図 4.17 至る (SD 0.6)

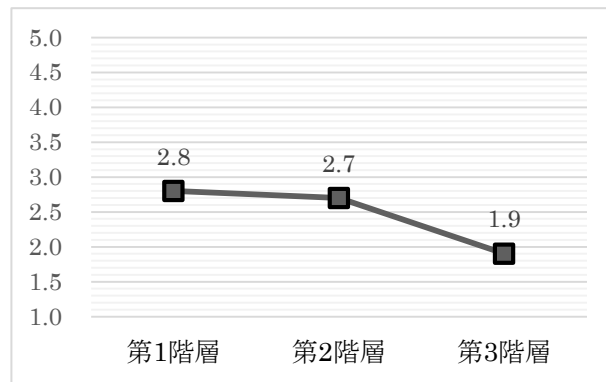


図 4.18 上がる (SD 0.5)

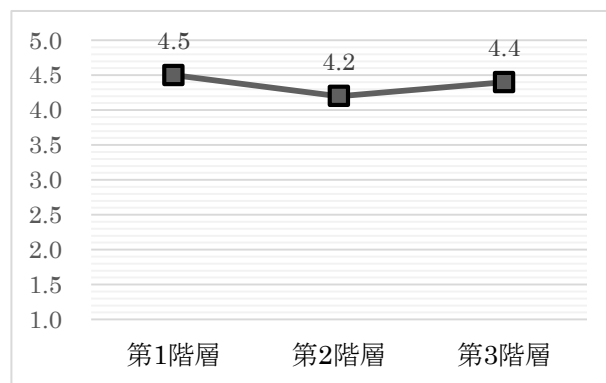


図 4.19 近づく (SD 0.2)

図 4.7 から図 4.19 の結果をみると、図 4.7 来る (SD 1.7) のように、名詞の場所性が弱くなるにつれて、結び付く動詞の容認度値も減少する動詞もあれば、図 4.19 近づく (SD 0.2) のように、名詞の場所性の度合いに左右されずに容認度の値がほぼ一定である動詞もあるなど、各階層に対する容認度値の振る舞いは動詞の間で異なる。そして、図 4.7 の来る (SD 1.7) がもっとも名詞の場所性の度合いと緊密な関係性を持つ動詞で、図 4.19 の近づく (SD 0.2) がもっとも名詞の場所性の度合いと緊密な関係性を持たない動詞であると言える。

このように、行き先となる名詞の場所性の度合いに左右されやすい動詞もあれば左右されにくい動詞もあるなど、同じ移動を表す動詞の間でも行き先となる名詞の場所性の度合いに関わる度合いが異なることが明らかになった。ここでいう行き先となる名詞の場所性の度合いに左右されにくい動詞とは、名詞の場所性の度合いと関係なくその値が一定であるものを指す。つまり、名詞の場所性が弱く

なるにつれて、結び付く動詞の容認度値が増加したり、山型（第 2 階層においてのみ容認度の値が高い）や谷型（第 2 階層においてのみ容認度の値が低い）の動詞があることではない。したがって、移動表現における二格名詞句の場所性判断材料として、移動表現全体の平均値を用いることに不具合はないとも言える。

続いて図 4.20 は、結び付く動詞に影響される度合いが名詞の場所性の度合いによって異なるかどうかを検証するため、図 4.7 から図 4.19 までの結果を階層別にまとめたものである。グラフの縦軸は容認度の値で、横軸は各階層を指す。

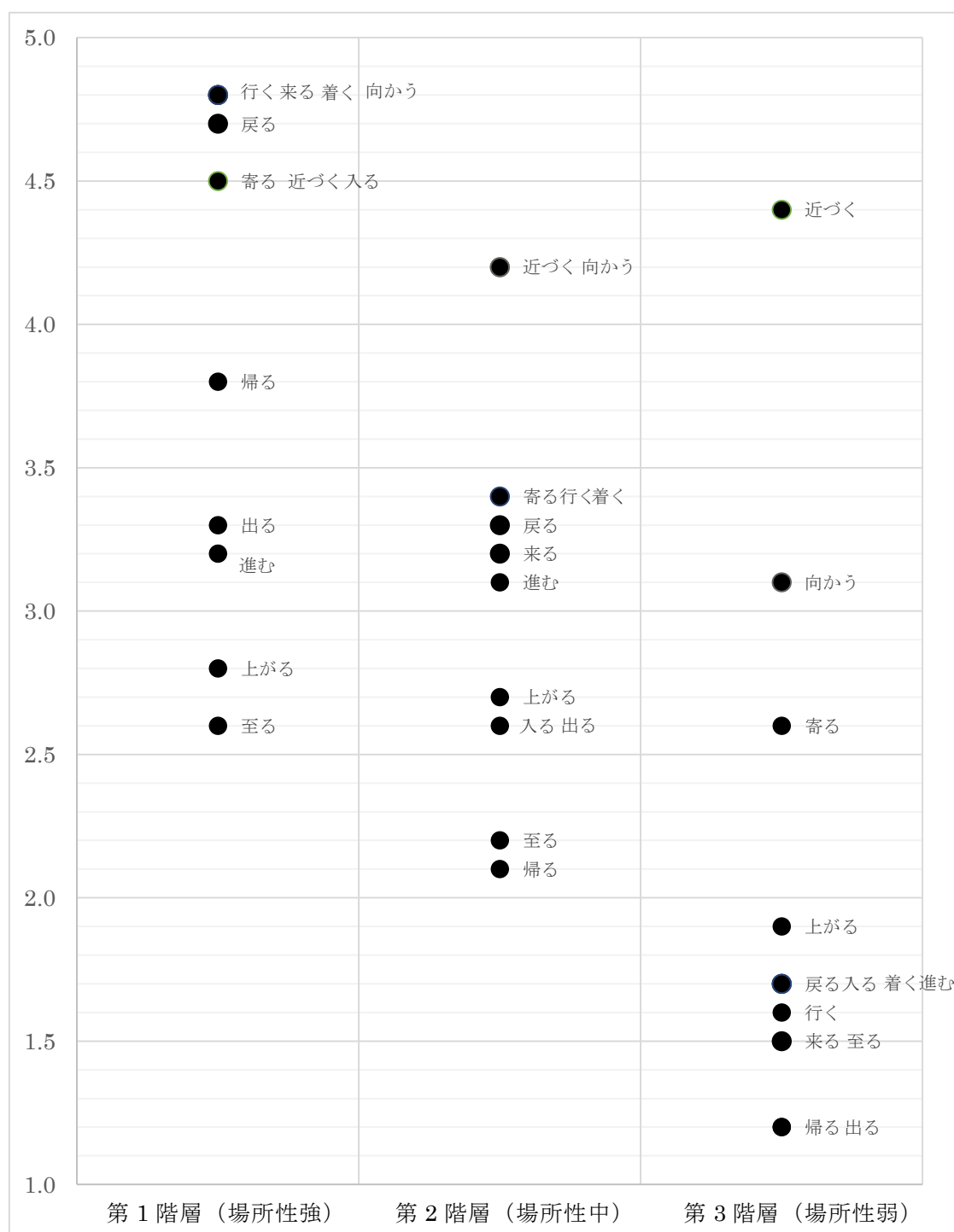


図 4.20 各階層における動詞別の容認度値

図 4.20 の結果から各階層の容認度値の変化幅をみると、第1階層における容認度の変化幅は 2.2（容認度の最大値 4.8－容認度の最小値 2.6）で SD は 0.8 である。第2階層における容認度の変化幅は 2.1（容認度の最大値 4.2－容認度の最小

値 2.1) で SD は 0.7 である。第 3 階層における容認度の変化幅は 3.2 (容認度の最大値 4.4－容認度の最小値 1.2) で SD は 0.9 である。どの階層においても結び付く動詞による容認度の変化幅は 2.1 以上であり、SD も 0.7 から 0.9 の間であることから、結び付く動詞に影響される度合いは、場所性の強い名詞であれ場所性の弱い名詞であれ違いはないと言える。

名詞の場所性を動詞との関係で説明している荒川 (1992)、本多 (2013) などは、対象に対する行為として相応しい行為であるかどうかという二分法的な考え方で判断している。したがって、荒川 (1992)、本多 (2013) などの考え方からみると、移動は単に可能なだけの行為であるため、移動動詞の間で容認度の値に差は生じないはずである。しかし、調査対象のすべての名詞が結び付く動詞に影響されることや、名詞の場所性と結び付く動詞の関係を探った結果、名詞の場所性に関わる度合いが動詞の間で異なって、さらに場所性と緊密な関係性を持つ動詞から関係性を持たない動詞まで異なりがあることから、対象に対する行為として相応しい行為であるかどうかという考え方から移動表現における名詞の場所性を説明することには限界があることが裏付けられた。よって、荒川 (1992)、本多 (2013) などが述べている名詞の場所性と動詞の関係は、少なくとも移動表現における名詞の場所性には該当しないと言える。

以上の結果より、5.2 節では、図 4.7 から図 4.19 までの結果に基づいて、行き先となる名詞の場所性に関わる度合いが動詞の間で異なる理由について探る。

4.3 名詞の場所性と「トコロ」

4.3.1 研究背景および研究課題

[研究課題 3] どのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付きやすいか。

日本語の移動表現における特性として、多くの研究は移動の行き先となる名詞の場所性を指摘している。そして、次のように場所性の欠けている名詞を行き先

として捉える際、「トコロ」などの形式名詞を付け加えて空間化する必要があると指摘している。

「ものや人をあらわす名詞が、場所をあらわす状況語になるためには、
「一の なかに」「一の うえに」「一の したに」「一の そばに」「一の
まわりに」のような空間的な関係をしめす形式名詞をそえて、空間化する
必要がある。（鈴木 1972 : 101）

方向性を持った移動動詞が、に格の名詞とくみあわさると、そこにはゆく
さきのむすびつきができる。かざりになる名詞は、空間的ニュアンスをも
った具体名詞であって、動詞との関係においてゆくさきをしめしている。
〔中略〕かざり名詞が空間的意味をもたない具体名詞であれば、つぎのよ
うに空間化の手つづきをうける。（奥田 1983 : 291）

「のところ」は、場所でない名詞を場所に変える働きをもつ。したがって、
「のところ」は原則として既に場所である名詞には付かない。

（田窪 1984 : 96）

このように、空間化は場所性のない名詞に対する手続きであるため、すでに場所
性のある名詞に「トコロ」を付け加えたり、場所性のない名詞と動詞がそのまま結
びついたりすることはできない。しかし、二重場所化（池についた／池のところに
ついた（森山 1988 : 178））や空間化の省略（ベッドのところに行った／ベッドに
行った（荒川（1992 : 82）））のように、同じ名詞に対して両方が言える場合がある。

そこで、本節では「トコロ」の再検討として、まずどのような特性を持つ名詞と
「トコロ」が結び付きやすいかを探る。そして、二重場所化あるいは空間化の省略
が可能である名詞や移動表現文を取り上げて、その特性を明らかにする。さらに、
二格名詞句と移動動詞が直接結び付く移動構文と対照・比較して、「トコロ」を伴
う間接移動構文の特性を探る。

4.3.2 分析方法

どのような特性を持つ名詞と「トコロ」が結び付きやすいかは、同じ名詞を行き先とする直接移動構文（ $N = V$ ）と、「トコロ」を伴う間接移動構文（ $N \text{ ノ } \text{トコロ} = V$ ）の容認度値を対照・比較して判断する。直接移動構文に対して容認度の値が高く、間接移動構文に対して容認度の値が低い名詞は、「トコロ」と結び付きにくい名詞で、直接移動構文に対して容認度の値が低く、間接移動構文に対して容認度の値が高い名詞は「トコロ」と結び付きやすい名詞であると言える。以下、分析手順を示す。

- ① 直接移動構文における各名詞の容認度値（平均値）を算出する（研究課題1の結果参照）。
- ② 間接移動構文における各名詞の容認度値（平均値）を算出する。
- ③ ①と②の結果を用いて、同じ名詞に対する容認度値の結果を対照・比較する。

続いて、「トコロ」の特性を解明する一環として、間接移動構文においても名詞の場所性だけではなく結び付く移動動詞も二格名詞句の場所性に関わるかどうかを検証するため、結び付く動詞による容認度の変化を研究課題2の結果²⁵と対照・比較する。

次に、二重場所化と空間化の省略については両構文間の容認度値の差で判断する。



- ④ ①と②の結果から両構文間の容認度値の差を求めて、容認度値の差が1.0以下である名詞、つまり二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞を抽出し、その特性を探る。
- ⑤ さらに、個々の移動表現を構文間で対照・比較して、容認度値の差が1.0以下である移動表現を抽出し、二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい移動表現文の特性を探る。

²⁵研究課題2では、名詞それ自身が持つ場所性だけではなく、結び付く移動動詞も名詞の場所性に関わっていることを明らかにした（4.2節の結果参照）。

以上の分析方法から、最終的には「トコロ」の特性を明らかにする。

4.3.3 結果

4.3.3.1 直接移動構文と間接移動構文の関係

まず、どのような特性を持つ名詞と「トコロ」が結び付きやすいかを探るため、両構文における名詞別の容認度値を求めた結果を図 4.21 に示す。図 4.21 の  は直接移動構文、 は間接移動構文の結果である。グラフの縦軸は直接移動構文における名詞の場所性を基準として並べたもので、下から上に行くほど容認度値の高い名詞、つまり場所性の強い名詞である。直接移動構文における名詞の容認度値を基準とする理由は、直接移動構文 (N = V) は無標 (unmarked) で、間接移動構文 (N ノ トコロ = V) は有標 (marked) であるためである。

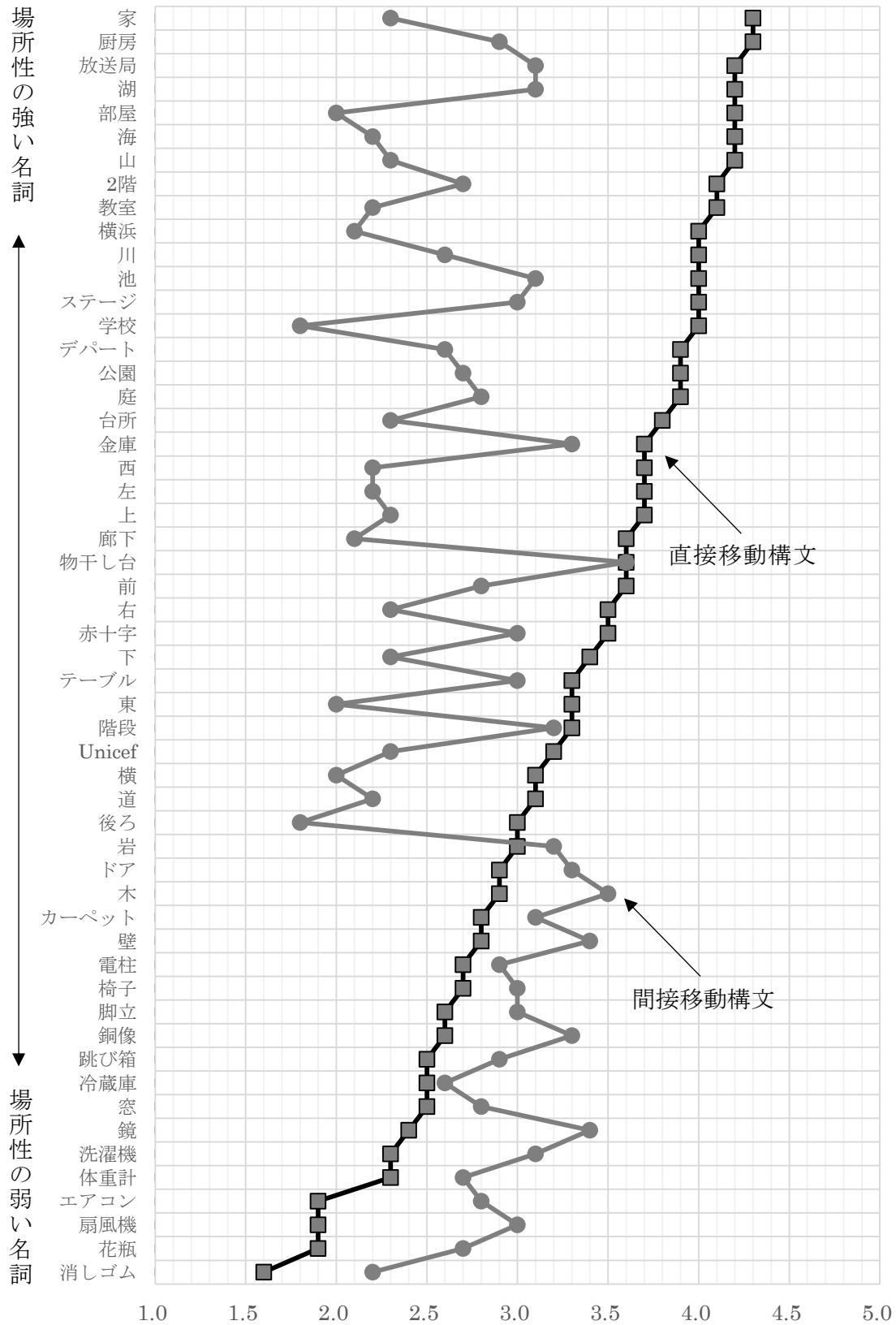


図 4.21 各名詞に対する両構文の容認度値 (名詞の場所性順)

図 4.21 の結果をみると、全体的に場所性の強い名詞は直接移動構文における容認度の値が高く、場所性の弱い名詞は間接移動構文における容認度の値が高い結果を得た。このような結果は、「トコロ」は場所性のない名詞に対する手続きで、すでに場所を表す場所性のある名詞には「トコロ」が付かないという先行研究の指摘を裏付ける結果である。しかし、直接移動構文と間接移動構文のグラフの結果を対比・比較すると、場所性の強い名詞であれ、場所性の弱い名詞であれ、両構文間のグラフの間隔が広い名詞（容認度値の差が 2.0 以上）もあれば、狭い名詞（容認度値の差が 0.0）もあるなど、構文による影響の度合いは名詞によって異なる。構文による影響の度合いが弱い名詞、つまり二重場所化あるいは空間化の省略という事象については、4.3.3.2 節で分析する。

以上の結果より、場所性の強い名詞より場所性の弱い名詞のほうが「トコロ」と結び付きやすいと言える。しかし、名詞によって構文間の差が大きい名詞もあれば小さい名詞もあることから、両構文に対する振る舞いは名詞の間で異なると言える。

続いて、図 4.22 は「トコロ」の特性を解明する一環として、間接移動構文においても結び付く移動動詞が名詞の場所性に関わるかどうかを検証するため、各名詞に対する容認度の変化幅を求めた結果である。直接移動構文における結果と対照・比較するため、両構文の結果を同じ軸に示す。直接移動構文に対する各名詞の結果は「●」、間接移動構文に対する各名詞の結果は「●」で示す。図 4.22 は容認度の変化幅を示す軸であるため、単位の最大値は 4.0 で最小値は 0.0 である。

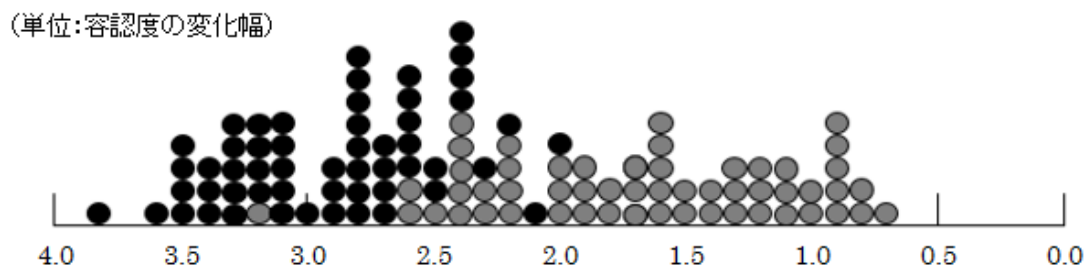


図 4.22 各名詞に対する両構文の容認度の変化幅

図 4.22 の結果をみると、間接移動構文における名詞の容認度の変化幅は 3.2 か

ら 0.7 である。このことから、直接移動構文と同じく間接移動構文においても、結び付く動詞によって名詞の場所性が変わると言える。しかし、直接移動構文の結果と比較すると、直接移動構文における名詞の容認度変化幅は左側に多く分布している一方で、間接移動構文における名詞の容認度変化幅は右側に多く分布している。したがって、間接移動構文のほうが直接移動構文より、結び付く動詞による影響が小さいと言える。

以上の結果より、間接移動構文においても結び付く動詞によって名詞の場所性は変わるものの、間接移動構文より直接移動構文のほうがより名詞と動詞の関係が緊密であると言える。そこで、5.3 節では、間接移動構文が直接移動構文に比べて結び付く動詞による容認度の変化幅が小さい理由を含めて「トコロ」と動詞の関係について述べる。

続いて、4.3.3.2 節では両構文間の容認度の差が小さい名詞、つまり二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞および移動表現について分析する。

4.3.3.2 二重場所化と空間化の省略

両構文間の容認度の差が小さい名詞は、二重場所化あるいは空間化の省略による結果であると言える。そこで、本節では 4.3.3.1 節の続きとして二重場所化と空間化の省略について探る。

まず、図 4.23 は図 4.21 の結果から両構文間の容認度値の差を求めてその差の順で並べたものである。上から下へ行くほど、両構文間における容認度値の差が小さい名詞であることを表す。■は直接移動構文、●は間接移動構文を指す。

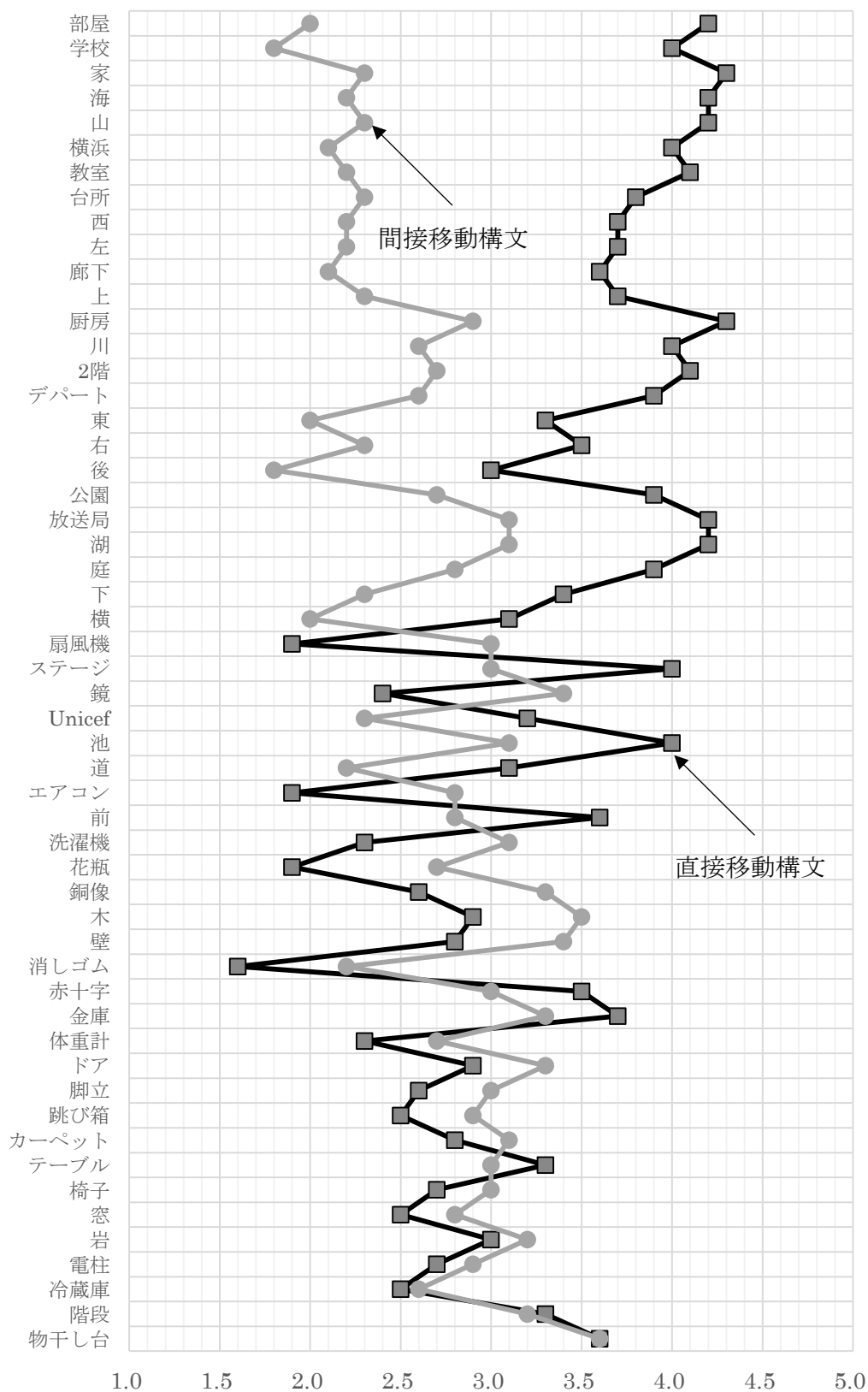


図 4.23 各名詞に対する両構文の容認度値（容認度値の差順）

図 4.23 の結果をみると、「部屋」や「学校」などの名詞は両構文間の差が大きいことから、二重場所化あるいは空間化の省略が生じにくい名詞であると言える。そして、「金庫」や「階段」などの名詞は両構文間の差が小さいことから、二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞であると言える。そこで、容認度値の差（＝容認度の変化幅）が 1.0 以下で、容認度値が 3.0 以上である名詞、すなわち二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞のうち、両方不自然ではない名詞のみを抽出したものが表 4.4 である。

表 4.4 二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞

容認度値の差	名詞
1.0 以下	階段、金庫、赤十字、物干し台、テーブル、岩、池、ステージ

表 4.4 の結果をみると、「階段」「金庫」「赤十字」「物干し台」「テーブル」「岩」は、場所性の強い名詞でも弱い名詞でもない第 2 階層に該当する名詞で、「池」と「ステージ」は、場所性の強い第 1 階層に該当する名詞である²⁶。このように、二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい名詞のうち、第 2 階層に該当する名詞が多く含まれる理由は、これらの名詞は直接移動構文においてその容認度の値が 2.4 から 3.7 の間で、高くも低くもないためである。つまり、間接移動構文との容認度の差を求めた場合、容認度の差が小さくなりやすいのである。また、第 2 階層に該当する名詞は、場所性の強い名詞とも場所性の弱い名詞とも言えない。そのため、両構文間の差が小さくても、二重空間化であるかあるいは空間化の省略であるかの判断ができない。それゆえに、第 2 階層に該当する名詞は分析対象から省くべきである。一方、「池」と「ステージ」は、場所性の強い第 1 階層に該当

²⁶ 4.1.1 節の結果から、名詞の場所性は場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで連続的であることが明らかになった。そこで、本研究では名詞の容認度値を参考にして、場所性の強い名詞（第 1 階層）と場所性の弱い名詞（第 3 階層）、そしてその間に位置する名詞（第 2 階層）に分けている。詳しいことは 4.2.2 節を参照。

する名詞であるため、これらの名詞に対して構文間の差が小さい理由は、間接移動構文における容認度の値が高いためである。つまり、二重場所化が許容できる名詞であると言える。そこで、5.3 節では第1階層に該当する名詞のうち、「池」と「ステージ」に対して二重場所化が許容できる理由について考察する。

続いて、調査対象の全移動表現文を対象に、両構文間の容認度値の差が1.0以下で、容認度値が3.0以上である移動表現文を抽出して、その名詞と動詞をまとめたものが表4.5である²⁷。

表 4.5 二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい N+V

階層	名詞	動詞
第1階層 (二重場所化)	池	行く、来る、戻る、進む、出る
	湖	帰る、戻る、進む、出る
	ステージ	行く、来る
	川	戻る
	厨房	進む
	公園	出る
第3階層 (空間化の省略)	エアコン	近づく、向かう
	体重計	近づく、向かう
	洗濯機	向かう
	扇風機	向かう
	消しゴム	近づく

まず、二重場所化に該当する第1階層の結果をみると、名詞は「山」「海」のように広々とした場所性を持つ名詞や、「学校」「デパート」「家」のようにある特定の建物を指す名詞は含まれていない。そして、動詞は空間化の省略に該当する第3階層の動詞に比べて多様であるが、「入る」や「至る」など一部の動詞は含まれていない。次に、空間化の省略に該当する第3階層の結果をみると、名詞に対して

²⁷第2階層は二重場所化であるか、あるいは空間化の省略であるかの判断が困難であるため、第2階層に該当する名詞は対象外とする。

は、ある特定の特徴を持つ名詞には偏っていないが、動詞に対してはすべて「近づく」と「向かう」のみであることが特徴的である。

以上の結果より、二重場所化あるいは空間化の省略が生じる移動表現は、一部の名詞と動詞に対して頻繁に生じる事象であると言える。そこで、5.3 節では上に記したように「池」と「ステージ」に対してのみ二重場所化が許容できる理由を含めて、一部の名詞や動詞に対して二重場所化あるいは空間化の省略が生じやすい理由について述べる。

4.4 まとめ

本研究で検証した 3 つの研究課題と検証の結果、そして考察内容について述べる。

[研究課題 1] 移動表現における名詞の場所性は場所性のありなしの二通りであるか。

寺村 (1993 [1968])、奥田 (1983 [1962])、鈴木 (1972)、田窪 (1984) などの多くの研究は、古典的カテゴリー観に基づいて場所性のある名詞と場所性のない名詞という二分法的な捉えた方で名詞の場所性を分けている。しかし、認知言語学カテゴリー観に基づいているプロトタイプ理論から考えると、カテゴリーの境界は不明瞭な境界を持つ。「ベンチ」や「ベッド」などの名詞の場所性判断が曖昧であることもその理由であると考えられる。そこで、本研究は名詞の場所性は場所性のありなしの二通りであるかどうかを検証した。その結果、各名詞の容認度値は、ある特定の値に密集しておらず連続的に分布しているという結果を得た。要するに、名詞の場所性は場所性のある名詞と場所性のない名詞の二通りではなく、場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで、場所性の度合いを持つ連続的なものであることを明らかにした。この結果から、名詞の場所性を場所性のある名詞と場所性のない名詞に分けることは不適切であると言える。また、「機関」や「建造物」など同じカテゴリーに属する名詞の間でも容認度の値が異なることから、

名詞を1つのカテゴリーにまとめて同じ程度の場所性のある名詞として扱うことも望ましくないと言える。

以上、研究課題1の結果より、第5章では名詞の場所性の度合いに影響する要因を探る。

[研究課題2] 移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか。

名詞の場所性を相対的に捉えている森山(1988)、和氣(2000)、荒川(1992)、王(2009)、本多(2013)などは、名詞の場所性は移動体や動詞など文の構成要素に制約されていて、その関係の中で決まるものであると指摘している。名詞の場所性を名詞と動詞の関係から解明を試みている荒川(1992)、本多(2013)などは、その対象に対して相応しい行為であるか、単に可能な行為であるかという対象とその行為の相応しさで名詞の場所性を説明している。しかしながら、移動とは起点から着点に向かって移ることであるため、相応しい行為であるかどうかで移動表現における名詞の場所性を判断することは困難である。そこで、移動表現における名詞の場所性と動詞の関係を解明するため、まず結び付く動詞が名詞の場所性に影響するかどうかを検証した。その結果、名詞の場所性は名詞それ自身が持つ場所性だけではなく、結び付く動詞にも影響されることが明らかになった。この検証の結果を研究課題1の結果と合わせると、次のことが主張できる。

移動表現における名詞の場所性は場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで連続的であり、なおかつ、結び付く動詞に制約される可変性を持つ。

このように、結び付く動詞が名詞の場所性に影響を与えることから、結び付く動詞による名詞の場所性の変化は、行き先となる名詞の場所性の度合いによって異なるかどうかを動詞の間で対照・比較した。その結果、行き先となる名詞の場所性の度合いによって容認度の値が変わる動詞もあれば、変わらない動詞もあるなど動詞によって異なる結果を得た。このことから、行き先となる名詞の場所性に関

わる度合いは一貫しておらず、動詞によって異なると言える。

以上、研究課題2の結果より、第5章では名詞の場所性の度合いに対して、異なる振る舞いをする動詞はどのような特徴があるかを探る。

〔研究課題3〕どのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付きやすいか。

多くの研究は、移動の行き先となる名詞の場所性を指摘している。そして、場所性の欠けている名詞を行き先として捉える際、「トコロ」などの形式名詞を付け加えて空間化が必要であると指摘している。しかし、二重空間化や空間化の省略ができることから、空間化の手続きである「トコロ」を再検討した。その結果、場所性の強い名詞は直接移動構文における容認度の値が高く、場所性の弱い名詞は間接移動構文における容認度の値が高い結果を得た。この結果から、「トコロ」は場所性のない名詞に対する手続きで、すでに場所性のある名詞には「トコロ」が付かないという先行研究の指摘が裏付けられる。しかし、両構文間の容認度の差は一貫しておらず、容認度の差が大きい名詞もあれば小さい名詞もあるなど名詞によって容認度の差が異なった。したがって、両構文に対する振る舞いがすべての名詞に対して同じではないと言えることが明らかになった。なお、「トコロ」の特性を解明する一環として、間接移動構文においても名詞の場所性だけではなく結び付く移動動詞も関わっているかどうかを検証した。その結果、直接移動構文と同じく間接移動構文においても結び付く動詞によって容認度の値は変わるものの、直接移動構文に比べてその変化の度合いは小さいことを明らかにした。また、両構文間の容認度の差が名詞によって異なることから、二重場所化と空間化の省略について探った。その結果、二重場所化あるいは空間化の省略は一部の名詞と動詞に対して生じやすい事象であることを明らかにした。

以上、研究課題3の結果より、「トコロ」は場所性の弱い名詞と結び付きやすいものの、このような名詞と「トコロ」の関係性は、一部の名詞と動詞に対しては適用されないと言えることが明らかになった。そこで第5章では、二重場所化や空間化の省略が生じやすい移動表現の特性は何か、そして、直接移動構文に比べて結び付く動詞による容認度の変化幅が小さい理由は何か、以上2点を探る。

第5章 名詞の場所性と移動動詞との関係性に関する考察

5.1 名詞の場所性に影響する要因

従来の先行研究は、古典的カテゴリー観²⁸に基づいて、名詞の場所性を場所性のある名詞と場所性のない名詞に分けている。しなしながら、研究課題1の検証の結果から、名詞の場所性は場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで、場所性の度合いを持つ連続的なものであることが明らかになった。これは、プロトタイプ理論に繋がる結果で、我々の人間は場所と非場所という概念を白黒のように明確に区別して分類してないことを裏付ける。また、図5.1に示すように、典型的²⁹な場所名詞と非場所名詞の間には、近いものから遠いものという度合いが存在して、その境界が必ずしも明瞭ではないことを意味する。したがって、第1章で述べたように、「ベンチ」や「ベッド」のように場所性の判断が曖昧であることも、名詞の場所性が連続的であることに繋がる。

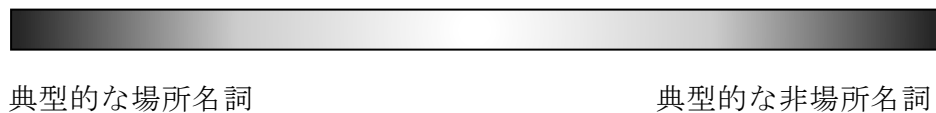


図 5.1 名詞の場所性の連続性

そこで本節では、研究課題1の分析結果から、場所性の強い名詞と場所性の弱

²⁸古典的カテゴリー観では、カテゴリーは明確な境界を持つとされ、そのメンバーは、そのカテゴリーを定義づける必要十分条件によって規定される。そして、あるカテゴリーのメンバーは、共通の属性を持ち、同等の資格でそのカテゴリーに帰属するとされる（深田・仲本 2011：72）。

²⁹ここでいう典型的という意味は、カテゴリーへの帰属度が明確なもので、たとえば、場所と非場所というカテゴリーを考えた場合、疑うことなく、中心的な成員であると言えるものである。たとえば、「山」「東京」「広場」などのように、我々がそこに位置したり行ったりすることができるある広がりをもった名詞が典型的な場所名詞に該当する。一方、「鞆」「パソコン」「携帯電話」「財布」などのように、必要に応じて作り出したモノを指す名詞が典型的な非場所名詞に該当する。

い名詞の間に位置する名詞を中心に、名詞の場所性に関わる要因について考える。

図 5.2 は、図 4.3 の結果に属性を加えたものである。

4.3	建造物（厨房、家）
4.2	自然物（山、海、湖）、建造物（部屋）、機関（放送局）
4.1	建造物（教室、2 階）
4.0	地名（横浜）、自然物（池、川）、機関（学校）、建造物（ステージ）
3.9	機関（デパート）、建造物（庭、公園）
3.8	建造物（台所）
3.7	相対名詞（上、左、西）、○△（金庫）
3.6	建造物（廊下）、相対名詞（前）、△○（物干し台）
3.5	機関（赤十字）、相対名詞（右）
3.4	相対名詞（下）
3.3	建造物（階段）、相対名詞（東）、△△（テーブル）
3.2	機関（Unicef）
3.1	建造物（道）、相対名詞（横）
3.0	△○（岩）、相対名詞（後ろ）
2.9	△○（木）、×○（ドア）
2.8	○○（カーペット）、×○（壁）
2.7	△○（電柱）、○×（椅子）
2.6	△△（銅像）、○△（脚立）
2.5	△△（冷蔵庫、跳び箱）、×△（窓）
2.4	×△（鏡）
2.3	△△（洗濯機）、○×（体重計）
1.9	×△（エアコン）、××（花瓶、扇風機）
1.6	××（消しゴム）

図 5.2 直接移動構文における各名詞の容認度値と属性

左側の値は容認度値を示す。そして、○×などの記号は位置と大きさ順で示す。

たとえば、「○×」の場合、○はそこの上あるいは中に位置することができ、×は移動体である人より小さい対象であることを意味する。

図 5.2 の結果をみると、容認度の値が高い場所性の強い名詞は、「建造物」「自然物」「機関」「地名」など、田窪（1984）が提示している場所性のある名詞のカテゴリーに属する名詞が多く、容認度値が低い場所性の弱い名詞は、田窪（1984）のカテゴリーに属さない名詞が多い。しかし、ここで注目すべき点は、両極端の間に位置している名詞で、同じカテゴリーに属する名詞の間でも、名詞によって容認度の値が異なることである。たとえば、図 5.3 の機関カテゴリーに属する名詞の分布をみると、「放送局」「学校」「デパート」と「赤十字」「Unicef」の容認度値は若干離れて、「赤十字」と「Unicef」は田窪（1984）のカテゴリーに属さない「金庫（○△）」よりも容認度の値が低い。

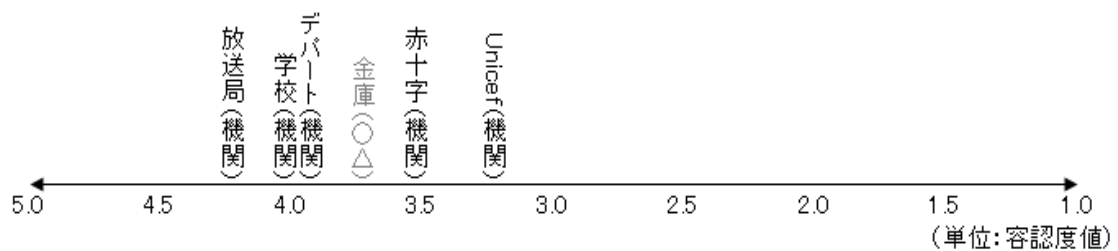


図 5.3 機関カテゴリーに属する名詞の容認度値

このように、同じカテゴリーに属する名詞であるにもかかわらず、容認度の値がずれる名詞を中心に、名詞の場所性の度合いに関わる要因を 5.1.1 節から 5.1.3 節にかけて考察する。

5.1.1 名詞の場所性と経路

建造物のカテゴリーに属する他の名詞に比べて相対的に容認度の値が低い「廊下」「階段」「道」について考える。これらの名詞は同じカテゴリーに属する「家」や「公園」などの名詞と違って、起点から着点まで通っていく経路の素性を内在的に有する名詞であることが、以下の図 5.4 から推論できる。図 5.4 は、NLT

(NINJAL-LWP for TWC) を用いて、建造物のカテゴリーに属する名詞の「N+ニ格+行く」と「N+ヲ格+行く」の移動パターンの出現頻度数を求めた結果である。多様な移動動詞のうち、「行く (いく)」のみを検索対象とした理由は、これらの名詞に対して共通して現れていた移動動詞であるためである³⁰。

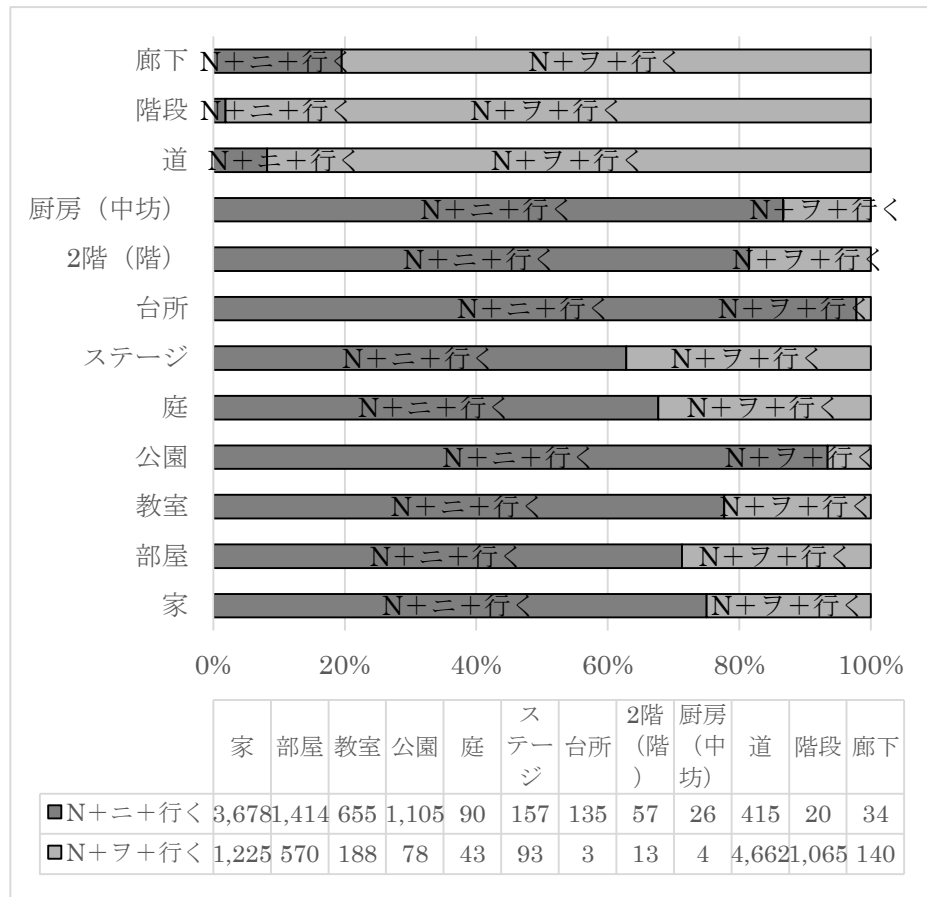


図 5.4 「名詞+助詞 (ニ・ヲ) +行く (いく)」の出現頻度の割合 (%)

³⁰検索対象語の「2 階」は、「3 階」であれ「5 階」であれ何階であるかは問題にならないため、「階+ニ格+行く」の移動パターンで検索する。そして「厨房」は NLT で調べると語彙素の形は「ちゅう房」である。この名詞の出編頻度数は 10 例で、そのうち「ちゅう房+ニ」の出現頻度数は 2 例（そのうち、移動表現は 1 例の「ちゅう房に入る」）である。しかし、「中坊」となっている語の用例を確認すると、移動動詞「行く」と結び付く「中坊」はすべて「中学生」の意味ではなく、台所・調理場の「厨房」としての用例が検索される。なお、用例はすべて「厨房」と表記されている。このことから、本調査結果では「中坊」の検索結果を取り上げる。

図 5.4 の結果をみると、「廊下」「階段」「道」は「N+ニ+行く」より「N+ヲ+行く」の出現頻度数が多く、同じ建造物のカテゴリーに属する「家」や「公園」などの名詞は「N+ヲ+行く」より「N+ニ+行く」の出現頻度数が多い。このように、「廊下」「階段」「道」の出現頻度数が「家」や「公園」などの名詞と異なっており、着点を表す「N+ニ+行く」より起点・経路を表す「N+ヲ+行く」の移動パターンに対する出現頻度数が多いことは、「廊下」「階段」「道」が経路の素性を有する名詞であることを意味する。すなわち、「廊下」「階段」「道」は「家」や「公園」などの名詞と違って起点から着点まで通っていく経路の素性を内在的に有する名詞であるため、着点として許容されにくく、その結果、同じカテゴリーに属する名詞であるにもかかわらず「家」や「公園」などの名詞より「N+ニ+行く」の出現頻度数が少ないのである。

移動とはある場所（起点）から動き始め、途中の道筋（経路）を通りながら、最終的になんらかの地点（着点）にたどり着くということである（影山・由本 1997: 133）。つまり、移動という行為にはどこから（起点）、どこを通過して（経路）、どこに（着点）という 3 種類の場所が関わっているのである（影山 2002）。したがって、「廊下」「階段」「道」が「家」や「公園」などの名詞と同じく場所性を持つ名詞であることは間違いない。しかし、図 5.4 のように「廊下」「階段」「道」は経路の素性を有する名詞であることから、これらの名詞は 3 種類の場所のうち「どこを通過して（経路）」に該当する。

寺村（1993 [1968]）、田窪（1984）、鈴木（1972）、奥田（1983 [1962]）など多くの先行研究は名詞の場所性を場所性のある名詞と場所性のない名詞に分類している。従来の場所性のある名詞であるかどうかの判断基準からみると、経路の素性を有する「廊下」「階段」「道」も、「家」や「教室」のように場所性のある名詞に該当する。しかし、今回の調査の結果から明らかになったように、場所性のある名詞であっても経路の素性を持つ名詞を移動の着点となる名詞として捉えにくいことから、本研究は各名詞の素性は問わず、場所性のある名詞と場所性のない名詞に一貫して分ける従来の研究方法は望ましくないと指摘する。また、経路の素性を有する名詞である場合、容認度の値が下がることから、経路の素性は名詞の場所性の度合いに関わる 1 つの要因であることを主張する。

5.1.2 名詞の場所性と具体性

続いて、機関カテゴリーに属する名詞のうち、「赤十字」と「Unicef」、そして田窪（1984）が挙げているカテゴリーのうち「前」「後ろ」「上」「下」などの相対名詞に該当する名詞が場所性の強い名詞と場所性の弱い名詞の間に位置する理由について考察する。

まず「赤十字」と「Unicef」は、同じカテゴリーに属する「学校」や「デパート」などの名詞と、次の 2 点が異なる。まず 1 つ目は、移動動詞と結び付く場合、物理的移動の意味ではなく、非物理的な移動の意味として解釈されやすいことである。たとえば「夢」や「死」の場合、「向かう」や「至る」などの移動動詞と結び付く場合、「夢に向かった」「死に至った」のように非物理的移動の意味に解釈される。その理由は、これらの名詞は具体性が欠けている抽象名詞であるからである。

(1) は人やモノが外から中・内へ移ることを表す動詞「入る」と結び付く移動表現である。

- (1) a. {学校、デパート}に入った。
- b. {赤十字、Unicef}に入った。

(1a) の「学校」は、進学するという非物理的な移動の意味も含意しているが、「学校」という建物の中へ移動する物理的な移動の意味も持つ。そして (1a) の「デパート」も就職先として捉えて、入社という非物理的な移動の意味として解釈できるが、「デパート」という建物の中へ移動するという物理的移動の意味も持つ。しかし、(1b) の「赤十字」と「Unicef」は「加入した、構成員になった」という非物理的移動の意味としては解釈できるが、外から中・内への移動という物理的空間移動の意味としては解釈できない。なぜならば、「夢」や「死」のように具体性が欠けているため、物理的移動の意味として解釈できないのである。

続いて 2 つ目は、その形となるものを図で示すことができたとしても、その図となるものがある物体となる対象ではないことである。図 5.5 は「赤十字」と

「Unicef」そして同じ機関カテゴリーに属する名詞「学校」「デパート」「放送局」をウェブサイト Google (<http://www.google.com>) で画像検索した結果である。

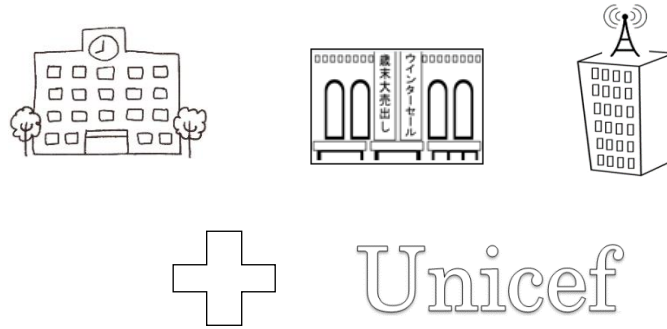


図 5.5 名詞の具体性

図 5.5 をみると、「学校」「デパート」「放送局」はある建物としての画像が検出される。しかし、「赤十字」と「Unicef」は表象となるマークが多数検出される。このように同じ機関カテゴリーに属する名詞であるにもかかわらず、検索の結果表示される画像が異なる理由は、「赤十字」と「Unicef」はある目的を達成する手段として設けた組織や機構で、ある動きや働きそのものを指すためである。したがって、「学校」「デパート」「放送局」のように建物としての画像ではなく、表象となるマークが出てくるのである。田窪 (1984) が機関名詞として挙げている「巨人軍」の場合も、画像検索すると特定の建物ではなく、巨人軍のメンバーとなる野球選手たちや巨人軍のマスコットであるジャビットが検出される。このように、「赤十字」と「Unicef」は「学校」や「デパート」などの名詞と違って、ある動きや働きそのものを指すため、その語から具体的な場所がイメージしにくいという相違点を持つ。具体的な場所がイメージしにくい場合、移動の結果、移動体が最終的にどこに位置しているか把握しにくいという問題点がある。すなわち、これらの名詞が「学校」や「デパート」などの名詞に比べて、着点として許容されにくい理由は、移動の最終的な位置を *pin point* で指さないといけませんが、具体性が欠如されているため、着点となる位置が曖昧になるからである。

続いて、相対名詞に属する「上」「下」「前」「後ろ」などの名詞は、図 5.6 のように方位を表す名詞で、これらの名詞も「学校」や「デパート」などの名詞と異なって、その形となるものを図で示すことができない名詞であることは特に言うま

でもない。

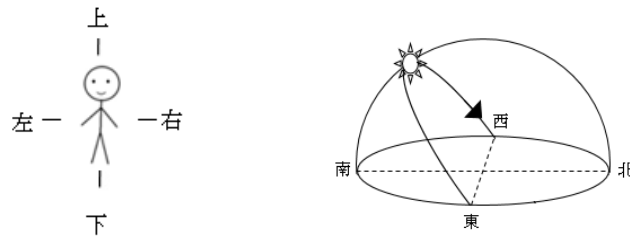


図 5.6 相対名詞

つまり、「赤十字」や「Unicef」と同じく「上」「下」「前」「後ろ」などの相対名詞も、具体的な場所がイメージしにくいため移動の行き先として捉えにくく、その結果、物理的移動の着点として捉えにくいのである。しかし、「上」と「下」の場合、たとえば移動体の移動の起点が建物の2階に位置している場合、つまり、上下の移動が可能である場合、「彼は上に行った」あるいは「彼は下に行った」と言える。しかし、ここでいう「上」あるいは「下」は移動の方向であって、移動の着点ではない。

このように、具体的な場所がイメージしやすいかどうかは名詞の場所性に関わる理由は、物理的移動表現において二格名詞句は移動の着点となる所を指すためである。つまり、明確な行き先となる場所の提示が必要であるが、「赤十字」と「Unicef」、そして「前」「後ろ」「上」「下」などの相対名詞は具体性が欠如されているため、場所性の強い名詞と場所性の弱い名詞の両者の間に位置するのである。

以上により、行き先となる名詞から具体的な場所がイメージしやすいかどうか、つまり名詞の具体性は、名詞の場所性の度合いに関わる1つの要素であると言える。森山（1988）は、どんな場合でも場所名詞としてしか使えない絶対的場所名詞として、地名、集団、組織というカテゴリーを挙げている。そして、田窪（1984）は、場所性のある名詞のうち機関カテゴリーに属する名詞として「巨人軍」を含めて「大学」「役所」「デパート」などを挙げている。田窪（1984）が挙げている機関カテゴリーは、森山（1988）が挙げている集団、組織というカテゴリーに該当する。このように、森山（1988）と田窪（1984）は、集団、組織、機関のようなカテゴリーを設けて、そのカテゴリーに属する名詞を一貫して場所性のある名詞として扱っている。しかし、今回の調査の結果から、相対名詞のように場所性のあ

る名詞に属するカテゴリーの間でも場所性の度合いが異なることや、「赤十字」や「Unicef」のように同じカテゴリーに属する名詞であっても、その場所性の度合いが名詞の間で異なることから、同じ場所性のあるカテゴリー、あるいは同じカテゴリーに属する名詞であるからと言って、一貫して同じ振る舞いをする同程度の場所性を持つ名詞として扱うことは不適切であると言える。

5.1.3 名詞の場所性と大きさとアフォーダンス

田窪（1984）の場所性のある名詞のカテゴリーに属していない名詞のうち、「金庫」「物干し台」「テーブル」「岩」の名詞が、場所性の強い名詞と場所性の弱い名詞の間に位置する理由について考察する。辻幸夫（編）（2002）は、場所性は移動体との相対的な関係の中で解釈されるものであると指摘している。

実際、たとえば、「太郎にも手紙が行くはずです」や「小さな虫がまた太郎にとまった」のように、移動主体が相対的にサイズが小さいものであれば、着点の「太郎」も「二格」で標示できるのだから、場所性は、移動主体との相対的な関係を含めた事象全体への解釈に依存するのであって、語によって一義的に決まるものではないことが分かる。

（辻幸夫（編）2002：21）

「*花子は太郎に行った」の場合は、人名詞「太郎」を着点として捉えられないが、「太郎にも手紙が行くはずです」や「小さな虫がまた太郎にとまった」の場合には、人名詞「太郎」を着点として捉えられる。つまり、移動体と行き先の相対的なサイズ関係によって場所として解釈できることで、行き先となる対象が移動体より大きい場合、場所として捉えやすいことを意味する。

これを仮説とし、移動体と行き先となる対象の相対的なサイズ関係による場所性の揺れを実証的に検証するために、日本の大学に在籍する日本人学部生 63 名を対象に、5 段階の容認度評定調査を実施した。移動体と対象の相対的なサイズ関係は、図 5.7 のように移動体と行き先となる対象のサイズ関係が把握できるイラスト

ト付きの容認度評定調査法を用いて統制を行った。そして、行き先となる対象は、移動体である人を基準として、人より小さい場合と大きい場合の 2 種類を設定している。

5: とても自然 4: やや自然 3: どちらでもない 2: やや不自然 1: とても不自然

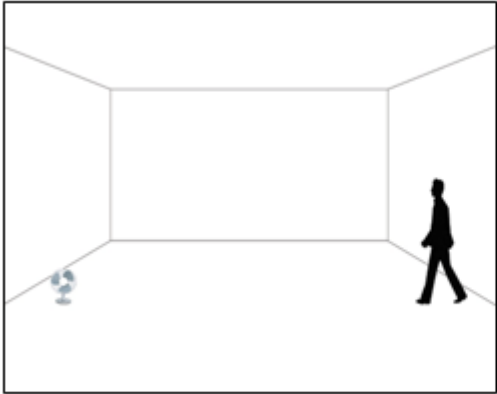
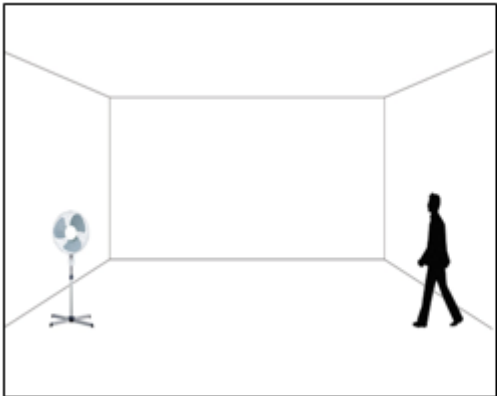
	彼は扇風機に行った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に来た。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に出た。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に入った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に帰った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に戻った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に着いた。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に寄った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に至った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に上がった。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に進んだ。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に至った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に来た。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に出た。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に入った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に戻った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に着いた。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に寄った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に進んだ。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に帰った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に行った。	5-4-3-2-1
	彼は扇風機に上がった。	5-4-3-2-1

図 5.7 イラスト付きの容認度評定調査

続いて、調査対象の名詞と動詞などの調査概要を表 5.1 に示す。

表 5.1 調査概要

移動構文	N = V
名詞 (20)	花瓶、ドア、テーブル、扇風機、消しゴム、体重計、物干し台、金庫、跳び箱、壁、鏡、窓、脚立、カーペット、銅像、椅子、エアコン、冷蔵庫、時計、押入れ
移動動詞 (11)	行く、来る、帰る、戻る、入る、着く、進む、寄る、出る、上がる、至る

移動構文は「N = V」で1つであるが、行き先となる対象のサイズが異なる2つの場面、つまり移動体より対象のサイズが大きい場合と小さい場合を設定している。そのため、調査項目数は374項目である³¹。本調査も、調査協力者への負担を減らすため、共通項目（「時計」と「押入れ」）を設けた上で2つのPart（APartは31名で、BPartは32名である）に分けて調査を実施した。

その結果として、まず共通項目に対するPart間の平均値を求めた。その結果、APartの平均値は2.5、BPartの平均値は2.6で、判断の厳しさにPart間の差はなかった。続いて、図5.8は移動体と行き先となる対象の相対的なサイズ関係によって、容認度の値が異なるかどうかを検証した結果である。●は行き先となる対象のサイズが移動体である人より大きい場合で、●は人より小さい場合である。

³¹ 20個の名詞のうち、対象のサイズが異なる2つの場面の名詞は14個であるため、調査項目数は（名詞14×大きさ2×動詞11）＋（名詞6×大きさ1×動詞11）＝374項目である。サイズが1つのみ設定されている名詞は、「ドア」「消しゴム」「壁」「椅子」「時計」「押入れ」で、これらの名詞は分析対象から省くことにする。

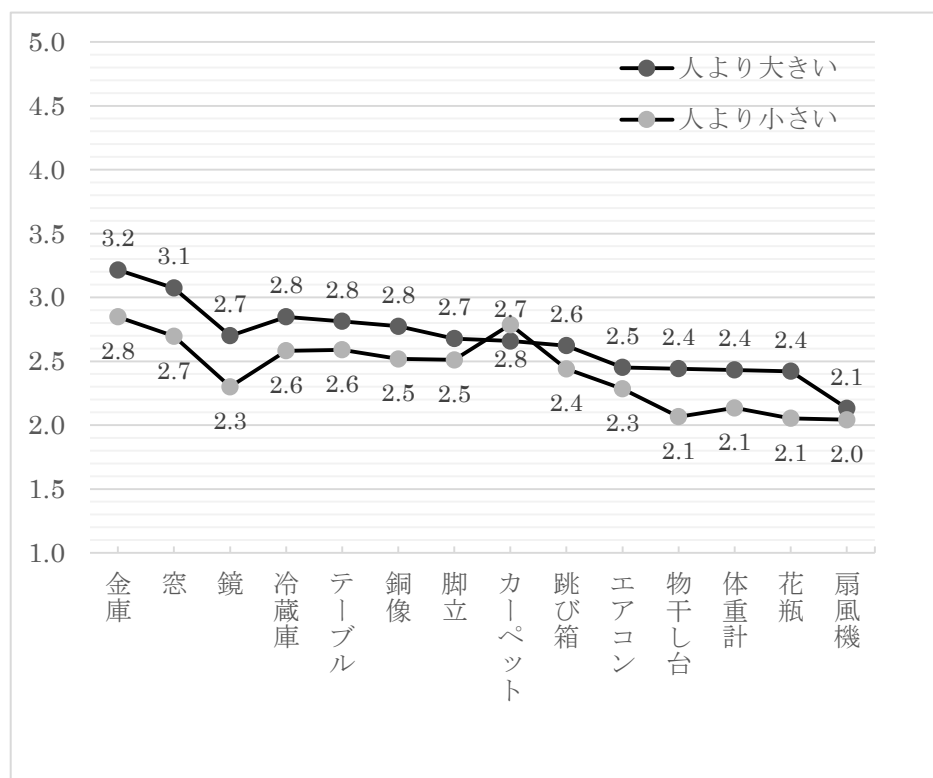


図 5.8 移動体と行き先となる対象の相対的なサイズ関係による容認度の値³²

図 5.8 の結果をみると、「カーペット」を省いて人より対象のサイズが小さいものより、大きいもののほうが容認度の値が高い結果を得た³³。この結果から、移動体と行き先の相対的なサイズ関係によって、名詞の場所性が変わること、また、移動体よりサイズの大きい対象のほうがより場所として解釈されやすいことが明らかになった。このように、名詞の場所性は移動体との相対的なサイズ関係の中で解釈されると言えるが、第 2 章で言及したように、森山（1988）は、「現実にあることであるか」あるいは「典型的にあるものであるか」という対象と知覚者の情報構造から行き先となる名詞の場所性を解釈している。(2) は第 2 章の (7) の

³² 本調査は、サイズが 1 つのみ設定されている「ドア」「消しゴム」「壁」「椅子」「時計」「押入れ」は分析対象から省く。

³³ 「カーペット」に対する結果が他の名詞と異なる理由は、「カーペット」は小さいものであれ大きいものであれ、移動の結果その領域内に位置することができること、そして 2 次元であることなどが考えられる。これについては、今後データを増やして検証する必要がある。

再掲載である。

(2) a. ペンはデスクにある。

b. ??皿はデスクにある。 (森山 1988 : 175 より一部引用)

森山 (1988) で挙げられている (2) は、存在物である「ペン」と「皿」が「デスク」よりサイズが小さいことから、名詞の場所性を移動体と対象の相対的なサイズ関係で説明することはできない。なお、ペンはデスクに置くもの、皿はテーブルに置くもののように、「デスク」と「ペン」、「テーブル」と「皿」は明確なペア関係が成り立つため、(2) において典型的にあるものであるかどうかという判断は明確である。しかし、(3) の場合、(3b) の「蚤」は「座布団」に典型的にいるもので、(3a) の「彼」は「座布団」に典型的にいるものではないことから、(3a) は言えないが、(3b) は言えるという関係性による判断は、恣意的である。

(3) a. *彼がこの座布団に居た。

b. 蚤がこの座布団に居た。 (森山 1988 : 176)

(3) の場所性は、「彼」に対して「座布団」は小さいが、「蚤」に対して「座布団」は大きいためであるという対象と移動体の相対的なサイズ関係による説明がより妥当である。よって、移動体と行き先の相対的な関係による名詞の場所性は、サイズ関係による要因と、現実にあることであるか、あるいは典型的にあるものであるか、つまり、単にそこにいることが可能な場合であるか、あるいはそこにいることが相応しい場合であるかというアフォーダンスの要因が関わっているのである。したがって、(2) や (3) のように、アフォーダンスによって決まる場合とサイズ関係によって決まる場合があるのである。以下は、移動体と行き先を有情であるか非情であるか³⁴によって 4 分類した移動パターンである。

³⁴ 現在の日本語では、「生物」は植物も含むから「有 (無) 生物」というより伝統的な「有 (非) 情」という言い方の方がよい (寺村 1993 [1968] : 9)。

移動体	→	行き先
① 有情	→	非情
② 非情	→	非情
③ 有情	→	有情
④ 非情	→	有情

まず、①の移動パターンは(4)のように、移動体は有情であるが、行き先は非情である場合である。

(4) a. *彼はトースターに行った。

b. 彼は掲示板に行った。

(4a)は言えないが(4b)は言える理由は、(3)と同じく、「彼」は「トースター」にすることが単に可能で、「彼」は「掲示板」にすることが相応しいからではなく、「トースター」は移動体「彼」より小さいが、「掲示板」は移動体「彼」より大きいためである。

次に、②の移動パターンは(5)のように移動体と行き先が両方非情である場合である。(5b)は物理的に不可能であるが、対比・比較のため記載する。

(5) a. ?彼は手紙をトースターに入れた。

b. ??彼は冷蔵庫をトースターに入れた。

(5a)は「手紙」が「トースター」より小さい。つまり、対象と移動体の相対的なサイズ関係が成立するにも関わらず、不自然である理由は、(6)のように「手紙」は「郵便ボックス」に入れるもので、「トースター」は「パン」を入れるものであるためである。

(6) a. 彼はパンをトースターに入れた。

b. 彼は手紙を郵便ボックスに入れた。

つまり、「トースター」と「パン」、「郵便ボックス」と「手紙」というペア関係の中から、アフォーダンスが働くのである。このように、(2)と同じく移動体と行き先が両方非情である場合は、サイズ関係ではなく、アフォーダンスが関わると言える。

次に、③の移動パターンは(7)のように移動体と行き先が両方有情である場合である。

- (7) a. *きのう私に彼が来た。 (森山 1988 : 176)
 b. *きのう私に猫が来た。 (筆者作例)

(7)のように、有情同士間の移動の場合、移動体と行き先の相対的なサイズ関係やアフォーダンスとは関係なく、有情の行き先は、「ところ」のような語句を補って空間化しなければならない。しかしながら、(8)のように、移動体と行き先両方とも有情であるにもかかわらず、空間化の手続きを踏まなくても移動表現が成立する場合がある。

- (8) きんのう彼に猫が送られて来た。

(8)の移動体と行き先は(7b)と同じである。しかし、(7b)は言えないが(8)は言える。その理由は、(8)は移動体である「猫」を「送る」という動詞によってモノ扱いをしているためである。つまり、「猫」が自ら移動する主体移動表現ではなく外部の力によって移動する客体移動表現である。(7b)のように「猫」が自ら移動する主体移動表現である場合は、「きのう彼のところに猫が来た」のように空間化の手続きが必要である。しかし、(8)のように客体移動表現である場合は、所有権移動の意味として成り立つため、行き先が有情であっても移動体は非情扱いとなつて言えるのである。

最後に、④の移動パターンは(9)のように移動体は非情であるが、行き先は有情である場合である。

- (9) a. きんのう私に手紙が来た。 (森山 1988 : 176)

b. きのお私に大きい冷蔵庫が来た。（筆者作例）

④の移動パターンは、③の移動パターンと同じく有情を行き先としている。しかしながら、③とは逆に（9a）と（9b）の両方が言える。その理由は、「猫」をモノ扱いしている（8）のように、行き先が有情である場合、モノの移動は所有権移動の意味として成り立つためである。つまり、移動体と行き先の相対的なサイズ関係やアフォーダンスは関係しないのである。

以上により、アフォーダンスを含めて、移動体と行き先の相対的なサイズ関係も名詞の場所性に関わる要素であると言える。しかしながら、アフォーダンスと相対的なサイズ関係による名詞の場所性の変化は、それぞれ異なる移動パターンで用いられる。つまり、アフォーダンスによる変化は、行き先と移動体が両方非情である場合であり、移動体と行き先の相対的なサイズ関係による変化は、移動体が有情であって行き先が非情である移動表現の場合である。そして、行き先と移動体が両方有情である場合と、行き先は有情で移動体が非情である場合は、アフォーダンスおよび移動体と行き先の相対的なサイズ関係は名詞の場所性に関わらない。また、移動体と行き先の相対的なサイズ関係によって名詞の場所性が変わることは、名詞の場所性は可変的なものであることを意味する。したがって、（10）のように同じ「トースター」を行き先とする場合、移動体が変われば「トースター」の場所性も変わるのである。

（10）a. *私はトースターに行った。

b. ゴキブリはトースターに行った。

以上、今回の調査の結果、「金庫」「物干し台」「テーブル」「岩」が、場所性の強い名詞と場所性の弱い名詞の間に位置して、「消しゴム」や「花瓶」などの名詞が場所性の弱い名詞に位置する理由は、「彼はNにV」という移動体である「彼」は有情で行き先は非情である①の移動パターンにおいては、移動体と行き先の相対的なサイズ関係が関わるためであると言える。

5.1.4 まとめ

5.1 節では、名詞の場所性を検証した結果、場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで名詞の場所性が連続的なものであることから、名詞の場所性の度合いに関わる要因について探った。その結果、まず「廊下」「階段」「道」のように経路の素性を有する名詞である場合、同じカテゴリーに属する「家」や「教室」などの名詞に比べて、場所性の度合いが弱いことから、経路の素性は場所性の度合いに関わる要因であることを明らかにした。

続いて、「赤十字」と「Unicef」、そして「上」「下」「前」「後ろ」のように、具体性が欠如している名詞である場合、「学校」や「デパート」のように、具体的な建物がイメージできる名詞に比べて場所性の度合いが弱いことから、具体性は場所性の度合いに関わる要因であることを明らかにした。

次に、「金庫」「物干し台」「テーブル」「岩」などの名詞が、「消しゴム」や「花瓶」などの名詞に比べて場所性の度合いが強いことから、移動体と行き先の相対的なサイズ関係が関わって、移動体よりサイズの大きい対象のほうがより場所として解釈されやすいことを明らかにした。

したがって、経路の素性を有する名詞であるかどうか（経路性）、行き先となる名詞から具体的な場所がイメージしやすいかどうか（具体性）、そして移動体より行き先となる対象のサイズが大きいかどうか（大きさ）によって、場所性の度合いが変わると言える。そして、同じカテゴリーに属する名詞の間でも容認度の値が異なることから、個々の名詞の特性を考慮して名詞の場所性を判断すべきであり、「経路性」「具体性」「大きさ」が名詞の場所性の度合いに関わる要因であることから、これらは場所性判断の材料として有効であると主張する。続いて、5.2 節では名詞の場所性と移動動詞との関係性を探る。

5.2 名詞の場所性と移動動詞との関係

移動表現における名詞の場所性を探る際、結び付く移動動詞の意味特性にも注目する必要があるが、従来の研究では十分に検討されていない。そこで、研究課題

2では、まず移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するかどうかを検証した。その結果、名詞の場所性は結び付く動詞に制約される可変性を持つことが明らかになった。そして、同じ移動を表す動詞の間でも行き先となる名詞の場所性の度合いに関わる程度が異なることが明らかになった。このように、動詞によって名詞の場所性に対する振る舞いが異なることから、本節では、名詞の場所性の度合いに対して異なる振る舞いをする動詞には、どのような特徴があるのかを明らかにする。

5.2.1 「行く」「来る」

「行く」と「来る」は、ある場所から別の場所へ移るという移動そのものの行為を表す動詞で、起点あるいは着点に対して付加的な条件を求めない動詞である。ここでいう付加的な条件とは、たとえば「入る」の場合、「行く」や「来る」と同じくある場所から別の場所へ移るという移動を表す動詞であるが、起点となる場所は外であって、着点となる場所は中あるいは内でないといけない条件がある。このように、移動以外の意味的要素によって起点や着点などに求める条件をここでは付加的な条件（ $+\alpha$ と示す）と呼ぶ。よって、「行く」と「来る」は二格名詞句を伴う移動表現において、行き先となる名詞を移動の着点(goal)として捉えて、さらに付加的な条件を求めないことから「着点移動 $+\emptyset$ 」、「入る」は二格の前項名詞となる行き先を移動の着点として捉えながら、付加的な条件を求めることから「着点移動 $+\alpha$ 」で示すことができる。

以下、図 5.9 は各階層³⁵に対する「行く」と「来る」の容認度値を容易に対照・比較するため、1つの横棒グラフにまとめたものである。

³⁵分類の基準となっている第1階層、第2階層、第3階層は、5段階評定の容認度値を3等分にしたもので、第1階層は容認度の値が高い場所性の強い群、第3階層は容認度の値が低い場所性の弱い群、第2階層は、第1階層と第2階層の間に位置する場所性の強くも弱くもない名詞群を指す（4.2節の図4.4参照）。

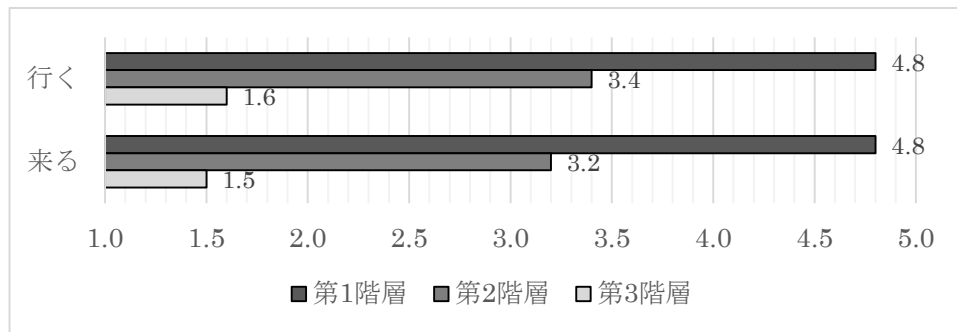


図 5.9 各階層に対する「行く」「来る」の容認度値

図 5.9 の結果をみると、各階層に対する「行く」と「来る」の結果は同じである。そこで、結び付く動詞に伴う行き先となる名詞の特徴を把握するため、段階別に各名詞の容認度値を求めた結果を表 5.2 に示す。各段階内の名詞の並べ順は容認度値を参考にしている。つまり、同じ段階内で上に書いている名詞は下には書いている名詞より容認度の値が高いことを意味する。

表 5.2 「行く」「来る」の行き先となる各名詞の容認度値

容 認 度	行く	来る
4.0 以 上	海、デパート 2 階、台所、放送局、学校、教室、山 家、湖、厨房、横浜、池、庭、公園 川、部屋、右 西、左 上、廊下、金庫 下、前、赤十字 ステージ 東 後ろ Unicef	学校 家、台所、厨房、放送局、部屋 横浜、湖、教室、デパート、公園 山、2 階、海、川 庭 前、廊下、金庫、ステージ 上、池 下 赤十字 後ろ、横、Unicef

4.0 未 満 3.0 以 上	物干し台 階段 横 テーブル 岩	西 物干し台 階段 テーブル 右、東、岩
3.0 未 満 2.0 以 上	窓、ドア 道、カーペット、電柱 壁、銅像、木 冷蔵庫 跳び箱 椅子、脚立 体重計、洗濯機	左 壁 電柱 銅像 道 窓 木、ドア カーペット、跳び箱 椅子
2.0 未 満 1.0 以 上	鏡 扇風機、花瓶 エアコン 消しゴム	冷蔵庫、脚立 洗濯機 鏡 体重計 扇風機、エアコン、花瓶 消しゴム

表 5.2 の結果から「行く」と「来る」を比較すると、たとえば「冷蔵庫」の場合、「行く」は「3.0 未満 2.0 以上」で、「来る」は「2.0 未満 1.0 以上」であるくらいの若干のずれはあるものの、場所性の強い名詞は容認度の値が高いところに位置して、場所性の弱い名詞は容認度の値が低いところに位置している傾向は同じである。また、「赤十字」や「Unicef」のように具体性が欠如している名詞や、「廊下」や「階段」のように経路の素性を持つ名詞に対して容認度の値が低く、「物干し台」「テーブル」「岩」のように、移動体より対象のサイズが大きい名詞は容認度の値

が高いことも同じである。

このように、「行く」と「来る」は付加的な条件を求めずある場所から別の場所への移動を表す「着点移動+ \emptyset 」であるため、行き先となる名詞に対して求める特性は、移動の結果、二格の前項名詞が示す領域内に位置することができるかどうかという名詞の場所性のみが容認度の重要な変数となるのである。

5.2.2 「着く」

宮島（1972）や寺村（1982）など移動動詞の下位分類からみると、「行く」と「来る」は移動全体の段階を含む動詞である。一方、「着く」は到着の段階に意味焦点がある動詞である。語そのものの特性からみると、「行く」「来る」と「着く」は異なる移動の段階に重点がある。しかし、二格名詞句を伴う移動構文のなかで考えると「行く」「来る」と「着く」は、二格の前項名詞となる行き先を移動の着点として捉える「着点移動」の動詞である点では共通している。そこで、図 5.10 の結果をみると、各階層に対する容認度の結果は、「行く」「来る」の結果と同じである（図 5.9 参照）。

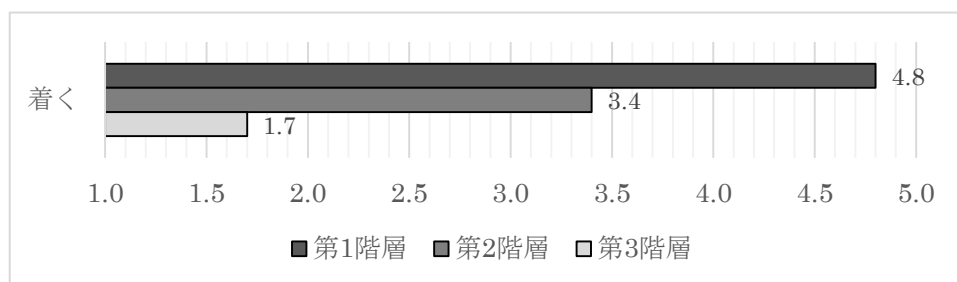


図 5.10 各階層に対する「着く」の容認度値

このように、各階層に対する「着く」の結果が「行く」「来る」の結果と同じである理由は、「着く」も行き先となる二格名詞句を移動の着点として捉えながら、起点あるいは着点に対して付加的な条件を求めない「着点移動+ \emptyset 」であるためである。つまり、異なる移動段階に重点がある動詞であっても、行き先となる二格名詞句を移動の着点として捉えて、付加的な条件を求めない動詞であれば、行き先

となる名詞に対して求める特性は主に名詞の場所性であることを意味する。続いて、表 5.3 は段階別に各名詞の容認度値を求めた結果である。

表 5.3 「着く」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	家、湖 海、山、学校、池、部屋、横浜、デパート 2 階、教室、川、放送局 階段 厨房、公園 庭、ステージ、金庫 赤十字、廊下、上 台所 物干し台
4.0 未満 3.0 以上	岩、下、テーブル、西、Unicef ドア 木 道 椅子、銅像、東 電柱、前 壁 横
3.0 未満 2.0 以上	カーペット 脚立、後ろ 跳び箱、冷蔵庫 左 窓 洗濯機 鏡、体重計

	右
2.0 未満 1.0 以上	扇風機、エアコン 花瓶、消しゴム

表 5.3 の結果をみると、表 5.2 の「行く」「来る」の結果と若干のずれはあるものの、場所性の強い名詞は容認度の値が高いところに位置して、場所性の弱い名詞は容認度の値が低いところに位置していることは同じである。また、「赤十字」や「Unicef」のように具体性が欠如している名詞や、「廊下」や「階段」のように経路の素性を持つ名詞、そして「物干し台」や「岩」のように相対的にサイズの大きい名詞の場合、同じカテゴリーに属する他の名詞と容認度の値がずれることから、「着く」においても「具体性」「経路性」「大きさ」が名詞の場所性に関わっていると言える。

5.2.3 「戻る」「帰る」

「戻る」と「帰る」は起点となる位置へ移動するという意味では共通している。そして、二格名詞句を移動の着点として捉える「着点移動」の動詞であることも同じである。しかし、図 5.11 の結果をみると、「戻る」と「帰る」の各階層に対する容認度値の結果は異なる。「戻る」の結果は「行く」「来る」「着く」の結果と同じであるが、「帰る」は「戻る」に比べて全体的に容認度の値が低い。

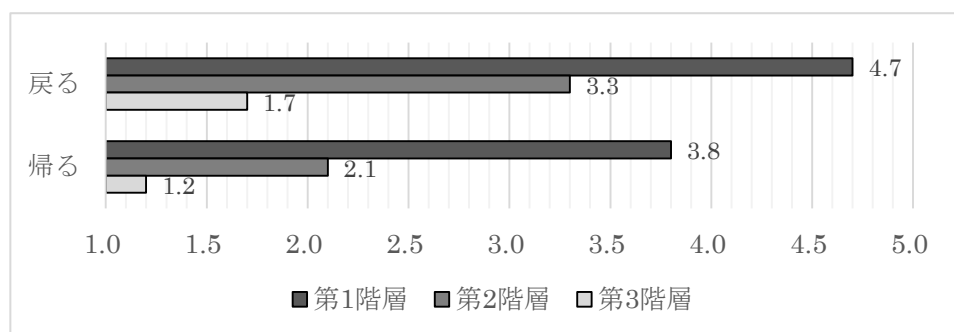


図 5.11 各階層に対する「戻る」「帰る」の容認度値

このように、各階層に対する容認度の値が「戻る」と「帰る」の間で異なる理由は、付加的な条件が異なるためである。表 5.4 は「戻る」「帰る」の各名詞の容認度値を段階別に求めた結果である。

表 5.4 「戻る」「帰る」の行き先となる各名詞の容認度値

容 認 度	戻る	帰る
4.0 以 上	教室 家、部屋、学校、厨房 放送局、庭、横浜 ステージ、デパート、海、2 階、台所 公園 山、湖 テーブル 廊下、池 椅子、物干し台、赤十字、金庫	家 横浜、部屋 山、教室 放送局 海
4.0 未 満 3.0 以 上	上、下、前、道、川、階段 後ろ 西、左、Unicef 東 横、カーペット 右 ドア	西 学校、公園 厨房 東 2 階 湖 Unicef、庭、池 ステージ、赤十字
3.0 未 満	脚立 木 銅像	テーブル、デパート 川、下、上 右、台所

2.0 以 上	体重計、冷蔵庫、電柱、跳び箱 壁、鏡、岩	物干し台 後ろ 金庫、前 廊下 左 道
2.0 未 満 1.0 以 上	窓 洗濯機 花瓶、扇風機 エアコン 消しゴム	カーペット 岩、椅子、鏡 階段、木 電柱 冷蔵庫、銅像 脚立、横、ドア 壁、跳び箱、窓、扇風機 体重計、花瓶、洗濯機、消しゴム エアコン

表 5.4 の結果をみると、「戻る」と「帰る」両方とも場所性の強い名詞は容認度の値が高いところに位置して、場所性の弱い名詞は容認度の値が低いところに位置している。つまり、表 5.4 の結果から両動詞とも「着点移動」であることが裏付けられる。しかしながら、「戻る」の場合、場所性の強い名詞はすべて容認度「4.0 以上」の段階に位置している一方で、「帰る」は「戻る」に比べて容認度「4.0 以上」の段階に位置している名詞の数が少なく、「デパート」や「台所」のように場所性の強い名詞が、容認度「3.0 未満 2.0 以上」に位置している。

「戻る」と「帰る」は、起点となる位置へ向かうことを指す。したがって (11) のように「戻る」と「帰る」は置き換えが可能で、表す移動事象も同じである。

(11) 家に {戻る／帰る}

しかし、(12) の場合、「戻る」は自然であるが「帰る」は不自然である。

(12) 駅に {戻る／?帰る}

このように、(11)の「家」と(12)の「駅」は両方とも場所性の強い名詞であるにもかかわらず、「戻る」の場合は「家」と「駅」の両方が言えるが、「帰る」の場合は「家」は言えて「駅」は言えない。その理由は、「家」は本来の居場所という帰属のニュアンスが含まれている語であるが、「駅」はそれが欠けているためである。すなわち、「戻る」と違って、「帰る」は名詞の場所性だけではなく、さらに着点となる名詞に対して、付加的な条件として **home position** の特性を求めているのである。そのため、場所性の強い名詞であっても、本来の居場所という帰属のニュアンスが欠けている「駅」と結び付きにくいのである。したがって、「帰る」が「戻る」に比べて名詞の場所性と関係する度合いが低い理由も同様である。すなわち、「戻る」は起点となる位置へ移動するという「着点移動+ \emptyset 」であるため、容認度を決める要素は名詞の場所性のみであるが、「帰る」は本来の居場所という起点への付加的な条件が求められる「着点移動+ α 」であるため、名詞の場所性だけではなく、付加的条件である「+ α 」の要素によっても容認度が左右されるのである。よって、結果的に「帰る」のほうが「戻る」より名詞の場所性と関係する度合いが低いのである。図 5.12 は、名詞の場所性に対する「着点移動+ \emptyset 」と「着点移動+ α 」の関係の度合いである。

$$\text{着点移動} + \emptyset > \text{着点移動} + \alpha$$

図 5.12 名詞の場所性が重要な変数となる度合いの関係 1

しかしながら、「戻る」の場合、「テーブル」や「椅子」のように、場所性の弱い一部の名詞に対しても容認度の値が「4.0 以上」である。これらの名詞に対しても容認度の値が高い理由は、「テーブルに戻る」「椅子に戻る」は、「元の席へ移動する」という意味として解釈できるからである。つまり、ここでいう「テーブル」と「椅子」は場所の意味としての「席」を指す。

5.2.4 「入る」「出る」

「入る」は外から中・内への移動で、「出る」は、中・内から外への移動を表す。このように、「入る」と「出る」は対照的な関係の動詞である。しかし、行き先となる名詞を着点として捉えて、さらに起点と着点に対して「外」あるいは「中・内」という付加的な条件を求める「着点移動+ α 」である点では共通している。

しかし、図 5.13 の各階層に対する「入る」と「出る」の容認度値の結果をみると、第2階層と第3階層に比べて、特に第1階層に対する両動詞の容認度値の差が大きく、「出る」の容認度値が「入る」の容認度値より低い。

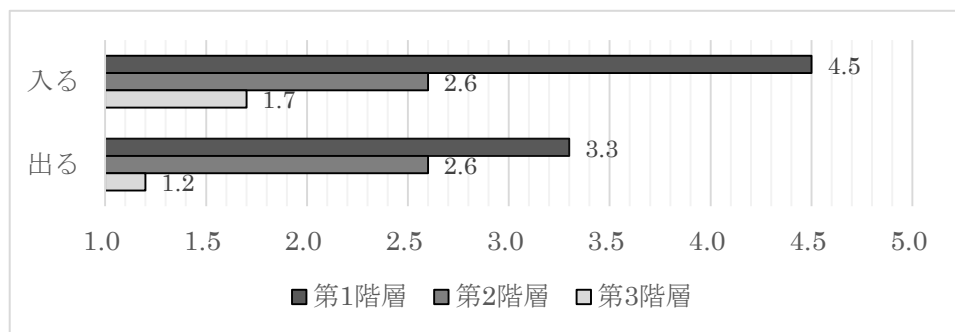


図 5.13 各階層に対する「入る」「出る」の容認度値

そこで、「入る」と「出る」の各名詞の容認度値を段階別に求めた結果が表 5.5 である。

表 5.5 「入る」「出る」の行き先となる各名詞の容認度値

容 認 度	入る	出る
4.0 以 上	家、海、厨房、教室、部屋、デパート、池 湖、川 放送局、学校 山、左、公園	庭、廊下 前 左、右 ステージ、道

	Unicef 庭、金庫、赤十字 台所	湖、厨房 海
4.0 未 満 3.0 以 上	右、道 洗濯機、2 階、冷蔵庫 横、ステージ 横浜、下	西、山 横浜 上 物干し台、横、川、2 階 池 下、東 公園 台所
3.0 未 満 2.0 以 上	西 前 後ろ、ドア 上 木 岩、跳び箱、カーペット 東、物干し台、花瓶	階段 デパート 放送局 後ろ 赤十字、教室 岩 学校、部屋 Unicef
2.0 未 満 1.0 以 上	廊下 テーブル、銅像、壁、鏡 窓 脚立、階段、電柱 消しゴム 扇風機、体重計、エアコン 椅子	カーペット、ドア、壁 金庫、家 脚立 窓、木、銅像、冷蔵庫、電柱 テーブル、鏡 跳び箱、花瓶、体重計 エアコン、洗濯機、消しゴム 扇風機、椅子

表 5.5 の結果をみると、「入る」と「出る」両方とも場所性の強い名詞は容認度

の値が高いところに位置して、場所性の弱い名詞は容認度の値が低いところに位置している。しかし、「入る」と違って「出る」の場合、「教室」や「家」など場所性の強い一部の名詞に対して容認度値が 3.0 未満である。

「出る」は、移動の起点となる所が中あるいは内であって、行き先となる所は外でないといけない。たとえば、(13a) は自然であるが (13b) は不自然である理由は、「庭」は「リビング」に対して外の空間であるためである。

(13)a. リビングから庭に出た。

b. ?庭からリビングに出た。

つまり、「リビング」は中の空間で、「庭」は外の空間であるという物理的空間関係のなか、(13a) は中から外への移動で、(13b) は外から中への移動を表しているため、中から外への移動である (13a) は自然であるが、外から中への移動である (13b) は不自然となるのである。

よって、「出る」の場合、場所性の強い名詞にもかかわらず、「教室」や「家」のような名詞に対して容認度の値が低い理由は、(14) のように「教室」と「家」は外の空間として捉えにくいため、中から外への移動が想定できないからである³⁶。

(14)a. ?彼は（ ）から教室に出た。

b. ?彼は（ ）から家に出た。

このように、「出る」は、行き先となる名詞が場所性の強い名詞であっても、中・内から外への移動が想定できる外の空間であるかどうか重要な問題になる。そのため、場所性の強い名詞の間で容認度値に差が生じて、結果的に第 1 階層の容認度値が低いのである。

起点と着点に対して「外」あるいは「中・内」という付加的な条件を求める点で

³⁶ 「{教室／家} にゴキブリが出た」のように、出現するという意味として使われる場合は、二格の前項名詞を外の場所として捉えられるかどうかという空間的な関係は問題にならない。

は「入る」も同じである。しかし、「出る」に比べて全体的に容認度の値が高い理由は、「入る」は二格の前項名詞が示す領域内に位置することができれば、その領域以外の部分はすべて外の空間になるためである。つまり、「入る」は着点となる所を基準として、中・内と外の関係が作られる相対性を持つ。よって、場所性の弱い「金庫」の容認度値が 4.0 以上であることも、「金庫」を基準としてそれ以外の空間はすべて外の空間として捉えるためである。しかし、「出る」は着点と起点の物理的空間関係で中・内と外の関係が決められているため、「教室」や「家」のように、物理的に外の空間として捉えない名詞に対しても結び付きにくく、このような絶対的な空間関係による起点と着点の固定的な関係によって、「入る」に比べて全体的に容認度の値が低いのである。

5.2.5 「寄る」

「寄る」は、(15) のように 2 つの意味用法がある。(15a) のように、ある所へ向かう途中で他の所を訪ねるという意味用法と、(15b) のように、ある方向に向かって近づくという意味用法がある。

(15)a. 大阪から東京に向かう途中、名古屋に寄った。 (森山 2012 : 484)

b. 近くに寄って話さない。 (森山 2012 : 511)

(15a) は起点である「大阪」から着点である「東京」へ移動する間に、「名古屋」というもう 1 つの着点への移動を表す。すなわち、二格の前項名詞（ここでは「名古屋」）を着点として捉える「着点移動+ \emptyset 」である。しかし、(15b) は話し相手である「聞き手」を着点(goal)ではなく、目標点(toward)として捉える「目標点移動+ \emptyset 」である。着点移動は、二格の前項名詞が指す領域内に移動体が位置することを前提としているが、目標点移動は、ある方向へ向かうというある基準点に対する方向を示すため、移動体が二格の前項名詞が指す領域内に位置することを前提としない違いがある。このように、「寄る」は「着点移動+ \emptyset 」と「目標点移動+ \emptyset 」の両方を持つ。

そこで、図 5.14 の各階層に対する容認度値の結果をみると、「着点移動+Ø」のみである「行く」や「来る」などの動詞に比べて、第3階層の名詞に対しても容認度の値が高い。これはつまり、「着点移動+Ø」のみである動詞より、名詞の場所性だけが容認度を決める重要な変数ではないことを意味する。

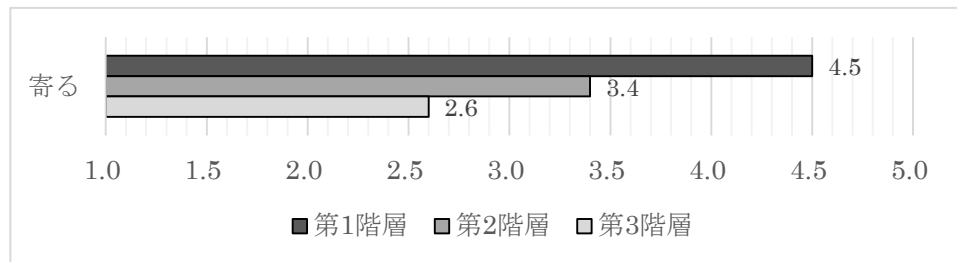


図 5.14 各階層に対する「寄る」の容認度値

続いて、表 5.6 は「寄る」の行き先となる名詞の容認度値である。

表 5.6 「寄る」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	教室 家 学校、湖、デパート、左 放送局、海 電柱、公園、右、横浜、池 台所 部屋、金庫、テーブル 川、山 壁、赤十字
4.0 未満 3.0 以上	庭 木、Unicef、物干し台 2 階、電柱、銅像 ステージ、ドア、前

	鏡 岩、窓 階段、横、脚立、椅子、下 花瓶、西 廊下、道
3.0 未満 2.0 以上	体重計、扇風機 上、跳び箱、カーペット 洗濯機、冷蔵庫、東 エアコン 後ろ
2.0 未満 1.0 以上	消しゴム

表 5.9 の結果をみると、「行く」や「着く」のように「着点移動+Ø」の動詞と同じく、場所性の強い名詞は容認度の値が高く、場所性の弱い名詞は容認度の値が相対的に低い。しかし、容認度「2.0 未満 1.0 以上」である名詞は「消しゴム」のみで、全体的に「着点移動+Ø」のみである動詞に比べて場所性の弱い名詞に対しても容認度の値が高い。このように、場所性の弱い名詞に対しても許容的である理由は、「寄る」は「着点移動+Ø」だけではなく、「目標点移動+Ø」も持つためである。

上に記したように、「着点移動」の場合、二格の前項名詞が指す領域内に移動体が位置することを前提とする。しかし、「目標点移動」の場合、ある方向へ向かうというある基準点に対する方向を示すため、移動体が二格の前項名詞が指す領域内に位置することを前提としない。すなわち、名詞の場所性が重要な変数となるのは「着点移動」であり、「目標点移動」の場合、移動先の名詞が基準点になればその名詞の場所性は問わないため、場所性の弱い名詞とも結び付きやすいのである。したがって、「着点移動+Ø」のみである「行く」や「来る」などの動詞に比べて、「着点移動+Ø」と「目標点移動+Ø」両方を持つ「寄る」のほうが、第3階層の名詞に対しても容認度の値が高いのである。

5.2.6 「向かう」

「向かう」の意味特性をみると、(16a) のようにある方向に体を向けるという移動の意味を持たないものと、(16b) のようにある目標点を目指して移動するという「目標点移動+ \emptyset 」がある。

(16)a. 机に向かって、本を読む。

b. 試験会場に向かった。

「向かう」が「目標点移動+ \emptyset 」である動詞という点では、5.2.5 節の「寄る」と同じである。しかし、図 5.15 の結果をみると、図 5.14 の「寄る」より全体的に容認度の値が高い。

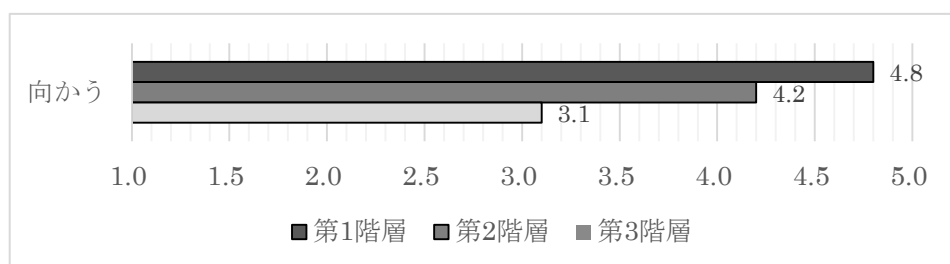


図 5.15 各階層に対する「向かう」の容認度値

その理由は、「向かう」は移動の意味としては、「目標点移動+ \emptyset 」のみである一方で、「寄る」は「着点移動+ \emptyset 」と「目標点移動+ \emptyset 」の両方があるからである。つまり、「寄る」などの動詞は「目標点移動+ \emptyset 」だけではなく「着点移動+ \emptyset 」もあるため、「行く」などの「着点移動+ \emptyset 」のみの動詞よりは名詞の場所性の度合いによる影響は小さいが、「向かう」などの「目標点移動+ \emptyset 」のみの動詞よりは、名詞の場所性の度合いによる影響が大きいのである。よって、名詞の場所性の度合いが動詞との結び付きに関わる度合いは、図 5.15 のように示すことができる。

着点移動+0 > 着点移動+0 & 目標点移動+0 > 目標点移動+0

図 5.16 名詞の場所性が重要な変数となる度合いの関係 2

しかし、図 5.15 の結果をみると、「向かう」は行き先を目標点として捉える「目標点移動+0」、つまり名詞の場所性に左右されにくい動詞であるにもかかわらず、各階層間で容認度の差が生じる。これはつまり、行き先となる名詞に対して結び付きに制限がかかることを意味する。

表 5.7 は「向かう」の行き先となる各名詞の容認度値を段階別に分けた結果である。

表 5.7 「向かう」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	放送局、家、海、厨房、部屋、学校、教室、山 デパート、金庫、2 階、池、横浜、ステージ、川 公園、湖、台所 廊下 左、西、テーブル、庭、階段 東、鏡、赤十字、ドア 下、上、物干し台、窓、壁、木 銅像 右、電柱、前 椅子、冷蔵庫
4.0 未満 3.0 以上	岩、Unicef 跳び箱、道、後ろ、脚立 洗濯機、カーペット 体重計、横 扇風機、エアコン
3.0 未満 2.0 以上	花瓶
2.0 未満 1.0 以上	消しゴム

表 5.7 の結果をみると、名詞 54 個のうち 40 個の名詞が容認度「4.0 以上」で、「体重計」や「扇風機」のように場所性の弱い名詞も容認度「4.0 未満 3.0 以上」である。また、「後ろ」を除いてすべての相対名詞の容認度が容認度「4.0 以上」である。このように、場所性の弱い第 3 階層の名詞や、方位を示す相対名詞に対しても容認度の値が高いことから、行き先となる名詞を移動の目標点として捉えていることが裏付けられる。移動動詞と場所名詞の格を探っている岡田（2009）は、「場所＋ニ／へ」は移動の着点と目標点を表して、移動の目標点という文法的意味は、結び付く動詞によって決定されると指摘している。

このように「目標点移動＋ \emptyset 」である「向かう」は、場所性の弱い名詞や方位を示す相対名詞に対しても結び付きやすいが、「花瓶」や「消しゴム」のように一部の名詞に対しては容認度の値が低い理由は、「花瓶」や「消しゴム」などの名詞は移動の目標点としての条件を満たしていないためである。

行き先となる名詞を着点として捉える場合、着点として求められる条件は名詞の場所性である。一方、行き先となる名詞を移動の目標点として捉える場合、目標点として求められる条件は、知覚的顕著性である。知覚的顕著性が目標点の条件として求められる理由は、知覚的に認知しやすい顕著性の高い地点であるほど目標点として捉えやすくなるためである。よって、「洗濯機」や「扇風機」などの名詞に比べて「花瓶」や「消しゴム」が「向かう」と結び付きにくい理由は、サイズが小さいため知覚的顕著性が低いためである。言い換えれば、サイズが小さい知覚的顕著性の低い名詞は、目標点として相応しくないことを意味する。しかしながら、「上」「下」「左」「右」のように具体性の欠如によって知覚的顕著性が低い相対名詞に対しても容認度の値が高い理由は、「目標点移動」はある方向へ進むという意味合いを持つため、知覚的顕著性と関係なく方位を示す名詞であれば結び付きやすいからである。

以上により、「目標点移動」は「上」や「下」のように方位を示す方向性を持つ名詞である場合、そして場所性の弱い名詞であっても、対象のサイズによって知覚的顕著性が高い名詞である場合には、移動の目標点として捉えやすいことが明らかになった。また、「着点移動」において名詞の場所性の度合いが重要な変数であるのと同じく、「目標点移動」において方向性と知覚的顕著性は目標点移動の重

要な変数であることが明らかになった。

5.2.7 「進む」

「進む」のもっとも基本的な意味は、前方への移動で、行き先となる名詞を目標点として捉える「目標点移動」である。そこで図 5.17 の結果をみると、「目標点移動+ \emptyset 」である図 5.15 の「向かう」の結果に比べて、各階層に対する「進む」の容認度値は全体的に低い。

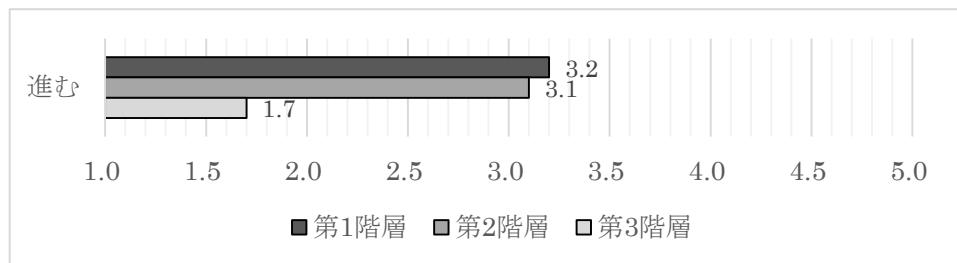


図 5.17 各階層に対する「進む」の容認度値

このように、「目標点移動+ \emptyset 」である「向かう」よりも容認度の値が全体的に低いことは、「進む」が「向かう」に比べて結び付く名詞をより厳しく制限されていることを意味する。

そこで、表 5.8 の結果をみると、容認度「4.0 以上」である名詞 10 個のうち 8 個の名詞が「前」や「左」のように方位を示す相対名詞である。

表 5.8 「進む」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	前 左 西 右 東

	2 階 上 横、下、ステージ
4.0 未満 3.0 以上	厨房 池、廊下 物干し台、川 放送局 山、教室、湖、後ろ 金庫、階段、学校 海、壁
3.0 未満 2.0 以上	公園 テーブル、部屋、電柱、台所、道、庭、ドア、木 岩、横浜、赤十字 カーペット、デパート、体重計、脚立 家、Unicef、鏡 冷蔵庫 跳び箱
2.0 未満 1.0 以上	椅子、銅像、窓 扇風機 洗濯機、エアコン 花瓶 消しゴム

このように、「後ろ」を除いて容認度「4.0 以上」の段階にすべての相対名詞が含まれる理由は、5.2.6 節で述べたように、「目標点移動」において、「方向性」と「知覚的顕著性」は容認度を決める重要な変数であるが、「進む」は方向性のみを目標点として捉えるという付加的な条件を求めているためである。

しかしながら、容認度「4.0 以上」の段階には、相対名詞の他に「2 階」と「ステージ」も含まれている。方位を示さないこれらの名詞に対しても容認度の値が

4.0 以上である理由は、図 5.18 のように、「0 前方に移動する」という「進む」の基本義から、「2 上の段階に移動する」という意味に拡張されて、「2 階」や「ステージ」が「次のステップに上がる」「次の課題に入る」という非物理的移動の意味として解釈されるからである。図 5.18 は、『日本語多義語学習辞典 動詞編（森山 2012：412～413）』に記載されている「進む」の意味関係である。

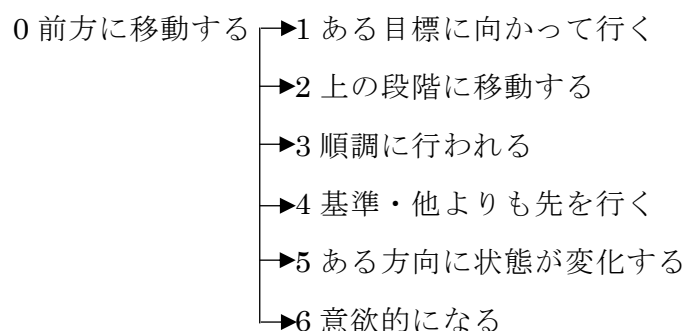


図 5.18 「進む」の意味関係

(17) は「階」、(18) は「ステージ」に「進む」が結び付く事例で、すべて「階」や「ステージ」をレベルの段階として捉えて、「上のレベルに上がる」という意味として使われている。

(17)a. 時折死んでは回収したり復活させたりしながら、丁度いいペースで塔を登っていたが、10 階ボスを倒し、11 階に進んでから一気に難易度が上昇。

(goo.gl/tEuHqR)

b. 1 階に進もう！ (goo.gl/ote2bz)

c. 5 階には 2 つの 6 階に進む 階段がある。 (goo.gl/AadZu8)

(18)a. 芸歴も 10 年を迎え、また新たな ステージに進みたい と思います。

(goo.gl/cnJwCR)

b. 新たな ステージに進もう！ (goo.gl/vabdBL)

c. NMB48 小谷里歩、卒業を発表「新しい ステージに進もう と決意」

(goo.gl/fjGawo)

このように、「進む」は「前方へ移動する」という意味特性によって、行き先となる名詞を目標点として捉えながら、方向性のみを求める付加的な条件が加えられている「目標点移動+ α 」の動詞である。

5.2.8 「至る」

「至る」は、到着の段階に意味焦点がある「着点移動」である。しかし、図 5.19 のように、階層間で容認度の差が小さい理由は、動詞が求める付加的な条件によって、名詞の場所性が変数として十分作用していないことを意味する。また、全体的に容認度の値が低いことは、結び付く名詞を厳しく制限していることを意味する。

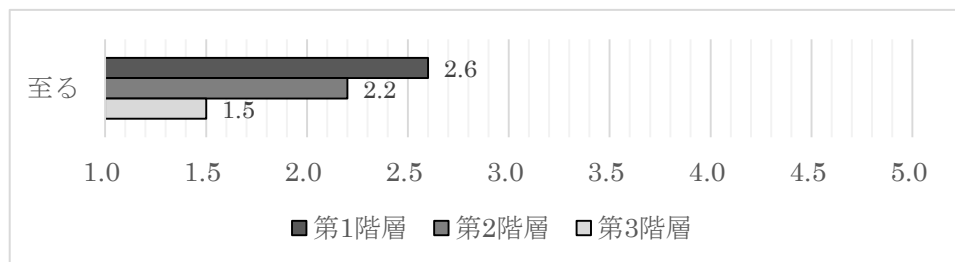


図 5.19 各階層に対する「至る」の容認度値

そこで、「至る」の行き先となる各名詞の容認度値を段階別に分けた結果を表 5.9 に示す。

表 5.9 「至る」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	—
4.0 未満 3.0 以上	山 壁、放送局 湖

3.0 未満 2.0 以上	<p>西、海</p> <p>赤十字、厨房、川、ドア</p> <p>横浜、家、教室、東</p> <p>階段、公園</p> <p>道、上、池、台所、廊下、岩</p> <p>木、2 階、部屋</p> <p>Unicef、ステージ</p> <p>学校、銅像</p> <p>物干し台、デパート、前、庭、金庫</p> <p>横、左、カーペット、窓、下</p>
2.0 未満 1.0 以上	<p>電柱</p> <p>椅子、右、冷蔵庫、洗濯機</p> <p>テーブル、後ろ</p> <p>跳び箱、脚立、花瓶</p> <p>鏡、エアコン、消しゴム</p> <p>扇風機、体重計</p>

表 5.9 をみると、「至る」はおよそ 9 割以上の名詞が容認度 3.0 未満で、調査対象語 54 個のうち、容認度「4.0 以上」である名詞は 1 つもない。このように、場所性の強い名詞を含めて、多くの名詞に対して許容しにくい理由は、(19) のように、「至る」は時間や手間をかけた結果、やっとそこにたどり着いたという意味合いを持つため、その意味に相応しい行き先の名詞を求めるためである。

(19)a. ?彼は学校に至った。

b. 彼は山頂に至った。

つまり、(19a) は自然であるが、(19b) は不自然である理由は、(19a) の「学校」は比較的に関時間や手間をかけないとたどり着かない所ではないが、(19b) の「山頂」は時間や手間をかけて行かないと到達できない意味を含意している所で

あるためである。このように、「至る」の意味特性によって、結び付く名詞が限られることは、(20)からも裏付けられる。(20)は(19a)に、手間や時間などがかかったさまを表す副詞「ようやく」を加えた例で、(19a)では不自然であった「学校」が自然に言えるようになる。

(20)彼はようやく学校に至った。

今回の調査の結果、「至る」の容認度値が名詞の場所性に関係なく容認度値が全体的に低い理由は、「山頂」のように時間や手間をかけた結果、やっとそこにたどり着いたという意味合いを持つ名詞が少なかったからである。これはつまり、名詞の場所性よりも、付加的な条件によって適用範囲の名詞を厳しく制限していることを意味する。よって、「至る」は「帰る」や「出る」などの動詞と同じく「着点移動+ α 」の動詞ではあるが、全体的に容認度の値が低いことからより付加的な条件が優先されて適用範囲の名詞が厳しく制限されている「着点移動+ $\textcircled{\alpha}$ 」であると言える。「+ $\textcircled{\alpha}$ 」は、着点移動の基本条件である名詞の場所性が変数として作用しないほど、付加的条件を求める動詞であることを意味する。

5.2.9 「上がる」

「上がる」は下から上への移動を指す空間的上昇の概念を基本義とする動詞で「着点移動」である。それゆえ、(21a)の「屋上」と(21b)の「地下」は両方とも場所性の強い名詞であるが、(21b)は着点となる「地下」より下である起点が想定できないため不自然である。つまり、「上がる」は行き先となる名詞は下から上へ移ることができる物理的特性を持つ場所でないといけないという付加的な条件を求める「着点移動+ α 」である。

(21)a. 彼は屋上に上がった。

b. ?彼は地下に上がった。

そこで、図 5.20 の各階層に対する「上がる」の容認度値をみると、「着点移動+ α 」である「至る」の結果と同じく（図 5.19 参照）、各階層に対する容認度の値が全体的に低い。つまり、適用範囲の名詞が厳しく制限されている。

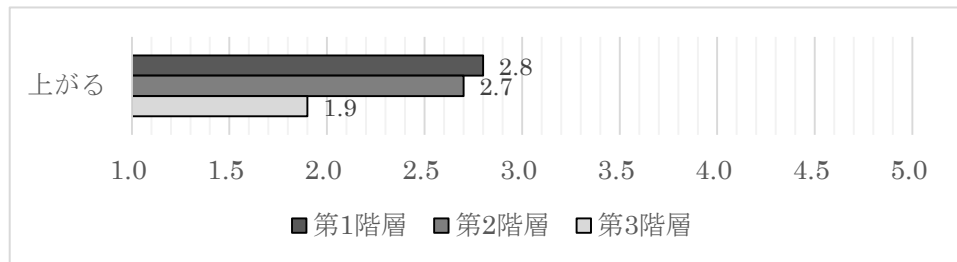


図 5.20 各階層に対する「上がる」の容認度値

しかし、表 5.10 の結果をみると、「至る」の結果と違ってすべての名詞に対して全般的に容認度の値が低いわけではない。

表 5.10 「上がる」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	2 階 ステージ、家 上、物干し台 部屋、カーペット 脚立 椅子、体重計
4.0 未満 3.0 以上	岩 木 厨房、テーブル 跳び箱 左
3.0 未満 2.0 以上	山、階段 台所、前、金庫、右

	東、学校、放送局、廊下、湖、電柱 川、池、庭、銅像 窓 後ろ 冷蔵庫、道
2.0 未満 1.0 以上	横、西、壁、教室 デパート、鏡 海、赤十字、洗濯機 エアコン、横浜 公園、ドア 消しゴム、花瓶 下、扇風機 Unicef

表 5.10 をみると、容認度「2.0 未満 1.0 以上」から「4.0 以上」まで、どの段階においても場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで、多様な場所性の度合いを持つ名詞が分布している。これはつまり、「着点移動」であるにもかかわらず、名詞の場所性は変数として作用されていないことを意味する。

そこで、容認度「4.0 以上」の段階に含まれている名詞と容認度「2.0 未満 1.0 以上」の段階に含まれている名詞を比較すると、容認度「4.0 以上」の名詞は「家」「部屋」「カーペット」を除いて、垂直移動をするか、あるいは垂直移動が可能である名詞である。ここでいう可能とは、本来そのものに対する移動の有り方ではないが、やろうとしたら出来なくはないことを意味する。たとえば、「椅子」は座るものであって、椅子の上に上がって立ったりするものではない。しかし、椅子の上に上がろうとしたら出来なくもない。一方、容認度「2.0 未満 1.0 以上」の段階に含まれている名詞の場合、「教室」や「デパート」などのように場所性の強い名詞はあるものの、垂直移動が可能である名詞はない。要するに、「上がる」は名詞の場所性ではなく、垂直移動が可能であるかどうかによって容認度に差が生じるのである。つまり、「上がる」は付加的な条件として垂直移動を求める「着点移動

+ (α)」である。

しかしながら、垂直移動ではない「家」「部屋」に対しても容認度の値が 4.0 以上である理由は、日本の住宅は玄関から家の中に入る際、はきものを脱いでから垂直移動を行うのが一般的であったためである。宮島（1972）は、「かりに土間とまったく同じ高さの板の間にうつることでも、はきものをぬぐなら、それは「あがる」ことである」と述べている。つまり、実際は水平移動であるにもかかわらず、「家に上がる」「部屋に上がる」という表現が慣習化されているわけである。したがって、「カーペット」の容認度値が 4.0 以上である理由も、はきものを脱いでそこへ移るという行為により「カーペットに上がる」という移動表現が可能になるのである。(22) は「家」、(23) は「部屋」、(24) は「カーペット (絨毯)」に「上がる」が結びつく実例で、すべて領域内への移動という意味として「上がる」が使われている。

(22)a. 訪問先に行ったとき、靴を脱いで家に上がりますよね。 (goo.gl/54tygB)

b. なんで外人は土足のまま家にあがるのか。 (goo.gl/hpPXM4)

c. 人の家に土足で上がる行為について。 (goo.gl/tJpYxt)

(23)a. あなたの家に、他所の子供にドロだらけの靴で部屋に上がられる気持ちを考えてみて欲しい。 (goo.gl/kL9kqM)

b. 夕食の配膳時、履物を履かずに廊下に出た足で部屋に上がっていた (土足で部屋に上がっているようなもので、とても気分が悪かった)。 (goo.gl/ufDMo)

(24)a. 義理母が来た時それとなく見てたら、義理母もスリッパで絨毯に上がって
ました。 (goo.gl/ZSEPkm)

b. コラ、汚い靴でカーペットに上がんな。 (goo.gl/LFDAfM)

c. うちのスリッパは布製の物でちょこちょこ洗濯していますが、それでもスリッパは汚いってイメージがありそのまま絨毯に上がられるのが許せないのです。 (goo.gl/eut4So)

以上により、「上がる」は下から上へ移るという意味により、行き先となる名詞は、上昇可能な物理的特性を満たす名詞と、「家」や「部屋」など、はきものを脱いで移動する一部の名詞に限られることを明らかにした。すなわち、「上がる」は名詞の場所性は考慮せず、付加的な条件を満たす名詞であるかどうかのみを問題とする「着点移動+ α 」である。

5.2.10 「近づく」

「近づく」は、行き先との隔たりが縮まることに意味焦点がある動詞で、二格の前項名詞を移動の目標点として捉える。よって、(25)のように、人名詞を空間化せずにそのまま行き先として捉えることができる。(25)は「彼」と「彼女」の隔たりが縮まったという意味を表している。

(25)彼は彼女に近づいた。

しかし、図 5.21 の各階層に対する「近づく」の結果をみると、「近づく」と同じく二格の前項名詞を着点として捉えない「向かう」に比べて、第3階層の名詞に対しても容認度の値が高い（図 5.15 参照）。

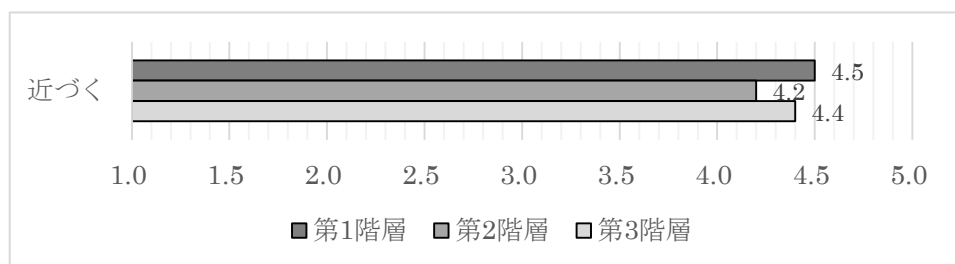


図 5.21 各階層に対する「近づく」の容認度値

このように、全階層に対して容認度の値が高いことは、「近づく」は行き先となる名詞に対して制限性が低いことを意味する。

表 5.11 は、「近づく」の行き先となる各名詞の容認度値を段階別に分けた結果で

ある。

表 5.11 「近づく」の行き先となる各名詞の容認度値

容認度	名詞
4.0 以上	鏡、池、川、椅子、ドア、金庫 壁、木、湖 電柱、窓、海、カーペット、部屋、岩、物干し台、エアコン、家 洗濯機、山、テーブル、銅像、庭、扇風機、花瓶 学校、放送局、台所、階段、デパート 厨房、ステージ、教室、公園 冷蔵庫 脚立、廊下、体重計、西 跳び箱 横浜
4.0 未満 3.0 以上	前、2 階、左、赤十字、上 右、消しゴム 東 道 下 Unicef、横 後ろ
3.0 未満 2.0 以上	—
2.0 未満 1.0 以上	—

表 5.11 の結果をみると、調査対象語である 54 個の名詞のうち、容認度値 3.0 未満である名詞は 1 つもなく、「花瓶」や「体重計」のようにサイズの小さい名詞に対しても容認度の値が 4.0 以上である。サイズの小さい名詞に対しても容認度の

値が4.0以上であることは、目標点移動でありながら、知覚的顕著性という目標点としての条件を求めない動詞であることを意味する。

そして、全体的に容認度の値が高いなか、比較的に容認度の値が低い名詞は、「上」「下」「前」「後ろ」などの相対名詞と「赤十字」「Unicef」である。これらの名詞は容認度「4.0 未満 3.0 以上」の7割以上を占めている。これらの名詞について容認度の値が比較的に低い理由は、「近づく」が行き先となる名詞に「具体性」を求めるためである。「近づく」は行き先との隔たりが縮まることに意味焦点があるため、起点と目標点との距離が縮まったのかどうかの判断が求められる。つまり、距離が測れる基準点が必要である。しかし、行き先となる名詞が示す対象の具体性が欠如している場合、その基準点となるものがぼやけてしまうため、行き先との距離が縮まったのかどうかの判断が難しくなる。そのため、「上」「下」「前」「後ろ」などの相対名詞と「赤十字」「Unicef」のような具体性が欠如している名詞は、「近づく」の行き先として適切ではないのである。したがって、「花瓶」や「体重計」などのサイズの小さい名詞が、相対名詞と「赤十字」「Unicef」という名詞よりも容認度の値が高い理由も、「近づく」が知覚的顕著性という目標点としての条件より、具体性を求めるためである。しかしながら、すべての名詞に対して容認度の値が3.0以上であることから、厳しく制限された条件ではないとも言える。

以上により、「近づく」は「向かう」と同じく行き先となる名詞を目標点として捉える動詞であるが、目標点に対する条件が緩く、「具体性」という付加的な条件に対しても厳しく制限しないことから、行き先として捉えるための条件を抑えることを付加的な条件としている「目標点移動+Ⓐ」であると言える。

5.2.11 まとめ

5.2節では、動詞によって行き先となる名詞の場所性と関係する度合いが異なることから、動詞別にその特性を探った。その結果、二格名詞句における移動動詞には、二格の前項名詞を着点として捉える「着点移動」の動詞と、目標点として捉える「目標点移動」の動詞がある。そして、「着点移動」と「目標点移動」は、さらに移動そのものを表す「着点移動+∅」と「目標点移動+∅」、そして起点あるいは

着点に対して条件を求める「着点移動+ α 」と「目標点移動+ α 」の動詞があることを明らかにした。

そこで、行き先となる名詞の場所性と移動動詞との関係を探るため、4.2.3.2 節で求めた図 4.7 から図 4.19 の結果に照らし合わせてまとめると、表 5.12 の通りである。表 5.12 は、行き先となる名詞の場所性の度合いによる各動詞の容認度値の変化、つまり SD を基準として、その値が高い順に並べている。SD が高いことは、名詞の場所性の度合いによって、動詞との結び付きの変化が大きい、すなわち、名詞と動詞の関係が緊密で、名詞の場所性が動詞との結び付きにおいてより重要な変数であることを意味する。

表 5.12 名詞の場所性と移動動詞の特性

動詞	SD	特性
来る	1.7	着点移動+ \emptyset
行く、着く	1.6	着点移動+ \emptyset
戻る	1.5	着点移動+ \emptyset
入る	1.4	着点移動+ α
帰る	1.3	着点移動+ α
出る	1.1	着点移動+ α
寄る	1.0	着点移動+ \emptyset 、目標点移動+ \emptyset
向かう	0.9	目標点移動+ \emptyset
進む	0.8	目標点移動+ α
至る	0.6	着点移動+ (α)
上がる	0.5	着点移動+ (α)
近づく	0.2	目標点移動+ (α)

表 5.12 をみると、全体的に「着点移動」が「目標点移動」より上位に位置していることから、「着点移動」の動詞が「目標点移動」の動詞より行き先となる名詞の場所性に影響を受けやすいと言える。また、「着点移動+ \emptyset 」が「着点移動+ α 」より上位に位置して、「目標点移動+ \emptyset 」が「目標点移動+ α 」より上位に位置し

ているように、付加的な条件 (+ α) が加わると、名詞の場所性だけではなく付加的な条件によっても名詞との結び付きが変わるため、相対的に行き先となる名詞の場所性との関係が弱くなる。これはつまり、行き先となる名詞を着点として捉える動詞であるか目標点として捉える動詞であるか、さらに移動そのものに重点がある動詞であるか、あるいは起点または着点（あるいは目標点）に対して付加的な条件を求める動詞であるかによって、行き先となる名詞の場所性と動詞との関係が変わると言える。すなわち、「着点」「目標点」「付加的な条件」というキーワードを用いて名詞との関係を整理することができる。

以上の内容を、図式化すると図 5.22 のようになる。

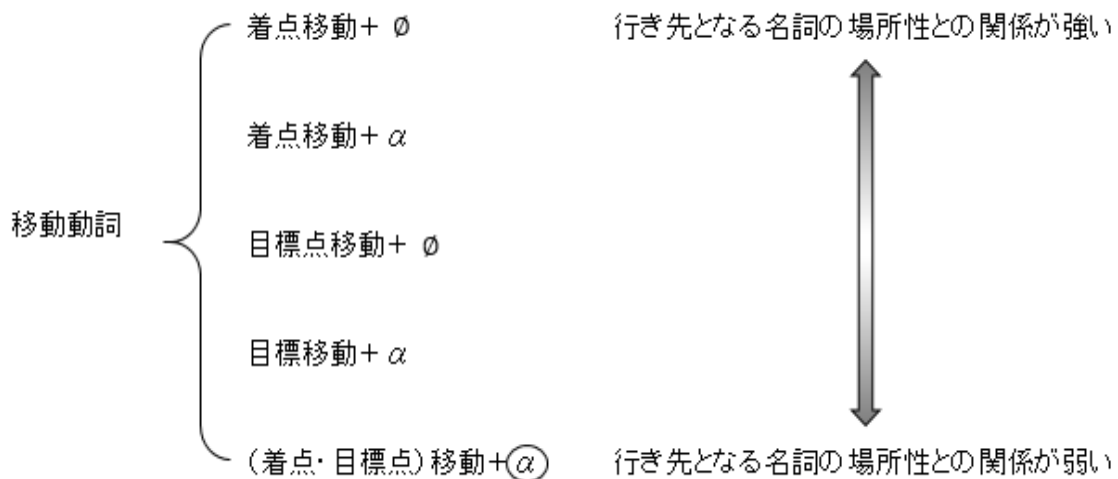


図 5.22 二格名詞句における移動動詞の特性と名詞の場所性との関係

図 5.22 は、二格名詞句における移動動詞の特性と名詞の場所性との関係を示している。たとえば、「着点移動 + \emptyset 」は行き先となる名詞の場所性との関係が緊密で、名詞と動詞の結び付きを決定するものは、名詞の場所性であることを意味する。そして、「(着点・目標点)移動 + α 」は、名詞と動詞の結び付きは、動詞の特性、つまり付加的な条件によって決まるもので、付加的な条件は着点移動であれ目標点移動であれ、名詞の場所性とかけ離れたものであるため、行き先となる名詞の場所性との関係が弱いことを意味する。

このように、行き先となる名詞を着点として捉える動詞であるか、あるいは目標点として捉える動詞であるか、さらに移動そのものに重点がある動詞であるか、

あるいは付加的な条件を求める動詞であるかによって、行き先となる名詞の場所性に関わる度合いが異なることから、名詞の場所性は可変的なもので、名詞と動詞の相互作用によって、名詞の場所性が決まると言える。

以上の結果は、従来の研究からは解明されていない部分で、移動表現における名詞の場所性を理解する上で役立つと考える。

5.3 名詞の場所性と「トコロ」

研究課題 3 の検証の結果、場所性の強い名詞は「トコロ」と結び付きにくく、場所性の弱い名詞は「トコロ」と結び付きやすいものの、名詞によって両構文間の差は一貫しておらず、名詞によって異なる結果を得た。そして、「トコロ」の特性を解明する一環として、結び付く動詞による容認度の変化幅を両構文間で対照・比較した結果、直接移動構文より間接移動構文のほうが結び付く動詞による影響が小さい結果を得た。

そこで、まず 5.3.1 節では、間接移動構文のほうが直接移動構文に比べて結び付く動詞による容認度の変化幅が小さい理由を含めて、「トコロ」と動詞の関係について述べる。そして、両構文間の差が小さい、つまり二重場所化と空間化の省略については、5.3.2 節で述べる。

5.3.1 「トコロ」と動詞の関係

直接移動構文は、名詞と動詞の意味特性がそのまま直接結び付くが、間接移動構文は名詞と動詞の間に「トコロ」が位置しているため、動詞の意味特性が直接「トコロ」の前項名詞に結び付かない。それを図で表すと図 5.23 のようになる。図 5.23 は、直接移動構文と間接移動構文の特性を図式化したものである。



図 5.23 直接移動構文と間接移動構文の特性

よって、間接移動構文のほうが直接移動構文より結び付く動詞による容認度の変化幅が小さい理由は、直接移動構文は、名詞と動詞の意味特性がそのまま結び付くため、両語の意味特性によって容認度が変わりやすい一方で、間接移動構文は、直接移動構文と違って二格の前項名詞と移動動詞の間に「ところ」を挟んでいるためである。たとえば、(26) と (27) をみると、両方とも二格名詞句のみ異なる移動表現文であるが、(26) は容認度に差がある一方で、(27) は容認度に差がない。

(26)a. 彼は家に帰った。

b. ?彼は空港に帰った。

(27)a. 彼は花瓶のところに行った。

b. 彼はテレビのところに行った。

まず、同じ場所性の強い名詞を行き先としているにもかかわらず、(26a)が(26b)より自然である理由は、5.2 節で述べたように、「帰る」は本来自分が属している、もしくは属していた場所への移動という帰属のニュアンスが含まれているためである。したがって、(26a)「家」のように home position の特性が強い名詞に対しては自然であるが、(26b)「空港」のように home position の特性が弱い名詞に対しては不自然である。すなわち、直接移動構文は名詞と動詞の意味特性がそのまま結び付くため、名詞と動詞がそれぞれ持つ固有の意味特性によって容認度が変わりやすいのである。しかし、「ところ」が挟まれている (27a) と (27b) の容認

度が同じである理由は、行き先となる所は両方とも「ところ」の前項名詞を基準としてその周辺であるため、名詞と動詞がそれぞれ持つ固有の意味特性によって左右されないからである。

そこで、図 5.24 の各構文における動詞別の SD をみると、直接移動構文のほうが間接移動構文よりすべての動詞において容認度の変化が大きい。

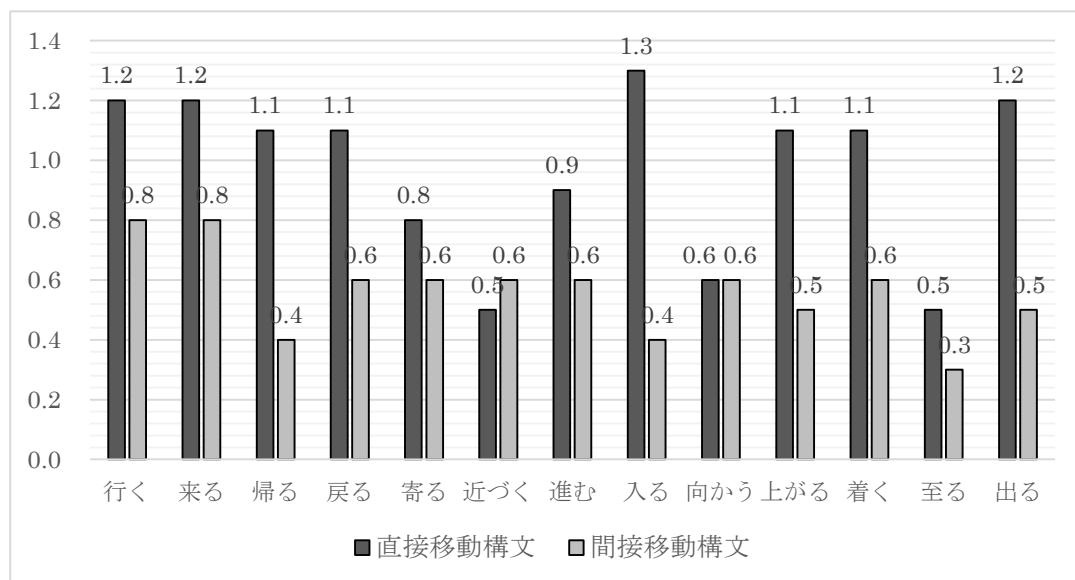


図 5.24 各構文における動詞別の SD

この結果は、直接移動構文は、名詞と動詞が直接結び付くため容認度が変わりやすいが、間接移動構文は名詞と動詞の間に「ところ」が挟まれているため、直接移動構文に比べて容認度が変わりにくいという主張を裏付ける結果でもある。また、各動詞の SD を両構文間で比較すると、たとえば「入る」の場合、直接移動構文の偏差値は 1.3 であるが、間接移動構文は 0.4 である。このように、両構文に対する偏差値が異なることから、直接移動構文において動詞が結び付く二格名詞句と間接移動構文において動詞が結び付く二格名詞句は、異なる性質のものであることが示唆される。

そこで、「ところ」の特性を探るため、「ところ」と結び付きやすい動詞と結び付きにくい動詞を抽出したものが図 5.25 である。図 5.25 は、容認度の変化幅が 2.0 以上である名詞から容認度の高い動詞と低い動詞の割合を求めた結果である。容認度の変化幅が 2.0 以上である名詞を分析対象とする理由は、「*横浜のところ」の

ように「ところ」の前項名詞と「ところ」が結び付く段階で、非文になる場合があるためである。結び付く動詞によって容認度の変化幅が変わることは、名詞と動詞が結び付く前の段階では非文になっていないことを意味するため、容認度の変化幅が2.0以上である名詞を分析対象とする。そして、間接移動構文の特徴を掴むため、直接移動構文の結果も一緒に示す。

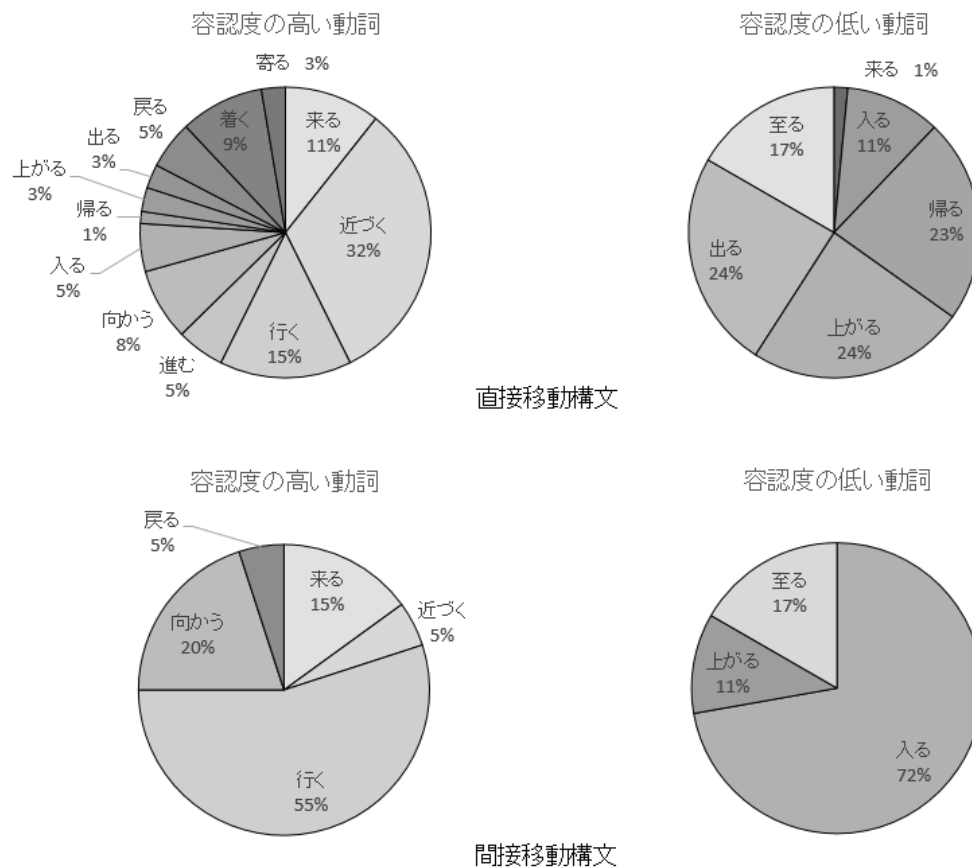


図 5.25 容認度の高い動詞と低い動詞の割合

図 5.25 をみると、両構文とも容認度の高い動詞のほうより、容認度の低い動詞のほうで動詞の数が限られている。そして、直接移動構文より間接移動構文のほうが容認度の高い動詞であれ容認度の低い動詞であれ、両方とも動詞の数が限られている。そして、間接移動構文において、もっとも割合が高い動詞は「行く」で、もっとも割合が低い動詞は「入る」である。これらの動詞において容認度の差が大きい理由は、5.2 節で述べたように、「行く」は移動そのものを表す意味特性を持

つが、「入る」はある範囲内に移るという意味特性を持つためである。それゆえ、「入る」と結び付くためには、明確な範囲の区分が必要であるが、「トコロ」は境を持たないため、「— のところに入る」という表現が成り立たないのである。したがって、容認度の低い動詞のうち「入る」がもっとも多い理由は、「トコロ」と「入る」の意味特性による結果であると言える。なお、「近づく」は調査対象の動詞のうち、名詞の場所性の度合いに関係なく、容認できる名詞がもっとも多い動詞であるにもかかわらず、間接移動構文においての割合が「行く」よりも小さい理由は、「近づく」は行き先との隔たりが縮まったかどうかの判断ができる基準点の明示が求められるが、「トコロ」は境界がなくぼやけているため、移動体と行き先の間の距離の間隔が測りにくいからである。

すなわち、直接移動構文は二格名詞句が変わるたびに、あるいは結び付く動詞が変わるたびに容認度の値が変わりやすいが、間接移動構文は「トコロ」と動詞の関係によって容認度の値が変わるのである。

以上により、間接移動構文においても名詞の場所性だけではなく、結び付く動詞も容認度に影響すると言える。しかしながら、直接移動構文は、名詞と動詞が直接結び付くため容認度の値が変わりやすい一方で、間接移動構文は「トコロ」と動詞の関係によって容認度の値が変わるため、直接移動構文に比べて容認度の変化が小さい。また、容認度の低い動詞が「入る」「上がる」など特定の動詞に限られる理由は、「トコロ」は境を持たないぼやけた性質の空間であるからである。

続いて、5.3.2 節では、二重場所化と空間化の省略について探る。

5.3.2 二重場所化と空間化の省略

本節では、5.3.1 節の続きとして「トコロ」の特性を探るため、二重場所化と空間化の省略について考察する。

まず、二重場所化や空間化の省略が生じやすい名詞の特性を探るため、両構文において容認度の値が 3.0 以上で、容認度値の差が 1.0 以下である名詞を抽出した。その結果、二重場所化であるか、あるいは空間化の省略であるかの判断が困難である第 2 階層を省いて、二重場所化が許容される名詞は「池」と「ステージ」のみ

であった。「池」と「ステージ」に対して二重場所化が許容できる理由は、これらの名詞が表す場所は、「横浜」や「山」などのように広々とした場所ではないため、一目で境界となる境が把握できるからである。「ところ」は、前項名詞を基準としてその周辺を拡大することによって、移動体が位置できるようにする機能を持つ。よって、明確な基準となる範囲提示が必要である。それを図で表すと図 5.26 のようになる。(a) は「ところ」と結び付きにくい場合で、(b) は「ところ」と結び付きやすい場合を示し、二重丸の外側にある丸は「ところ」を指して、内側にある丸は「ところ」の前項名詞を指す。



図 5.26 「ところ」と結び付きにくい場合と結び付きやすい場合

よって、「池」や「ステージ」だけではなく、(28)「砂場」や(29)「井戸」のように境界となる境が一目で把握できる広さを持つ名詞に対して、二重空間化ができることも同じ理由である。

(28)a. 彼は砂場に行った。

b. 彼は砂場のところに行った。

(29)a. 彼は井戸に行った。

b. 彼は井戸のところに行った。

また、表 5.13 (表 4.5 の一部再掲載) のように個々の移動表現の中でも、広々とした「横浜」や「山」「海」などの名詞は含まれていないことから裏付けられる。

表 5.13 二重場所化

階層	名詞	動詞
第1階層 (二重場所化)	池	行く、来る、戻る、進む、出る
	湖	帰る、戻る、進む、出る
	ステージ	行く、来る
	川	戻る
	厨房	進む
	公園	出る

しかし、表 5.13 をみると、「入る」や「至る」などの動詞の場合は、たとえば「池」であっても成立しない。このように、名詞の性質だけではなく、動詞によってさらに制限がかかる理由は、間接移動構文における動詞は「ところ」と関係しているからである。つまり、5.3.1 節で述べたように「ところ」の特性によって、結び付きやすい動詞と結び付きにくい動詞があって、「入る」や「至る」などの動詞は、「ところ」と結び付きにくいのである。このことから、二重場所化は名詞の性質だけではなく、結び付く動詞とも関わっていると言える。

以上により、二重場所化の事象を名詞と動詞の関係からみると、移動表現における二重場所化は、「ところ」と結び付くことができる名詞（一目で境界となる境が把握できる広さ）で、なおかつ 5.3.1 節で述べたように「ところ」の境を持たないぼやけた性質の空間を行き先として捉えられる「行く」「来る」「戻る」などの動詞である場合に成り立つことを明らかにした。

続いて、空間化の省略について考える。各名詞に対する両構文の容認度値を比較した結果では、空間化の省略が生じやすい名詞が抽出されなかった。その理由は、表 5.14（表 4.5 の一部再掲載）のように、「近づく」と「向かう」という特定の動詞に限って空間化の省略が生じやすいからである。

表 5.14 空間化の省略

階層	名詞	動詞
第3階層 (空間化の省略)	エアコン	近づく、向かう
	体重計	近づく、向かう
	洗濯機	向かう
	扇風機	向かう
	消しゴム	近づく

表 5.14 のように、「近づく」と「向かう」を伴う移動構文の間で、容認度の差が小さい理由は、図 5.27 のように、「近づく」と「向かう」は場所性の弱い第3階層の名詞に対しても、容認度の値が 3.0 以上であるためである。図 5.27 は、直接移動構文における第3階層に対する動詞別の容認度値である。

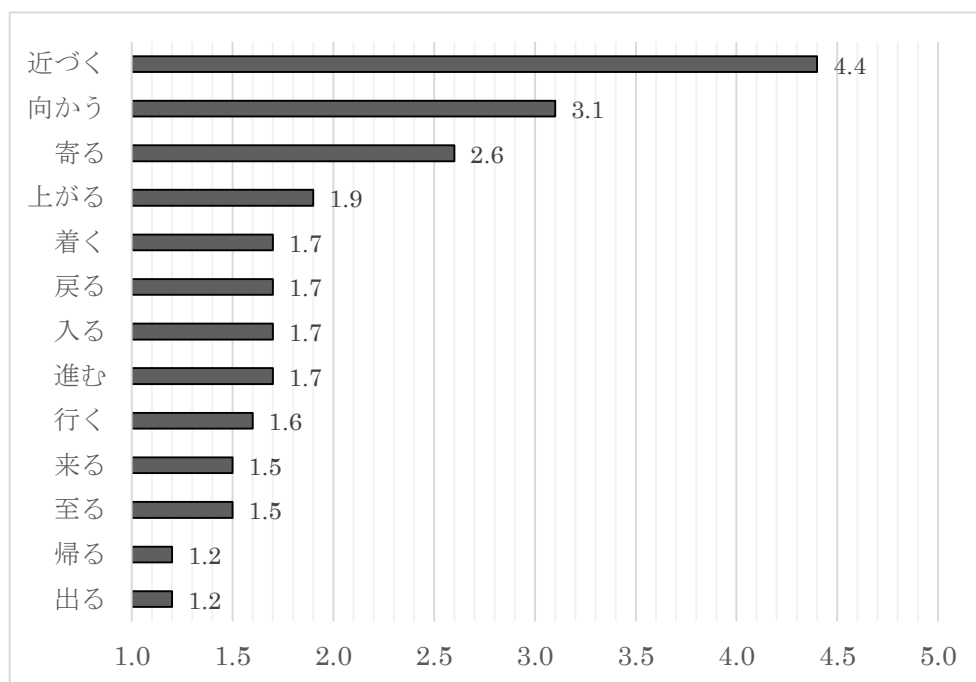


図 5.27 第3階層に対する各動詞の容認度値

「近づく」と「向かう」が、場所性の弱い第3階層に対しても平均容認度値が

高い理由は、「近づく」は行き先を目標点として捉えて、さらに行き先との隔たりが縮まることに意味焦点があるためである。そして「向かう」は、行き先を目標点として捉えて、さらに付加的な条件を求めないためである。しかしながら、「近づく」が圧倒的に容認される度合いが高い理由は、上に記したように、「向かう」は行き先となる名詞を目標点として捉えるため、場所性の弱い名詞であっても、知覚しやすいかどうかという条件が加わるが、「近づく」は行き先との隔たりだけに注目しているため、行き先となる名詞の目標点としての条件より付加的な条件である具体性の程度がより重要視されるためである。「冷蔵庫」や「花瓶」など道具として人間が作り出した物を指す名詞が含まれている第3階層の名詞は、「上」や「下」などの方位を示す名詞や、「Unicef」「赤十字」のようにある動きや働きそのものを指す組織の名詞が含まれている第2階層の名詞よりも具体性が高い。よって、「向かう」より「近づく」のほうがより空間化の省略が生じやすいのである。

以上により、名詞と動詞の関係からみると、移動表現における空間化の省略は、場所性の弱い名詞を行き先とするすべての移動表現ではなく、「向かう」あるいは「近づく」を伴う移動表現において生じやすい事象であると言える。

5.3.3 まとめ

5.3節では、空間化の手続きである「トコロ」の再検討として、名詞と動詞がそのまま結び付く直接移動構文と「トコロ」を伴う間接移動構文の関係について探った。その結果、直接移動構文は名詞に動詞がそのまま直接結び付くため、名詞が持つ特性（たとえば場所性の強い名詞であるか場所性の弱い名詞であるか、または、外であるか中・内であるかなど）と、動詞が持つ意味特性（行き先となる名詞の場所性を重要視する動詞であるかどうか、または、動詞が持つ付加的な意味特性を重要視する動詞であるかなど）によって容認度の値が変わりやすいが、間接移動構文は「トコロ」の前項名詞ではなく、一貫して「トコロ」と動詞が結び付くため、「トコロ」の境のないぼやけた空間を行き先として結び付くことができるかどうかという相対的に単純な条件によって容認度が変わるため、直接移動構文に比べて、容認度の変化が小さいことを明らかにした。なお、間接移動構文における

容認度の変化幅を探った結果、「トコロ」の境を持たない特性によって、結び付きやすい動詞と結び付きにくい動詞の数が直接移動構文より制限されていることを明らかにした。

続いて、二重場所化と空間化の省略について探った結果、二重場所化を名詞と動詞の関係からみると、「トコロ」と結び付くことができる名詞（境界となる境が把握できるくらいの広さを持つ名詞）で、かつ「行く」「来る」「戻る」など移動そのものに焦点がある動詞である場合、二重場所化が生じやすいことを明らかにした。そして、空間化の省略はすべての移動表現ではなく、場所性の弱い名詞であつても行き先として捉えられる「近づく」と「向かう」を伴う移動表現において生じやすい事象であることを明らかにした。

従来の先行研究では、「トコロ」の前項名詞と「トコロ」の結び付きについて、「トコロ」の前項名詞が持つ場所性だけに注目して議論しているが、「トコロ」は結び付く動詞とも関わるため、「入る」や「至る」のように、「トコロ」と結び付きにくい動詞を伴う移動表現の場合は、「トコロ」の前項名詞が持つ場所性と関係なく、文が成立できない場合がある。よって、「トコロ」を伴う移動表現文の場合、「トコロ」の前項名詞が持つ名詞の場所性だけではなく、結びつく動詞にも注目する必要がある。

また、二重場所化や空間化の省略を名詞と動詞の関係からみると、二重場所化については「トコロ」の前項名詞と「トコロ」の関係、そして「トコロ」と動詞の関係を考慮しなければならない一方で、空間化の省略については、主に結びつく動詞を考慮する必要があると言える。

第6章 本論文のまとめと今後の課題

本章では、これまでに述べてきた各章の研究結果をまとめるとともに、残された課題について述べる。

6.1 本論文のまとめ

本研究では、日本語の移動表現における二格名詞句の名詞の場所性に注目して、名詞の場所性、名詞の場所性と移動動詞の関係、名詞の場所性と空間化「トコロ」の関係について解明するため、3つの研究課題を設けて論じた。

〔研究課題 1〕 名詞の場所性は、場所性のありなしの二通りであるか。

〔研究課題 2〕 移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか。

〔研究課題 3〕 どのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付きやすいか。

第1章では、日本語の移動表現における名詞の場所性が文の成立において問題となる理由について述べた上で、本研究の目的と意義を述べ、本研究が扱う研究範囲と研究課題を示した。

第2章では、名詞の場所性に関する研究、名詞の空間化「トコロ」に関する研究をまとめた上で、先行研究の成果および問題点を述べた。また、先行研究から導き出された本研究の課題について述べた。

第3章では、本研究で設けた3つの研究課題を明らかにするために行った調査内容および分析方法について報告した。




第4章では、本研究の目的である、二格名詞句を伴う移動構文における名詞

の場所性、名詞の場所性と移動動詞の関係、名詞の場所性と空間化「トコロ」の関係を明らかにするために設けた3つの研究課題の検証結果について報告した。

第5章では、第4章の検証結果から、名詞の場所性に関わる要因、名詞の場所性の度合いに対して異なる振る舞いをする動詞の特性、そして名詞と動詞が直接結びつく直接移動構文に比べて、名詞と動詞の間に「トコロ」が挟まれている間接移動構文のほう結びつく動詞に影響されにくい理由と構文間の差が小さい移動表現の特性について述べた。以下、各課題とその検証結果を簡略的に表6.1にまとめる。

表 6.1 研究課題とその結果

研究課題 1	名詞の場所性は、場所性のありなしの二通りであるか								
研究課題 1 の結果	<p>日本語の移動表現における名詞の場所性は、空間的な広がりを持ち、動かない安定した場所性の強い名詞から、特定の目的を達成するため、道具として人間が作り出した移動可能性の高い場所性の弱い名詞まで、連続的なものであることを明らかにした。そこで、名詞の場所性に影響を与える要因を探った結果、「経路性」「具体性」「大きさ」が名詞の場所性の度合いに関わる変数であることを明らかにした。具体的には、経路の素性を有する名詞である場合と具体的な場所がイメージしにくい場合、そして移動体である人より行き先となる対象のサイズが相対的に小さい場合、名詞の場所性が弱くなる。</p>								
	<table><tr><td>場所性が強い</td><td>非経路</td><td>具体的</td><td>移動体より大きい</td></tr><tr><td>場所性が弱い</td><td>経路</td><td>抽象的</td><td>移動体より小さい</td></tr></table>	場所性が強い	非経路	具体的	移動体より大きい	場所性が弱い	経路	抽象的	移動体より小さい
	場所性が強い	非経路	具体的	移動体より大きい					
場所性が弱い	経路	抽象的	移動体より小さい						
<p>そして、同じカテゴリーに属する名詞の間でも名詞の場所性の度合いに差があることから、カテゴリーが同じである名詞を、同じ程度の場所性を持つ名詞として一貫して扱うのではなく、</p>									

	個々の名詞の特性、つまり「経路性」「具体性」「大きさ」を考慮して、名詞の場所性を判断すべきであることを指摘した。									
研究課題 2	移動表現における名詞の場所性には、結び付く移動動詞も影響するか									
研究課題 2 の結果	<p>名詞の場所性は、名詞それ自身に内在している性質であるが、結び付く動詞に制約されて、場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞へ、あるいは場所性の弱い名詞から場所性の強い名詞へと場所性の度合いが変わる結果を得た。よって、研究課題 1 と研究課題 2 の結果から、移動表現における名詞の場所性は、場所性の強い名詞から場所性の弱い名詞まで連続的なもので、なおかつ結び付く動詞との関係によって決まる可変性を持つものであることを主張した。</p> <p>そして、行き先となる名詞の場所性と関係する度合いが動詞によって異なることから、各動詞の特性を探った結果、二格名詞句を伴う移動構文において、行き先となる名詞を着点として捉える「着点移動」の動詞が、行き先となる名詞を目標点として捉える「目標点移動」の動詞より、また移動そのものを表す「+\emptyset」が、付加的な条件を求める「+α」より、場所性の度合いが変わるたびに、動詞との結び付きも頻繁に変わることを明らかにした。よって、行き先となる名詞の場所性と関係する度合いは、以下のような順であることを示した。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>動詞の特性</th><th>名詞と動詞の関係決定権</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①着点移動+\emptyset</td><td rowspan="4">  名詞の場所性の度合いが重要な変数 </td></tr> <tr> <td>②着点移動+α</td></tr> <tr> <td>③目標点移動+\emptyset</td></tr> <tr> <td>④目標点移動+α</td></tr> <tr> <td>⑤(着点・目標点)移動+$\textcircled{\alpha}$</td><td>動詞の付加的な条件が重要な変数</td></tr> </tbody> </table>	動詞の特性	名詞と動詞の関係決定権	①着点移動+ \emptyset	 名詞の場所性の度合いが重要な変数	②着点移動+ α	③目標点移動+ \emptyset	④目標点移動+ α	⑤(着点・目標点)移動+ $\textcircled{\alpha}$	動詞の付加的な条件が重要な変数
動詞の特性	名詞と動詞の関係決定権									
①着点移動+ \emptyset	 名詞の場所性の度合いが重要な変数									
②着点移動+ α										
③目標点移動+ \emptyset										
④目標点移動+ α										
⑤(着点・目標点)移動+ $\textcircled{\alpha}$	動詞の付加的な条件が重要な変数									

	①に近いほど行き先となる名詞の場所性との関係が強い動詞で、⑤に近いほど行き先となる名詞の場所性との関係が弱い動詞である。そして、行き先となる名詞を着点として捉えるか目標点として捉えるか、さらに移動そのものに重点があるか、付加的な条件を求めるかが名詞の場所性と動詞の関係性を決める要素であることを明らかにした。
研究課題 3	どのような特性を持つ名詞が「トコロ」と結び付きやすいか
研究課題 3 の結果	場所性の強い名詞は「トコロ」と結び付きにくく、場所性の弱い名詞は「トコロ」と結び付きやすいという結果を得た。この結果は、「トコロ」は場所性のない名詞に対する手続きで、すでに場所性のある名詞には「トコロ」がつかないという従来の先行研究の指摘を裏付ける。しかし、直接移動構文と間接移動構文間の容認度の差が大きい名詞もあれば小さい名詞もあるなど、両構文に対する振る舞いが名詞によって異なった。そこで、構文間の差が小さい名詞に注目して、二重場所化と空間化の省略について探った結果、二重場所化は「池」や「ステージ」のように一目でその境界となる範囲が把握できる領域を持つ名詞で、なおかつ「行く」や「来る」のように移動そのものに重点がある一部の動詞に限って成り立つことを明らかにした。そして、空間化の省略は、名詞の場所性は問わず、場所性の弱い名詞に対しても結び付きやすい「近づく」と「向かう」に限って起こる現象であることを明らかにした。

以上が本研究の研究課題に対する結果である。本研究は、容認度評定調査法という従来の研究とは異なるアプローチを通して、名詞の場所性の度合いを数値化して示した。そして、従来の研究とは違って、名詞の場所性および二重場所化と空間化の省略を移動動詞の意味特性と関連付けて探った。この新しい観点は、本研究のオリジナリティでありもう一つの成果であると言える。

6.2 今後の課題

6.1 で述べたような結果や成果が得られた一方で、以下の研究課題も残されている。

まず第1に、意味的な違いの解明である。たとえば二重場所化の場合、「彼は池に行った」と「彼は池のところに行った」の意味的な違いについてまでは解明ができなかった。2.2.1 節で述べたように、二重場所化に対して、「部分の強調」「既知のものとしての特定化」という異なる見解が述べられている。そこで、二重場所化による意味的な違いについては、今後文脈内での使い分けに注目して、その違いを探って行きたい。

第2に、名詞の場所性に関わる要因の多角的な観点からの検討である。本研究では、主に移動動詞との関係だけに注目して、名詞の場所性に関わる要因を探った。しかし、2.2.2 節で述べたように、番号や修飾語を付けることによって特定性が高まると、空間化されなくてもモノから場所への転化が起こる。つまり、移動体や動詞以外の文の内部構造の要素間の関係で、名詞の場所性が変わるのである。今後、より視野を広げて名詞の場所性に関わる要因を探って行きたい。

第3に、第二言語習得の観点からの分析である。田窪（1984）によると「場所性」に対する sensitivity は言語によって多少異なる。そこで、外国人日本語学習者が産出した移動表現文から、移動表現の誤用について探って行きたい。

第4に、異言語間の対照による検証である。日韓対照研究を通して、両言語とも名詞の場所性によって移動表現の形式が異なるものの、韓国語のほうが日本語より名詞の場所性に対する区別が明確ではない傾向があることを指摘した。しかし、移動動詞「行く」のみを対象としており、結び付く移動動詞による日韓の違いについては検討していない。今後この点について更なる検討が必要である。

最後に、本研究が学習者に対する指導法の研究や類型論の研究の発展につながることを願いたい。

付記

本論文は、以下の学会発表・論文に加筆修正したものに基づく。

第1章

新規執筆

第2章

新規執筆

第3章

新規執筆

第4章

新規執筆

第5章

申貞恩(2012)「空間移動表現における二格の名詞と移動動詞「行く」とのくみあわせについて—空間性が低い名詞を中心として—」韓国日語教育学会（口頭発表）

申貞恩(2013)「着点解釈の条件について—に格名詞と移動動詞を中心として—」韓国日語日文学会（口頭発表）

申貞恩(2014)「日本語における二格名詞句と移動動詞による空間表現」韓国日語日文学会（口頭発表）

申貞恩(2014)「日本語における空間表現—二格名詞句と移動動詞の関係について—」日本語/日本語教育研究会（ポスター発表）

申貞恩(2014)「日本語における移動表現—二格名詞句と移動動詞—」共同シンポジウム（ポスター発表）

申貞恩(2015)「二格を伴う移動表現について—容認度調査から—」日本語/日本語

教育研究会（ポスター発表）

申貞恩(2016)「移動表現における名詞の場所性と空間化」表現学会（口頭発表）

申貞恩(2016a)「場所性を持つ名詞と形式名詞「ところ」について—容認度判断調査の結果から—」『日語日文学研究』第 97 輯 No1 pp101-120、査読有り

申貞恩(2016b)「名詞の場所性と「行く」「着く」「向かう」の関係性—容認度判断調査の結果を中心に—」『日本語学研究』第 48 輯 pp.33-48、査読有り

申貞恩(2016c)「日韓移動表現における名詞の場所性—日本語の「に行く」と韓国語の「에 가다」—」『表現研究』第 104 号 pp.59-68、査読有り

第 6 章

新規執筆

参考・引用文献

<日本語文献>

- 荒川清秀（1992）「日本語名詞のトコロ（空間）性—中国語との関連で—」『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』 pp.71-93. くろしお出版
- 李在鎬（2010）『認知言語学への誘い』 開拓社
- 李善姫（2009）『日本語の移動動詞の研究』 東京外国語大学博士学位論文
- 李丹（2010）「二格の名詞と移動動詞のくみあわせについての考察—連語論の観点から—」『日本研究教育年報』 14 pp.41-63. 東京外国語大学
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』 講談社
- 石綿敏雄（1972）「助詞「に」を含む動詞句の構造」『電子計算機による国語研究』 4 pp.57-109. 国立国語研究所
- 井手友里子（2011）「格助詞「に」「へ」の分布に関する調査」『国際教育センター紀要』 12 pp.65-75. 南山大学国際教育センター
- 井本亮（2001）「位置変化動詞の意味について—副詞句の解釈との対応関係と語彙概念構造」『日本語文法』 1（1） pp.177-197. 日本語文法学会
- 岩淵匡（2004）『日本語反省長』 河出書房新社
- 上野誠司（2007）『日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究』 ひつじ書房
- 内田治（1997）『すぐわかる SPSS によるアンケートの調査・集計・解析』 東京図書
- 王軼群（2009）「場所表現」『空間表現の日中対照研究（FRONTIER SERIES 日本語研究叢書）』 pp.83-108. くろしお出版
- 大内彩（2014）「格助詞「に」とそれに対応する韓国語—小説『夏の庭-The Friends-』を中心に—」『日語日文学』 60 pp.101-115. 韓国日本文化学会
- 岡田幸彦（2009）「現代日本語の移動動詞と場所名詞の格」『日本アジア研究』

- 6 pp.39-61. 埼玉大学大学院文化科学研究科
- 奥田靖雄 (1962) 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」 (言語学研究会編 (1983) : pp.281-323 に所収)
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店
- 尾谷昌則・二枝美津子 (2011) 『認知文法論のアプローチ (講座: 認知言語学のフロンティア) <第2巻> 構文ネットワークと文法』 研究社
- 小原真子 (2007) 「移動表現の日英比較: 小説とその翻訳を題材に (西光義弘教授還暦記念号)」 神戸言語学論叢 5 pp.161-174. 神戸大学人文学研究科言語学研究室
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版
- 影山太郎 (2001) 「動詞の意味を探る」 『日英対照 動詞の意味と構文』 pp.12-99. 大修館書店
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』 岩波書店
- 影山太郎 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』 大修館書店
- 風間伸次郎 (2013) 「<特集「所有・存在表現」> [テーマ企画: 特集 所有・存在表現] まえがき」 『語学研究所論集』 18 pp.95-119 東京外国語大学語学研究所
- 鎌原雅彦・大野木裕明・宮下一博・中沢潤 (1998) 『心理学マニュアル 質問紙法』 北大路書房
- 茅野直子・秋元美晴 (1986) 『外国人のための助詞』 武蔵野書院
- 北原博雄 (2007) 「日本語における、空間表現の項性と移動動詞句の限界性」 『聖徳大学研究紀要』 18 pp.65-72. 聖徳大学人文学部
- 久島茂 (2002) 『《モノ》と《場所》の意味論—「大きい」とはどういうこと?』 くろしお出版
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』 大修館書店
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房
- 佐伯胖 (1986) 『認知科学選書 10 認知科学の方法』 東京大学出版会
- 境敦史・曾我重司・小松英海 (2002) 『ギブソン心理学の核心』 勁草書房

- 佐古仁志（2013）『＜習慣＞に関する生態記号論的研究』大阪大学博士学位論文
- 佐々木正人（1994）『アフォーダンス—新しい認知の理論』岩波書店
- 下地賀代子（2004）「南琉球方言の空間表現」『国文学 解釈と鑑賞』69（7）
pp.169-179. 至文堂
- 下野香織（2005）「多義助詞「に」の第二言語習得過程：認知言語学的アプローチ」『言語学と日本語教育IV』 pp.87-98. くろしお出版
- 城田俊（1981）「格助詞の意味」『国語国文』50（4） pp.43-56. 中央図書出版社
- 申貞恩（2016a）「場所性を持つ名詞と形式名詞「ところ」について—容認度判断調査の結果から—」『日語日文学研究』97（1） pp.101-120. 韓国日語日文学会
- 申貞恩（2016b）「名詞の場所性と「行く」「着く」「向かう」の関係性—容認度判断調査の結果を中心に—」『日本語学研究』48 pp.33-48. 韓国日本語学会
- 申貞恩（2016c）「日韓移動表現における名詞の場所性—日本語の「に行く」と韓国語の「에 가다」」『表現研究』104 pp.59-68. 表現学会
- 杉本武（1991）「ニ格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」『日本語のヴォイスと多動性』 pp.233-250. くろしお出版
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 薛根洙（1997）『動詞連語論の研究—移動動詞の日韓比較研究を中心に—』大東文化大学博士学位論文
- 薛根洙（2001）「連語論の研究—「へ格名詞＋移動動詞」を中心に」『国文学解釈と鑑賞』66（7） pp.158-169. 至文堂
- 薛根洙（2002）「移動動詞の連語論研究—「へ格名詞」と組み合わせる場合を中心に—」『日本文化學報』12 pp.65-87. 韓国日本文化學會
- 薛根洙（2012）『日本語の言語学のための日本語の語彙論理解』신아사
- 田窪行則（1984）「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12 pp.89-117. 大阪外国語大学研究留学生別科
- 竹内理・水本篤（2014）『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために—』 松柏社

- 田中章夫「助詞」(3)『岩波講座 日本語』7 岩波書店
- 田中茂範・松本曜(1997)『空間と移動の表現』 研究社
- 谷口一美『学びのエクササイズ 認知言語学』 ひつじ書房
- 鶴岡昭夫(1979)「関西以東の「へ」と「に」の分布について—近代の小説を資料として—」『計量国語学』25 pp.341-351. 計量国語学会
- 鶴岡昭夫(2002)「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』 pp.621-641. 勉誠社
- 寺村秀夫(1968)「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12 pp.42-57. (日本語文法編(1993) pp.3-20.に所収) 日本語教育学会
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 第I巻』 くろしお出版
- 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人(1987)『ケーススタディ 日本文法』 桜楓社
- 中田一志(1995)「移動動詞の意味論」『論集』14 pp.37-53. 大阪外国語大学
- 中本敬子・李在鎬(2011)『認知言語学研究の方法』 ひつじ書房
- 日本語文法編(1993)『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』 くろしお出版
- 野田尚史(1991)『はじめての人の日本語文法』 くろしお出版
- 橋本進吉(1969)『橋本進吉博士著作集〈第8冊〉助詞・助動詞の研究(講義集三)』 岩波書店刊行
- 朴貞姫(2005)『日朝中3言語の仕組み—空間表現の対照研究—』 振学出版
- 深田智・仲本康一郎(2008)『認知文法論のアプローチ(講座:認知言語学のフロンティア)〈第3巻〉 概念化と意味の世界』 研究社
- 方美麗(2004)「中国語と日本語の空間表現」『国文学 解釈と鑑賞』69(7) pp.76-92. 至文堂
- 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』 東京大学出版会
- 本多啓(2013)「椅子の上に座ったことはありますか?」『知覚と行為の認知言語学:「私」は自分の外にある』 pp.109-119. 開拓社
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版』 くろしお出版

- 松岡弘監修・庵功雄・高梨信乃・西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教えるための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 松本曜（2003）『シリーズ認知言語学入門＜第3巻＞ 認知意味論』 大修館書店
- 松本曜（2017）「移動表現の類型に関する課題」『シリーズ言語対照 7 移動表現の類型論』 pp.1-24. くろしお出版
- 丸尾誠（2003）『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 名古屋大学博士学位論文
- 三原健一（2009）「方向と存在の文法」『語彙と意味の文法』 pp.455-472. くろしお出版
- 三宅友宏（1996）「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』 110 pp.143-168. 日本言語学会
- 宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的用法』 国立国語研究所
- 森雄一（1998）「「に」他動詞について」『人文学科論集』 31 pp.69-78. 茨城大学人文学部紀要
- 森田良行（1994）『動詞の意味論的文法研究』 明治書院
- 森田良行（1973）「日本語動詞における格支配と意味」『10周年記念論文集』 pp.265-284. 早稲田大学語学教育研究所
- 森田良行（2004）「移動動詞と空間表現」『国文学 解釈と鑑賞』 69（7） pp.19-25. 至文堂
- 森山新（2012）『日本語多義語学習辞典 動詞編』 アルク
- 森山新（2001）「認知的観点から見た場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い」『日本學報』 pp.95-105. 韓国日本学会
- 森山卓郎（1988）「場所表現の類型－場所・方向・移動－」『日本語動詞述語文の研究』 pp.173-198. 明治書院
- 山田孝雄（1952）『日本文法論』 宝文館
- 米山三明・加賀信広（2001）『語の意味と意味役割』 研究社
- 和氣愛仁（1996）「『に』の機能」『筑波日本語研究』 pp.59-72. 筑波日本語研究室
- 和氣愛仁（2000）「ニ格名詞句の意味解釈を支える構造的原理」『日本語科学』

7 pp.70-94. 国立国語研究所

<英語文献>

- Adele E. Goldberg. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press. [河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 訳 (2001) 『構文文法論：英語降構文への認知的アプローチ』 研究社]
- Carifio, J., & Perla, R. (2008) Resolving the 50year debate around using and misusing Likert scales. *Medical education* 42 (12) , pp.1150-1152.
- Greenbaum, Sidney. (1988) *Good English and the Grammarian*. London: Longman.
- Gibson, James J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton-Mifflin. [古崎敬 訳 (1985) 『生態学的視覚論-ヒトの知覚世界を探る』 サイエンス社]
- Rubin, E. (1921) *Visuell Wahrgenommene Figuren: Studien in psychologischer Analyse*. Kobenhaven: Gyldendalske boghandel.
- Stevens, S. S. (1946) On the Theory of Scales of Measurement. *Science* 103 (2684) , pp.677-680.
- Suzuki, T. (1970) An Essay on the Anthropomorphic Norm. In Jakobson, R. and S. Kawamoto (eds.) *Studies in General and Oriental Linguistics*. TEC. Company Ltd. pp.552-556.
- Talmy, Leonard. (1978) Figure and Ground in Complex Sentences. In: *Universals of Human Language*. vol.4, Syntax. (eds.) Greenberg, Joseph H. Stanford: Stanford University Press. pp.625-649.

<参考資料>

- 大野晋・浜西正人 (1981) 『角川類語国語辞典』 角川書店
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表増補改訂版データベース』 (ver.1.0)

- 辻幸夫（編）（2002）『認知言語学のキーワード事典』 研究社
- 明治書院（編）（1958）『日本文法講座 6 日本文法辞典』 明治書院
- 筑波ウェブコーパス（TWC）の検索ツール NINJAL-LWP for TWC
<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>

資料 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-1)

a. 彼は横浜に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル(APart-1)

a. 彼は台所に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル(APart-1)

a. 彼は湖に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-1)

a. 彼は横浜に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	本調査へのご理解とご協力に深く感謝いたします。	
b. 彼は台所のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は台所へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
a. 彼は洗濯機に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は洗濯機のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は洗濯機へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-2)

a. 彼は湖に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-2)

a. 彼は横浜に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-2)

a. 彼は洗濯機に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-2)

a. 彼は湖に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は横浜のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は横浜へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
a. 彼は左に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は左のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は左へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		

本調査へのご理解とご協力を深く感謝いたします。

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル(APart-3)

a. 彼は横浜に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-3)

a. 彼は台所に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機にきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-3)

a. 彼は湖に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-3)

a. 彼は横浜に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は台所のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は台所へ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
a. 彼は洗濯機に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は洗濯機のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は洗濯機へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		

本調査へのご理解とご協力に深く感謝いたします。

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-4)

a. 彼は湖に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜にきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところにきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へきた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜が上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-4)

a. 彼は横浜に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-4)

a. 彼は洗濯機に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ出了た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1

5:とても自然 4:やや自然 3:どちらでもない 2:やや不自然 1:とても不自然

調査用紙サンプル (APart-4)

a. 彼は湖に上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ進んだ。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ出た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は湖に至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は横浜のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は湖のところに至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は横浜へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は湖へ至った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は左に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は消しゴムに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は左のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は消しゴムのところに上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は左へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は消しゴムへ上がった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は洗濯機に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は横浜に向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は洗濯機のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は横浜のところに向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は洗濯機へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は横浜へ向かった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は台所に行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は左に近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は台所のところに行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は左のところに近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は台所へ行った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は左へ近づいた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は湖に来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は洗濯機に帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は湖のところに来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は洗濯機のところに帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は湖へ来た。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は洗濯機へ帰った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は消しゴムに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	a. 彼は台所に寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
b. 彼は消しゴムのところに戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	b. 彼は台所のところに寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
c. 彼は消しゴムへ戻った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1	c. 彼は台所へ寄った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1
a. 彼は横浜に入った。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は横浜のところにいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は横浜へいった。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
a. 彼は左に着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
b. 彼は左のところに着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		
c. 彼は左へ着いた。	5 - 4 - 3 - 2 - 1		

本調査へのご理解とご協力を深く感謝いたします。

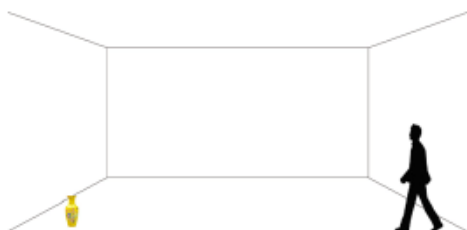
資料 2

調査用紙サンプル (APart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



彼は花瓶に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に至った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に行った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に来た。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に出た。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に入った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に戻った。 5-4-3-2-1



彼は花瓶に行った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に来た。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に出た。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に入った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は花瓶に至った。 5-4-3-2-1



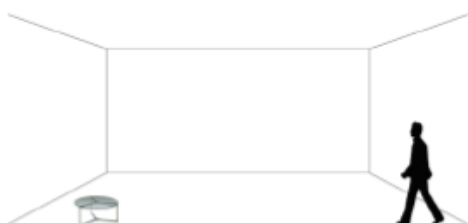
彼はドアに行った。 5-4-3-2-1
 彼はドアに来た。 5-4-3-2-1
 彼はドアに出た。 5-4-3-2-1
 彼はドアに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はドアに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はドアに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はドアに至った。 5-4-3-2-1
 彼はドアに入った。 5-4-3-2-1
 彼はドアに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はドアに戻った。 5-4-3-2-1
 彼はドアに寄った。 5-4-3-2-1



彼はテーブルに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに至った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに寄った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに行った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに来た。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに出た。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに入った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに戻った。 5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (APart)

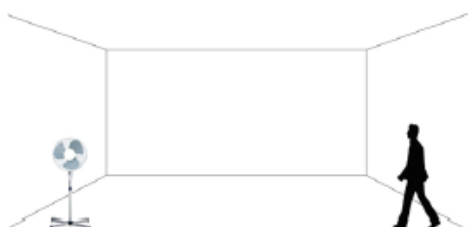
非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



彼はテーブルに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに出た。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに入った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに戻った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに寄った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに行った。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに来た。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はテーブルに至った。 5-4-3-2-1



彼は扇風機に行った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に来た。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に出た。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に入った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に行った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に来た。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に至った。 5-4-3-2-1



彼は扇風機に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に至った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に行った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に来た。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に出た。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に入った。 5-4-3-2-1
 彼は扇風機に帰った。 5-4-3-2-1



彼は消しゴムに寄った。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに行った。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに至った。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに帰った。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに戻った。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに来た。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに入った。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに上がった。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに出た。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は消しゴムに着いた。 5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (APart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



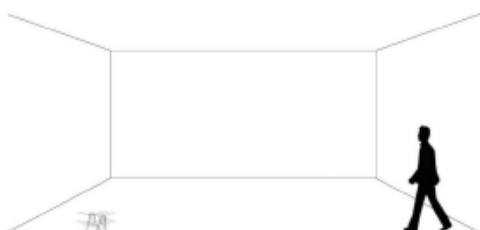
彼は体重計に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に行った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に来た。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に出た。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に入った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に至った。 5-4-3-2-1



彼は体重計に行った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に来た。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に出た。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に入った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は体重計に至った。 5-4-3-2-1



彼は物干し台上がった。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に至った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に行った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に来た。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に出た。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に入った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に戻った。 5-4-3-2-1



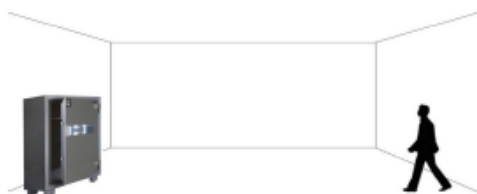
彼は物干し台上がった。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に出た。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に入った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に至った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に行った。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に来た。 5-4-3-2-1
 彼は物干し台に進んだ。 5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (APart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



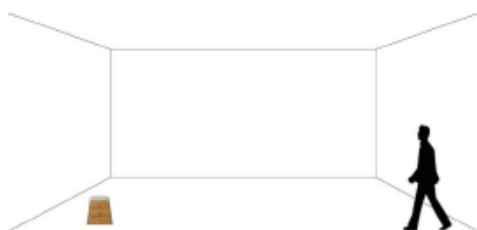
彼は金庫に行った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に来た。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に出た。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に入った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に至った。 5-4-3-2-1



彼は金庫に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に至った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に行った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に来た。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に出た。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に入った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は金庫に寄った。 5-4-3-2-1



彼は跳び箱に行った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に来た。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に出た。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に入った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に至った。 5-4-3-2-1



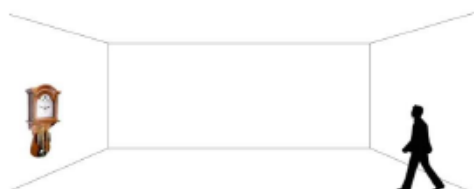
彼は跳び箱に来た。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に出た。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に至った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に入った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に行った。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は跳び箱に進んだ。 5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (APart)

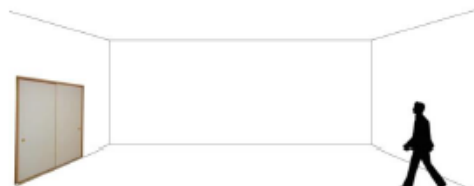
非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



彼は壁に寄った。	5-4-3-2-1
彼は壁に入った。	5-4-3-2-1
彼は壁に帰った。	5-4-3-2-1
彼は壁に戻った。	5-4-3-2-1
彼は壁に上がった。	5-4-3-2-1
彼は壁に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は壁に行った。	5-4-3-2-1
彼は壁に来た。	5-4-3-2-1
彼は壁に出た。	5-4-3-2-1
彼は壁に着いた。	5-4-3-2-1
彼は壁に至った。	5-4-3-2-1



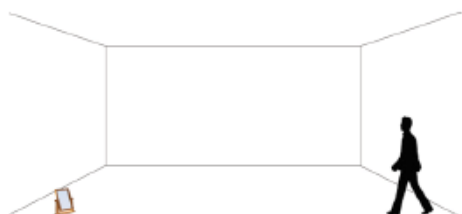
彼は時計に行った。	5-4-3-2-1
彼は時計に至った。	5-4-3-2-1
彼は時計に上がった。	5-4-3-2-1
彼は時計に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は時計に着いた。	5-4-3-2-1
彼は時計に来た。	5-4-3-2-1
彼は時計に出た。	5-4-3-2-1
彼は時計に入った。	5-4-3-2-1
彼は時計に寄った。	5-4-3-2-1
彼は時計に帰った。	5-4-3-2-1
彼は時計に戻った。	5-4-3-2-1



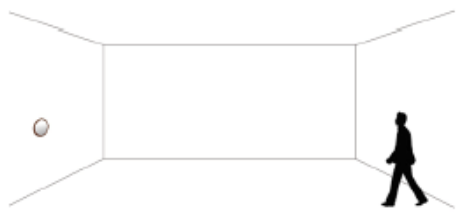
彼は押入れに行った。	5-4-3-2-1
彼は押入れに来た。	5-4-3-2-1
彼は押入れに出た。	5-4-3-2-1
彼は押入れに入った。	5-4-3-2-1
彼は押入れに帰った。	5-4-3-2-1
彼は押入れに戻った。	5-4-3-2-1
彼は押入れに寄った。	5-4-3-2-1
彼は押入れに上がった。	5-4-3-2-1
彼は押入れに進んだ。	5-4-3-2-1
彼は押入れに着いた。	5-4-3-2-1
彼は押入れに至った。	5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (BPart)

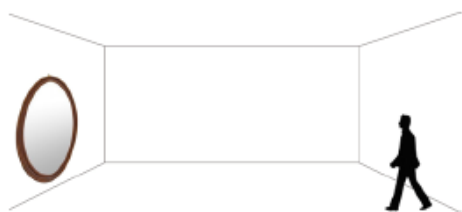
非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



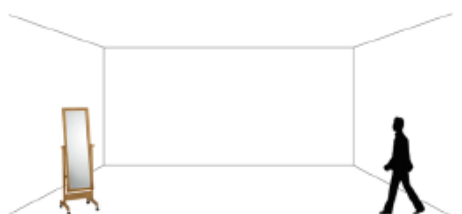
彼は鏡に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は鏡に寄った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に着いた。	5-4-3-2-1
彼は鏡に至った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に上がった。	5-4-3-2-1
彼は鏡に来た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に出た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に入った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に帰った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に戻った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に行った。	5-4-3-2-1



彼は鏡に上がった。	5-4-3-2-1
彼は鏡に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は鏡に着いた。	5-4-3-2-1
彼は鏡に帰った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に戻った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に行った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に来た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に出た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に至った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に寄った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に入った。	5-4-3-2-1



彼は鏡に来た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に出た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は鏡に着いた。	5-4-3-2-1
彼は鏡に至った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に寄った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に上がった。	5-4-3-2-1
彼は鏡に入った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に帰った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に戻った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に行った。	5-4-3-2-1



彼は鏡に来た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に出た。	5-4-3-2-1
彼は鏡に入った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に帰った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に着いた。	5-4-3-2-1
彼は鏡に寄った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に行った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に上がった。	5-4-3-2-1
彼は鏡に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は鏡に戻った。	5-4-3-2-1
彼は鏡に至った。	5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (BPart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



彼は窓に行った。	5-4-3-2-1
彼は窓に来た。	5-4-3-2-1
彼は窓に出た。	5-4-3-2-1
彼は窓に上がった。	5-4-3-2-1
彼は窓に寄った。	5-4-3-2-1
彼は窓に入った。	5-4-3-2-1
彼は窓に帰った。	5-4-3-2-1
彼は窓に戻った。	5-4-3-2-1
彼は窓に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は窓に着いた。	5-4-3-2-1
彼は窓に至った。	5-4-3-2-1



彼は窓に至った。	5-4-3-2-1
彼は窓に寄った。	5-4-3-2-1
彼は窓に出た。	5-4-3-2-1
彼は窓に入った。	5-4-3-2-1
彼は窓に帰った。	5-4-3-2-1
彼は窓に戻った。	5-4-3-2-1
彼は窓に行った。	5-4-3-2-1
彼は窓に上がった。	5-4-3-2-1
彼は窓に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は窓に着いた。	5-4-3-2-1
彼は窓に来た。	5-4-3-2-1



彼は脚立に行った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に来た。	5-4-3-2-1
彼は脚立に出た。	5-4-3-2-1
彼は脚立に入った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に帰った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に戻った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は脚立に着いた。	5-4-3-2-1
彼は脚立に至った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に上がった。	5-4-3-2-1
彼は脚立に寄った。	5-4-3-2-1



彼は脚立に行った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に来た。	5-4-3-2-1
彼は脚立に出た。	5-4-3-2-1
彼は脚立に入った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に着いた。	5-4-3-2-1
彼は脚立に至った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に寄った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に上がった。	5-4-3-2-1
彼は脚立に進んだ。	5-4-3-2-1
彼は脚立に帰った。	5-4-3-2-1
彼は脚立に戻った。	5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (BPart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



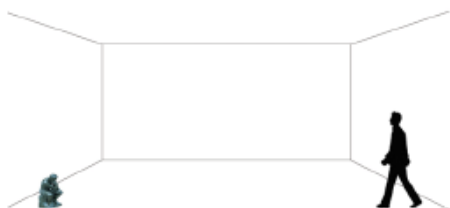
彼はカーペットに来た。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに出た。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに入った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに戻った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに至った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに行った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに寄った。 5-4-3-2-1



彼はカーペットに行った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに来た。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに出た。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに入った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに戻った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに寄った。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はカーペットに至った。 5-4-3-2-1



彼は銅像に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に行った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に来た。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に出た。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に入った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に至った。 5-4-3-2-1



彼は銅像に行った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に来た。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に出た。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に入った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は銅像に至った。 5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (BPart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



彼は椅子に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に来た。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に出た。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に入った。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に行った。 5-4-3-2-1
 彼は椅子に至った。 5-4-3-2-1



彼はエアコンに行った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに来た。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに出た。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに入った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに至った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに戻った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに寄った。 5-4-3-2-1



彼はエアコンに寄った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに行った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに戻った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに上がった。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに着いた。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに来た。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに出た。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに入った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに帰った。 5-4-3-2-1
 彼はエアコンに至った。 5-4-3-2-1



彼は冷蔵庫に行った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に来た。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に出た。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に入った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に至った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に上がった。 5-4-3-2-1

調査用紙サンプル (BPart)

非常に自然:5 やや自然:4 どちらでもない:3 やや不自然:2 非常に不自然:1



彼は冷蔵庫に行った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に来た。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に出た。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に入った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は冷蔵庫に至った。 5-4-3-2-1



彼は時計に進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は時計に入った。 5-4-3-2-1
 彼は時計に帰った。 5-4-3-2-1
 彼は時計に戻った。 5-4-3-2-1
 彼は時計に寄った。 5-4-3-2-1
 彼は時計に行った。 5-4-3-2-1
 彼は時計に来た。 5-4-3-2-1
 彼は時計に出た。 5-4-3-2-1
 彼は時計に上がった。 5-4-3-2-1
 彼は時計に着いた。 5-4-3-2-1
 彼は時計に至った。 5-4-3-2-1



彼は押入れに行った。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに来た。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに出た。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに入った。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに帰った。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに戻った。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに寄った。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに上がった。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに進んだ。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに着いた。 5-4-3-2-1
 彼は押入れに至った。 5-4-3-2-1

本調査へのご理解とご協力に深く感謝いたします。

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教官の今井新悟先生から、厳しくも優しい指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。そして、本論文の審査過程において、様々な御助言と御指導を賜りました、加納千恵子先生、木戸光子先生、ブッシュネル・ケード先生に深謝申し上げます。

この研究を論文として形にすることが出来たのは、貴重な時間を割いてアンケート調査に協力していただいた方々のおかげです。ご多忙にもかかわらず、アンケート調査に御協力してくださった孔炳奭先生、金アラン先生、宋智允先生、亀井厚子先生、泉丙完先生、吉川達先生、林伸一先生に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。そして、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた今井研究室の皆様と学部時代からお世話になっている李健相先生、曹紗玉先生、黄美玉先生にも深謝申し上げます。

最後になりましたが、これまで温かい目で見守ってくれた友人たちや家族に、深く感謝申し上げます。

2017 年 12 月

申貞恩